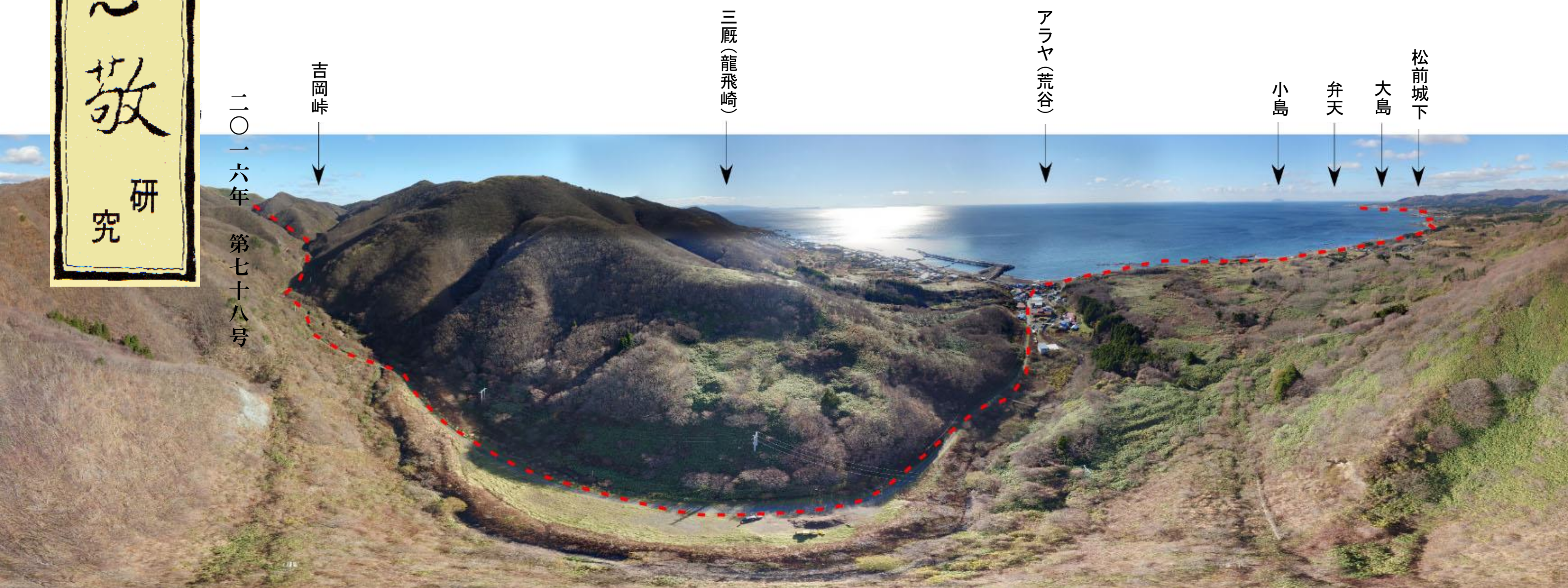




史料と伊能図

二〇一六年 第七十八号

伊能忠敬測量経路(蝦夷地測量帰路)
寛政 12 年(福島⇒吉岡峠⇒松前)



伊能忠敬は寛政十二年閏四月十九日、蝦夷地の地図を制作せよという幕命を受けて測量の旅に出た。この企画は、ほぼ真北に向かって伸びる奥州街道と、北海道東南岸の距離を計測して緯度一度の長さを求め、地球の大きさを推定する目的も持っていた。

決定が遅れたので、時間の都合から奥州街道は歩測ときめ、一日に約四〇キロを歩いて、五月十日津軽半島先端の三厩に着く。三厩で風待ち九日を空費して、十九日漸く出帆したが風が悪くて函館に直行できず、船は吉岡に着く。歩いて二二日函館へ。

蝦夷地東南岸を、会所・仮屋等に泊りながら、レブング、襟裳岬などの難所を経て根室近くのニシベツ（現在は本別海という）まで進む。鮭漁の最中だったので、人足や船が得られず、ここから引き返すことになる。

往路を逆に函館まで戻り、九月十六日福島につく。十七日吉岡峠を越え、荒谷で昼食のあと松前城下に到着。十八日には弁天の前山に登って、大島、小島を測量、午後風がいいので、松前侯の役船で三厩に向かったという。

表紙写真は福島（吉岡）在住の会員で中塚建設社長の中塚さんが、忠敬が歩いた福島から松前方面へのルートへ、吉岡峠からドローンを飛ばして、平成二十七年十一月十三日に撮影されたもの。測量線などを描きこんでおられるが、天候に恵まれて綺麗に撮れているので紹介させていた

撮影 中塚徹朗 文 渡辺一郎

伊能図大全より 松前～福島部分



九月十七日福島出立。昼食アラヤ、道法五里、松前城下、ハツ半頃に着……福島より一里程行吉岡、それより半里程行吉岡峠（白神峠と云う彼岸白カミ岬也）大峠なり
九月十八日……弁天の前山に登って大嶋小嶋その外測量。午中より風宜に付乗船出帆……
此日順風なれ共風静にして舟行尺どらず夜四ツ頃三厩へ着ぬ……

目次

78 号

表紙解説

伊能忠敬測量経路（蝦夷地測量帰路）

寛政12年（福島・吉岡峠・松前）

渡辺一郎

研究と話題

●江戸幕府日記を読む③

『寛政改暦』天文方仰付・関係者褒賞 前田 幸子

●伊能大図に記載されている地名等について 星埜 由尚

●佐原屋庄兵衛とは何者か 玉造 功

●愛媛県立図書館 久門家文書 解説（二） 伊藤 栄子・渡辺 一郎・高宮 勲

●伊能忠敬自筆 野取図帳 ―三浦半島一部― 前田 幸子

●連載 新説 伊能測量物語（再開） 渡辺 一郎

●第五話 第二次測量始まる 前田 幸子

●伊能忠敬 周辺の人⑤ 前田 幸子

●間宮林蔵 忠敬談話室

●小説 林蔵と秀蔵（下） 柏木 隆雄

●コラム 松平定信と文人 松宮 輝明

●ドラえもんが「伊能測量」を説明しました！ 戸村 茂昭

●伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて 河崎 倫代

―各地の記念碑・標柱等紹介（七） 戸村 茂昭

●三重県菰野町図書館で「伊能忠敬と菰野」 戸村 茂昭

という展示会が開催された！ 宮内 敏

●タイムトリップ 伊能忠敬 銚子に現れる 渡辺 一郎

●ニュース・会員便り・お知らせ 伊能 敏雄

忠敬先生没後200年記念事業について 室山 孝

伊能忠敬大河ドラマ化を目指して 51

加賀藩測量の足跡をたどる（五の二） 50

香取支部ニュース・路程車発見 49

伊能測量隊宿泊記念標柱除幕式・書籍等紹介・ 46

会員だより・二〇一六年度総会予告・他 44

42

40

39

36

28

22

20

14

10

4

1

江戸幕府日記を読む③

『寛政改暦』天文方仰付・関係者褒賞

前田幸子

高橋至時天文方就任

寛政七年十一月十四日

天文方被 仰付

大坂御定番

新規御切米百俵被下勤候内

安部摂津守組同心

御足扶持五人扶持御役扶持

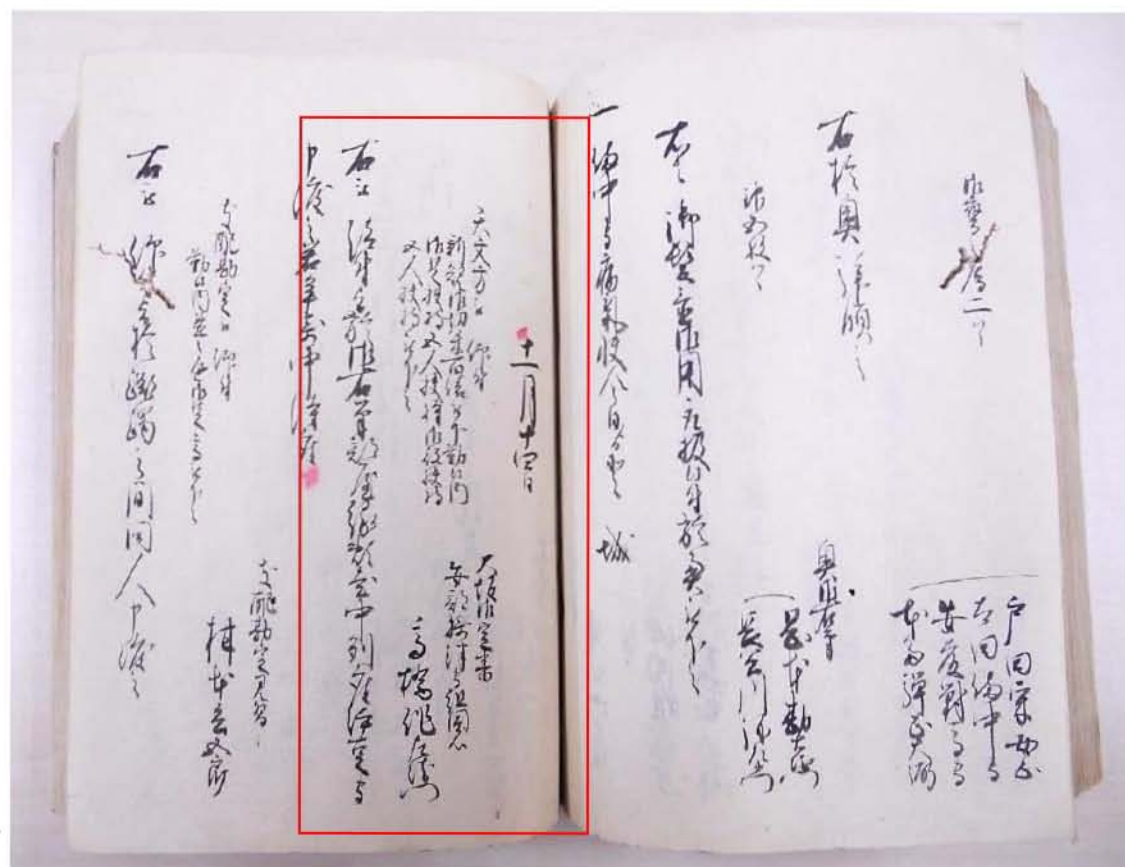
高橋作左衛門

五人扶持被下之

右被 仰付旨於御祐筆部屋縁頼老中列座伊豆守

申渡之若年寄中侍座

【備考】寛政の改暦は伊能測量事業の原点ともいえる。この改暦がなければ至時と忠敬は出会うことはなかっただろう。至時は天文方就任の翌日、將軍家斉に御目見した『天文方代々記』。その際の槍や大紋（式服）等の費用は全て忠敬が支弁したといわれる。（小宮山楓軒『懷宝日札』）



改曆関係者褒賞

寛政九年十二月廿七日

御座間

八丈縞十反

松平伊豆守

右者改曆御用取扱候付於御前拝領之

八丈縞五反

堀田摂津守

右同断取扱候付於奥拝領之

金貳枚

御勘定奉行

時服三

菅沼下野守

右者改曆御用京都町奉行之節相勤候付被下旨於芙蓉間列座同前同人申渡之

天文方

金五枚

吉田 靱 負

名代齋藤五太夫

同断

山路 才 助

同三枚

高橋 作左衛門

改曆之儀二付於京都御用相勤候付被下之

同

銀拾枚

奥村 郡太夫

名代高橋作左衛門

同断御用於当地取扱候付被下之

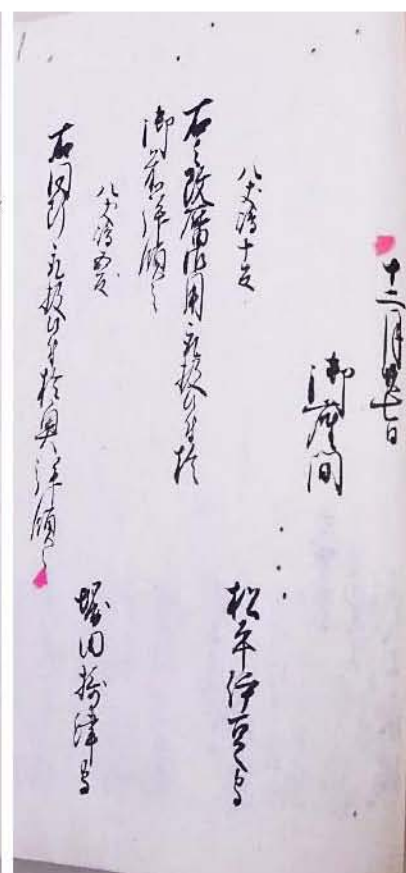
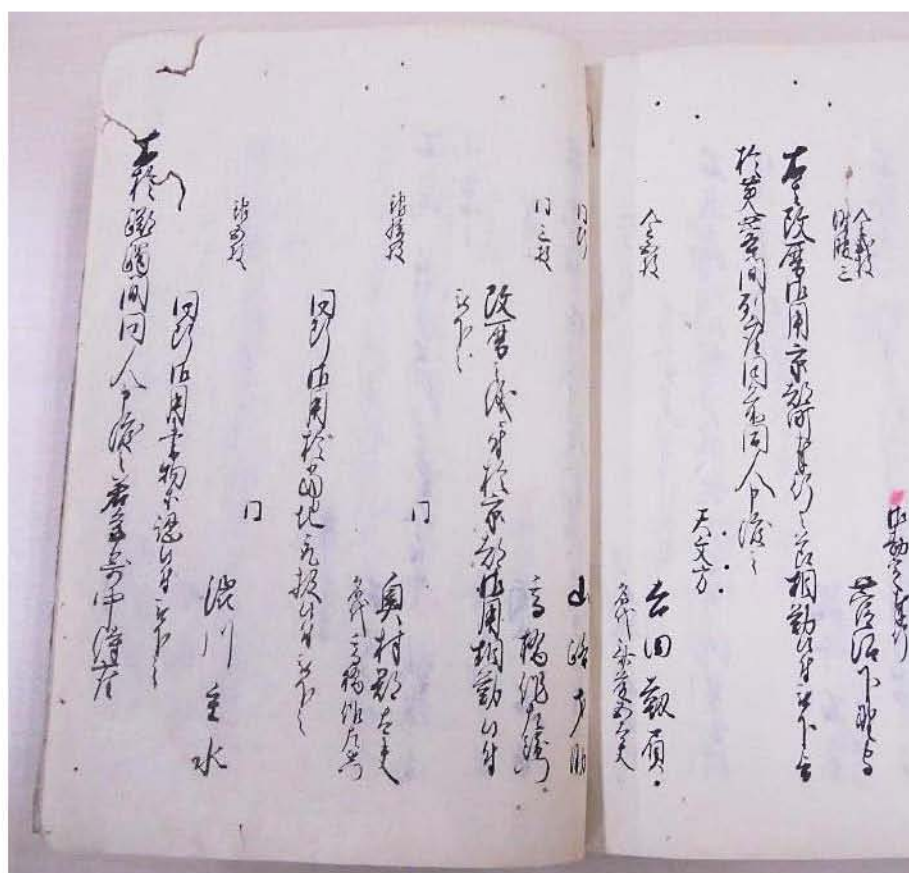
同

銀五枚

渋谷 主 水

同断御用書物等認候付被下之

右於躑躅間同人申渡之若年寄中侍座



小普請組

滝川長門守支配

銀三枚

小林 帶刀

右者改暦二付測量手伝相勤候付被下旨於同席
同人申渡之

奥御右筆

金巻枚

秋山松之丞

右改暦御用取扱候付於奥被下之

【備考】松平伊豆守（信明）は老中。堀田摂津守（正敦）は若年寄。勘定奉行菅沼下野守（定喜）は改暦当時の京都町奉行。小林帯刀は吉田靱負（秀升）の四男で旗本小林氏の婿養子。『天文方代々記』によれば秀升の子秀賢と秀民も改暦を助けた功でそれぞれ白銀十枚、金十両を賜った。

○『続徳川実紀』寛政九年十一月十八日「けふ令せらるるは。宝暦甲戌暦差錯あるにより。京都にして改暦宣下あり。来ん午年（※寛政十年）より新暦頒行はるべしとなり。」【寛政暦頒行】

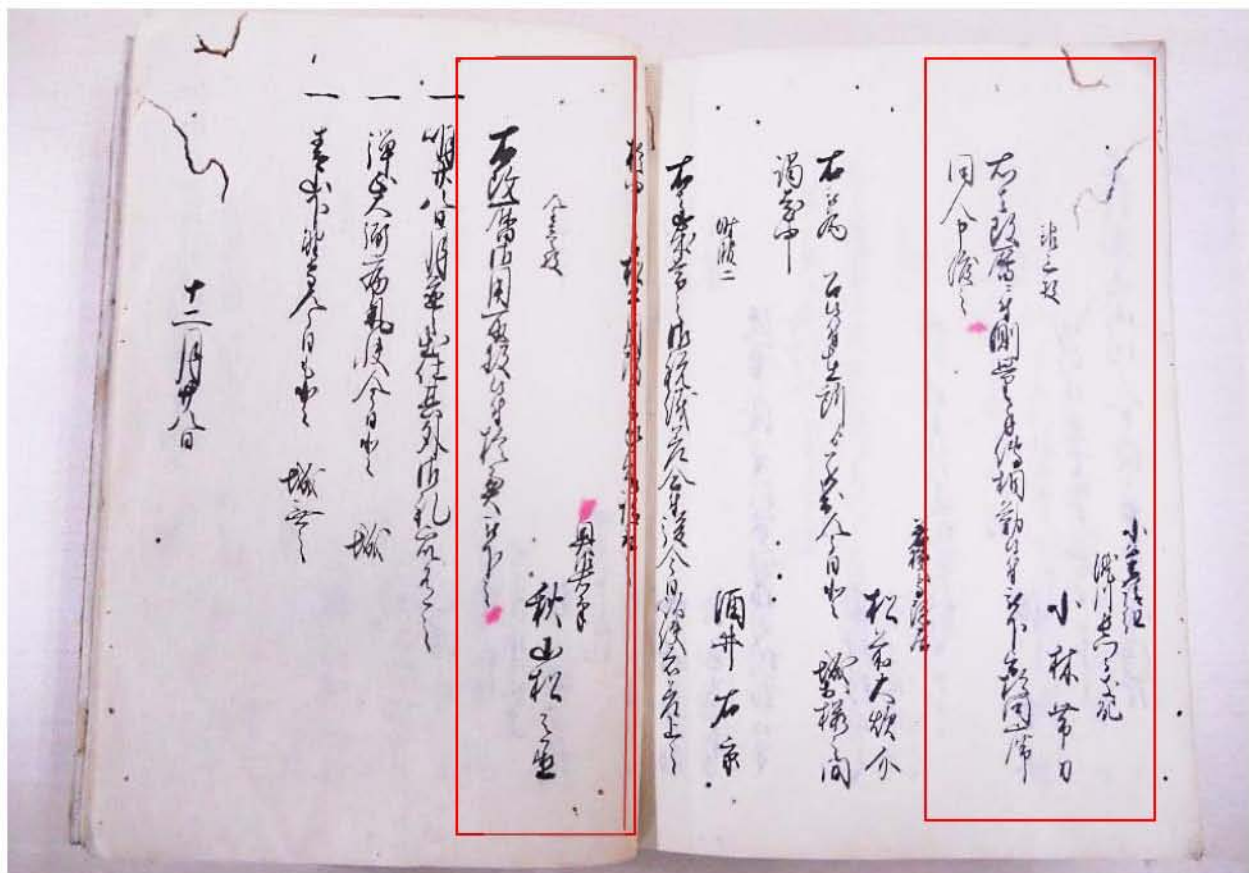
【江戸幕府日記】

「江戸幕府の諸役所で公務の内容を記録した日記類の便宜的な総称。現在、江戸幕府日記は内閣文庫に最も多く保存されている。種類・系統・年代のまちまちな各種の日記が含まれている。」吉川弘文館『国史大辞典』（抄）

※本稿の江戸幕府日記は国立公文書館・内閣文庫所蔵のものに拠った。

【徳川実紀】

「初代徳川家康より第十代家治までの江戸幕府將軍の事歴を中心に叙述した史書。第十一代家斉から第十五代慶喜までは『続徳川実紀』と通称されている。江戸幕府撰。」吉川弘文館『国史大辞典』（抄）



伊能大図に記載されている地名等について

星埜由尚

はじめに

伊能図には多数の地名等の注記が記載されている。これらの地名を主体とする注記を読み取り地名の索引を作成することは相当の作業を伴う困難な仕事であった。伊能図の正本である「大日本沿海輿地全図」は、明治6年の皇居の火災により灰燼に帰してしまった。そのため、伊能測量の根本成果である「大日本沿海輿地全図」の注記は、伊能測量隊が作成した副本、明治期に作成された模写本などに記載されている注記から判断せざるを得ない。

筆者は、平成18年に刊行された「伊能大図総覧」の著作・編集に関わり、そこに収載された以下の伊能図に記載された注記をすべて読み取りEXCELを用いてデータベースを作成した。使用した伊能図は、明治初期に陸軍が模写したアメリカ議会図書館蔵の伊能大図、内務省模写の国立国会図書館蔵伊能大図、海軍模写の海上保安庁蔵伊能大図、毛利家伝来の副本で山口県立文書館蔵の伊能大図、平戸松浦家伝来の副本で松浦史料博物館蔵の伊能大図、陸軍模写の国立歴史民俗博物館蔵秋岡コレクションの伊能大図及び東京国立博物館蔵九州沿海図大図である。このデータベースから「伊能大図総覧」の別冊「伊能大図総覧解説」に注記を分類して「各図地名一覧」及び「地名総索引」（本文中では「地名索引」と略称として掲載した。その後、平成25年に出版された「伊能図大全」においても、この地名索引が踏襲され収載されている。

この度河出書房新社から発刊された『デジタル伊

能図』においては、一連の作成作業の中でこれらの地名索引を前記の伊能図と再度照合確認し、さらに、江戸府内図に記載されている注記を読み取り、データベースに加え、それらが編集されて『デジタル伊能図』の地名索引として収載された。これらのデータは、東京カーポートグラフィック株式会社により図上における座標値を与えられ、地名による地名検索等が行えるよう加工されている。

筆者が作成した伊能図注記のデータベースについては、これまでその作成の経緯、注記についての特記事項、問題点、疑問点などについて明らかにしてこなかったもので、『デジタル伊能図』の発刊を機に、改めてその経緯等について述べたい。

伊能大図における注記の概要

伊能大図には、35,400余の町村名、字名、郡名、国名などの行政地名、河川名、山名、湖沼名などの自然地名のほか、寺社名、城名などの施設名、幕藩体制下の領主名などが記載されている。また、注記ではないが、宿駅、天測地点、湊、神社が記号で示されている。これらの注記は、どのような基準に基づいて表記されたのか明らかでないが、表記された地名などは、測線に沿った地域のみ地名等に限定されており、山名などについても測量中に実見できた山であり、測量調査により存在を確認したもののみが記載されている。

明治初期に模写した伊能図は、あくまで模写したものであり、正本の「大日本沿海輿地全図」に記載されていた注記がすべて転写されている保証はない。字の誤りなど誤写・脱落も当然あり得る。従って、模写図に基づいて伊能図の注記について述べることに限界がある。しかし、その限界を前提としても、

陸軍、海軍、内務省が正本の控図であった伊能家所蔵の副本から模写した図に記載されている注記に基づき、伊能図に表示されていた地名等の注記について論ずることは、意義があるものと考えられる。

注記データの読み取り

伊能図に記載されている注記を図番号、読み方、国名、郡名、村名、島名、山名、河川・湖沼名、海岸関係地名、寺社名、城下・陣屋、領地・知行所、関所、名所旧跡、橋、温泉に分類して各図ごとに読み取り、注記に付随する記号を宿駅、天測点、湊に分類して注記に付随する属性としてEXCELにより一覧表にまとめた。

個別の図幅の注記を見ると、注記が最も多いのは、京都を中心とした大図第133号である。800を越える注記がある。但し、この図幅は海軍が模写したもので、加工が著しく、国境が記入されているばかりでなく、国名や郡名の記載様式が異なっている。寺社の記載が多く、また、難読地名が多いのも特徴である。大図第133号に匹敵するのが大図第80号で江戸を含む図幅である。700を越える注記が記載されているが、大図133号と同様、寺社名の記載が多い。その他、第88図、第118図、第141図、第144図、第145図、第187図、第188図、第189図、第190図、第193図は、500を越える注記が記載されている。江戸周辺、濃尾平野、岡山周辺、九州佐賀・筑紫平野周辺の注記密度が高いことがわかる。

注記の分類と各説

1 行政地名

伊能大図には、蝦夷地を除き、すべてに国名、郡名、町村名及び集落名が表記されている。蝦夷地に

においては、松前藩等の和人居住地を除き、カタカナ表記を基本とするアイヌ語地名が記載されている。

(1) 国名

国名は、国の境界に隣接する国名が並列して表記されており、郡名を伴う(図2)。大図では、両国名の間に境界を示す記号等は存在しないが、中図、小図では国名が短冊形の囲みの中に書かれ、国の領域の適切な位置に表記されている。なお、中図、小図においては、国境は、朱の短い太線で境界を示している。

(2) 郡名

郡名も郡の境界に両側の郡名が並列して表記され、境界線の表記はない。大部分の郡名は、郡境に表記されているが、例外的に郡の飛地などがある場合、測線に沿って郡界が入り込んでいる場合、島嶼の場合など、村名や島名に郡名が冠られていることもある。なお、中図、小図では、国名と同じく郡名が短冊形の囲みの中に書かれ、郡境は朱の短い太線で示されている。

(3) 町村及び集落名

町村名は、測線に沿って直角の方向に縦書きで表記されている。家並の記号に対応する位置に町村名が表記されていることが多い。町村名は、□□村、○○町などと表示されているのが普通であるが、海岸の集落では△△浦がむしろ一般的である。△△濱と称される場合もある(新潟平野の海岸。リアス海岸が発達する宇和海の地域のように、下灘などと冠される浦地名(図1大図第171号)がある。この場合の下灘は、リアス海岸の湾奥の集落全体の総称となっている。少数ではあるが、伊勢国度会郡のリアス海岸の湾奥には、赤崎竈など竈といった集落が見られる(図2大図第131号)。また、□□湊と称される場合も

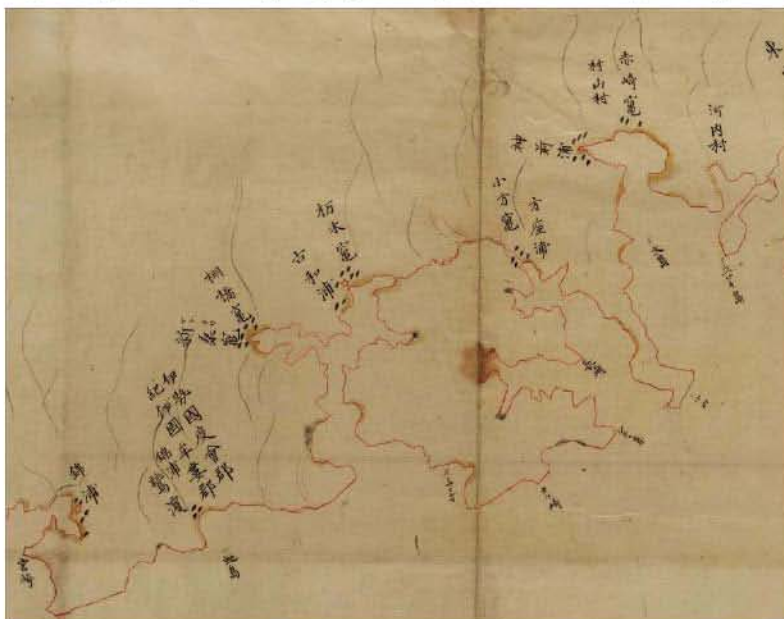


図2 大図第131号 尾鷲付近の竈地名



図1 大図第171号 下灘

多い。街道の宿駅は、○○宿と記載されている。あるいは、驛、市と称する場合もある。また親村から派生して形成された集落には□□村枝○○と表記されている場合が多く、○○村△△と単に集落名のみを表示している場合も多い。複数の村の入会地の記載も多く、一例を挙げれば、大図第88号川越の近傍には、差扇領十九ヶ村秣場との地名があり、領家村砂場、上大久保村砂場、上大久保村神田村領家村下

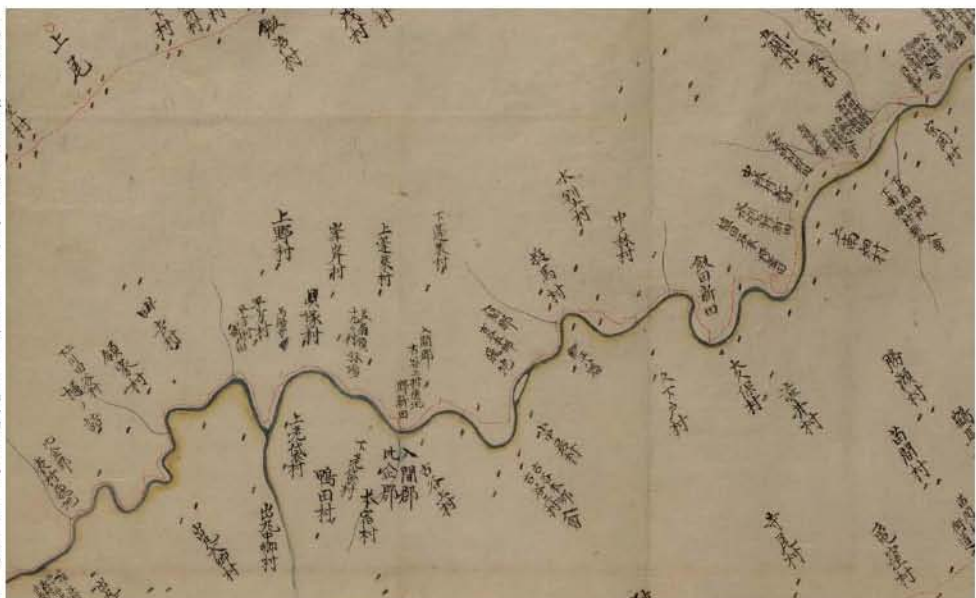


図3 大図第88号 川越付近の入会地名等

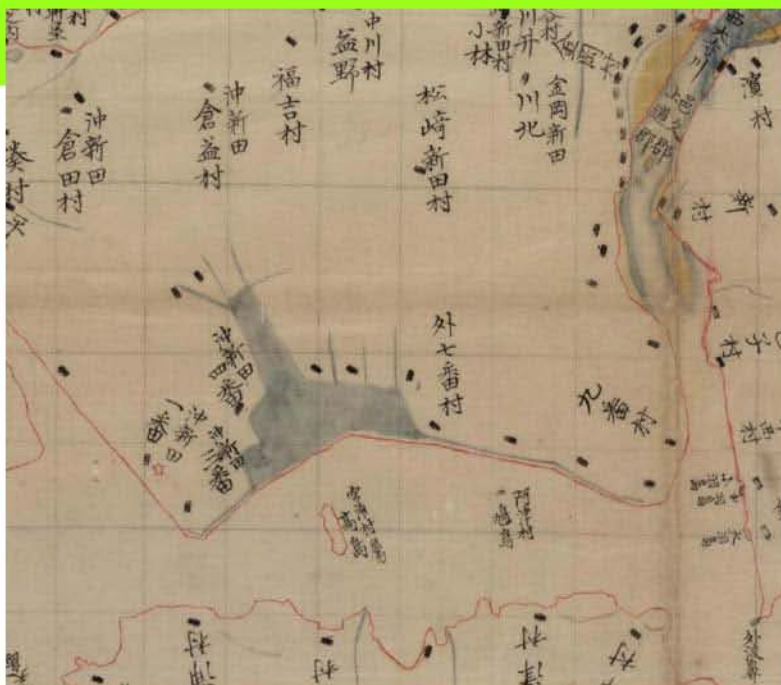


図4 大図第145号 岡山付近の新田地名

大久保村入會、古谷本郷飛地、古谷上村飛地野新田など新田地名や入会地名が多い(図3)。大図第126号の伯耆大山には、大山日野郡會見郡汗入郡八橋郡入會との記載があり、郡の入会地を示している。

新田開発により形成された村落は、××新田と表示されている。新田地名は、伊勢湾湾頭、木曾三川の下流及び河口、淀川河口、広島湾などに多数見られる。岡山児島湾干拓に伴う新田には、一番、九番などの干拓順序を示す地名が見られる(図4大図第145号)。広島湾の太田川三角州の新田は、新開と呼ばれている。熊本の新田には、二町村、五町村、八町村、式拾町村があり、これも新田開発の順序である(大図第126号)。

地方によっては集落に特別の呼称がつく場合がある。○○門、△△郷、□□名などがこれに当たる。○○門は、九州日向の耳川、五ヶ瀬川などの上流山地に多い。例えば、五ヶ瀬川上流の鞍岡村日向門・日添門、耳川上流の山陰村仲瀬門大図第184号などである。△△郷は、秩父の大宮郷(大図第98号)、富士山麓の穴原郷、大宮郷、村山郷(大図第100号)、八丈島の大賀郷(大図第105号)、徳川家の故地、松平本郷(大図第115号)などである。美濃国石津郡には、牧田村和田郷、多良村鍛冶屋郷、市之瀬村町家郷などの地名がある一方、時郷堂ノ上村など郷と村の先後関係が逆の地名も見られる(大図第118号)。山城国葛野郡小野郷杉坂村、上村、下村(大図第126号)も同様の例である。

○○組と付けられる集落も見られる(大図第173号津田村部符組など)。分と付けられる集落名も見られる。大図第96号の信州松本の桐原分、松本分などのほか、大図第176号萩の椿郷西分大屋、椿郷西分松本などである。大図第176号周防國佐波郡には、村の上位呼称として令がある。東佐波令國衙村、西佐波令地方村などである。島原半島(大図第196号及び202号)には、名とつく集落名が多い。例えば、嶋原村柏野名である。長崎の茂木村にも名がある。長崎には郷と称する集落も多い。単独で称する場合もあり、浦上村山里馬込郷のように村の属地名である場合もある。

また、地域全体の呼称として自○○至△△惣(総)号(名□□と記述する例もある。例えば、九州山地椎葉の自笹ノ峠至胡桃峠惣号椎葉山(図5大図第194号)。



図5 大図第194号 椎葉

九州東岸日豊海岸の総号蒲江浦、総号入津浦、総号米水津浦(いずれも大図第128号)などである。五島列島福江島には、かつて三井楽町があったが、大図第207号には惣名三井楽と記載されている。惣号とは記載されないが、南三陸の自追波濱至小滝濱日十三濱(大図第98号)、越後の自上荒濱至直海濱日才濱(大図第76号)などの例もある。

日□□、世日○○、共日△△と通称の地名が付記されていることがある。各地の例を列挙すると、大図第80号には、糸魚川近く到大町村日名立駅があり、大図第98号の信州中山道和田峠を挟み、和田宿峠茶屋が世日和田餅屋、下原村餅屋が世日諏訪餅屋とそれぞれ付記されている(図6)。飛騨地方では、大図第112号に記載されている無数河村は、世日久々野宿と付記されており、大図第113号の湯之島村は、世日下呂と付記されている。美濃地方の大図第114

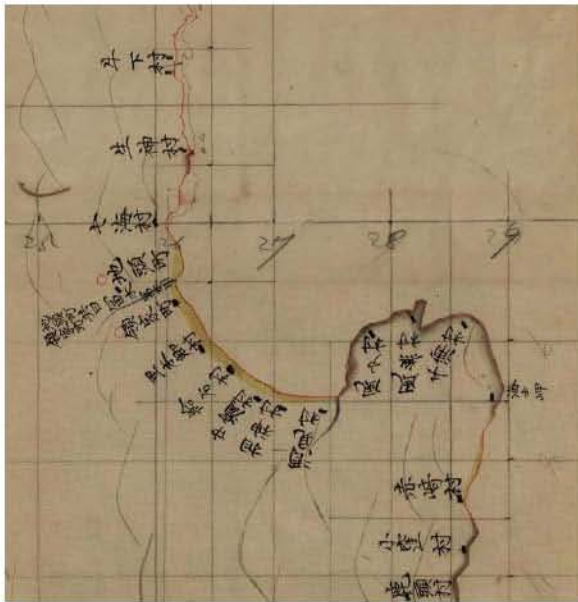


図7 大図第84号 富来

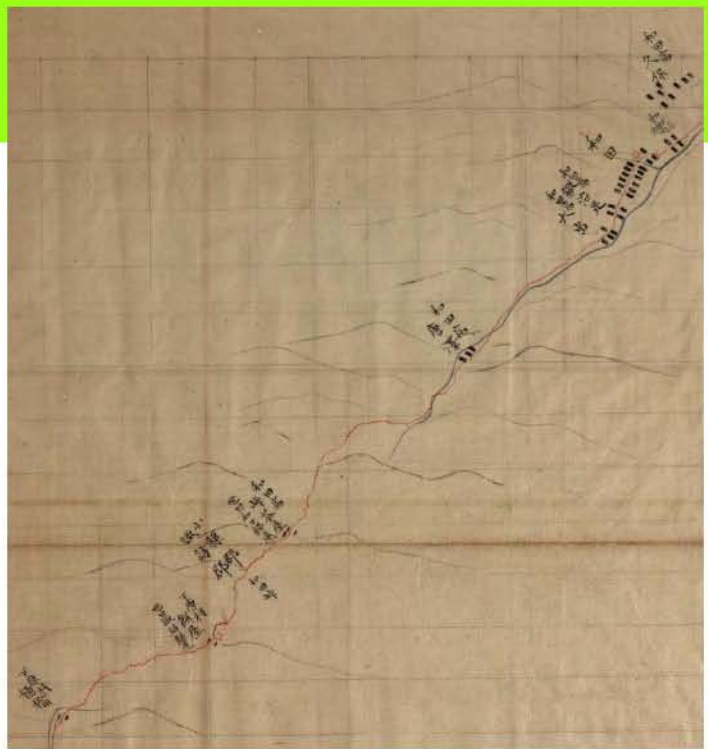


図6 大図第96号 和田峠

号には、前野村持東野新田又日五軒茶屋伊呂波茶屋と記された集落がある。大図第111号に含まれる兵庫加西市北条は、寺内村市場村世日酒見北条と付記されている。また、同図中の山崎は、世日穴栗と記されている。ここは、現在兵庫県宍粟市の中心である。大図第173号には、周防國玖珂郡本郷村本郷市世日山代本郷があり、大図第188号の日田市中部に当たる陣屋廻村には、世日日田と付記される。また、同図には、戸畑村下山筋平島と言う集落があるが、これは、世日平川と記され、現在名は平川である。大図第190号の岩屋河内は、陶磁器で有名な有田であるが、世日皿山と付記されている。陶磁器だから皿山であろうか。大図第193号関村関町は、世日南関と記されている。現在ここは、熊本県南関町であり、江戸時代からの通称が町名となっている。同じく菊池川に沿う湯町は、世日山家と記されており、現在は、山鹿市である。湯町は山鹿温泉である。大図第199号の宮丸村は、日都ノ城と付記されている。現在の都城市である。大図第208号の大口盆地に位置する南榎原村は、世日大口驛と付記されており、現伊佐市(元大口市)の中心市街地である。共日△△などと記されている例も存在する。例えば常陸国上山村と成田村は、共日夏海と付記されている。ここは、現在神山村と成田町が現存するが、夏海の名は、日本原子力研究開発機構大洗研究開発センター構内の池の名前に残っている。能登半島の地頭町領家町共日富木(大図第28号)は、地形図には、富来領家町、富来地頭町と記載されている(図7)。

2 自然地名

(一) 山名

伊能大図には、鳥瞰図風に山並みが描かれている。伊能測量では、高さについての測量は行われなかつ

たので山の高さについての記載はない。山並みの描き方は、図案的な描き方であるが、山名の記載されている山は、望見したときの印象で描かれているように見える。山島方位記に記載されている山と山名の記載されている山との関係について検討していないので、断定はできないが、陸軍模写のアメリカ大図では、山名の記載されている山は、朱の十字印がつけられているので、交会法の目標とされた顕著な山であると考えられる。

山名は、現在呼称されているものとは異なっている場合も多く、例えば、日光連山の男体山は中禅寺

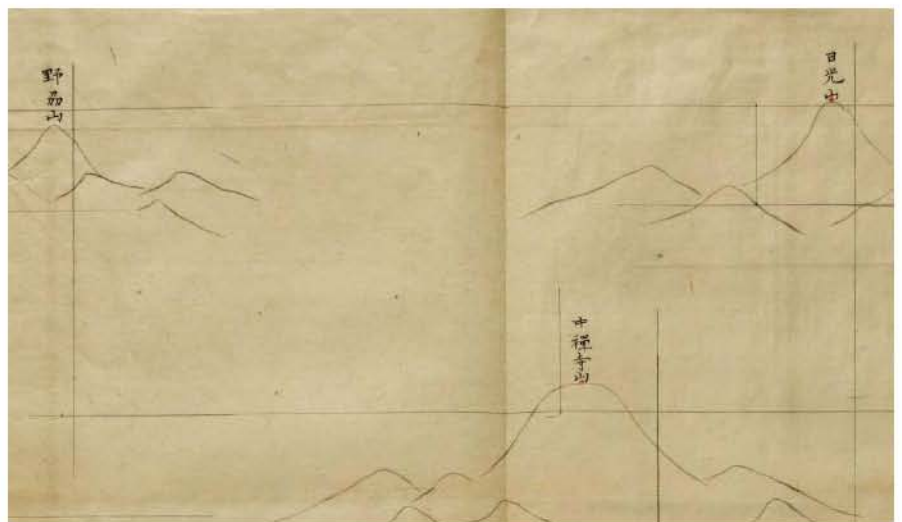


図8 大図第78号 日光連山

山、奥白根山は野苅山、女峰山は日光山と呼ばれている(図8)。山名には、遠見と古城が多い。特に、九州の壹岐(大図第191号)、対馬(大図第192号)、長崎(大図第202号)には、遠見の注記が見られる。異国船などを見張る場所であったと考えられる。三陸の綾里にも遠見番処と記された場所があり、測線が達している(大図第45号)。

(2) 河川・湖沼名

河川の名称は、大河川には付記されているが、大多数の小河川には河川名は付けられていない。付けられていても例外的である。湖沼名も大きな湖沼については、名称が記されているが、多数の小湖沼については、特に名称は付記されていない。

(3) 島名・岬名

大小様々な島の大部分に島名が記載されている。岬名も数多く記載されている。伊能図は、「大日本沿海輿地全図」という正式の標題からも海岸部についての地名についてはできるだけ詳細に記そうとしたことがわかる。○○属□□島、○○郡□□島、○○村□□島などと属する郡、村、島などの名称が付記されていることが多く、行政的な島の所属関係を示している。瀬戸内海の諸島の例を挙げると、大図第141号の家島諸島は、姫路領家島以外の島には、家島属と付記されている。大図第145号の中には、井島と称する小島があるが、此島は島が備前国と讃岐國に二分されており、備前側には、備前国児島郡胸上村属石島と記され、讃岐側には直島属牛(井の誤り)島と記される。大図第146号の大槌島も讃岐國香川郡笠居村と備前國児島郡日比村に二分されている。大図第151号の塩飽諸島の島々には、島名に塩飽と付記されている。

大図第161号の四国西南端の離島沖ノ島は、宇和

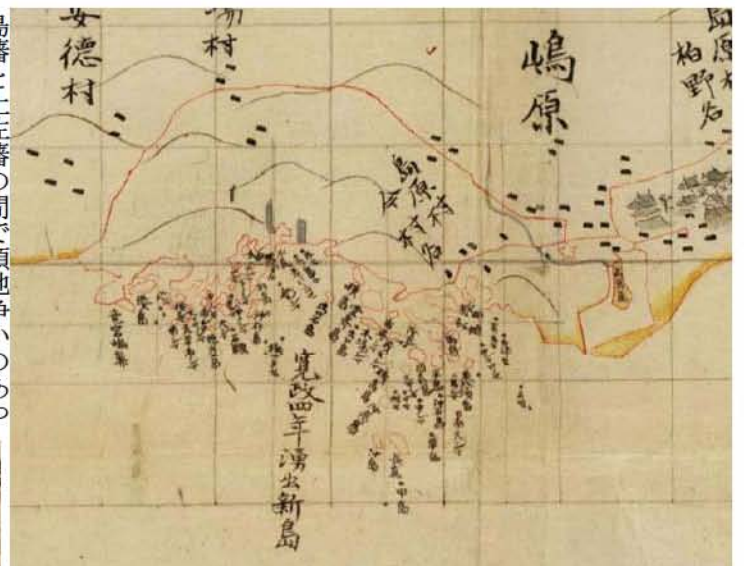


図9 大図第196号 寛政4年湧出新島

された寺社の例が非常に多い。一宮や有名寺院などには主要測線から分岐する突き出しの測線を設け、その位置を地図上に明記している。寺社名も多く記載されており、寺社を重視していたことがわかる。寺社の測量調査について、幕府から特別の指示があったのではないかと推測させるほどである。寺社名の多いのは、西日本の図幅であり、特に京都(大図第133号)、奈良(大図第134号)などに多い。大図第88号(江戸)にも多数の寺院名が記されている。下谷・浅草、本郷・駒込界限には、特に寺院が密集している。神社も西日本の図幅に多数記載されており、大部分の一宮は測線が社前まで延びている。特に大図第155号及び第162号(出雲地方、宍岐・対馬(大図第191号及び192号)は、多数の神社が記載されているのが特徴である。

大図第192号には、対馬府中(対馬藩城下)に以酩庵

島藩と土佐藩の間で領地争いのあったことで有名であるが、土佐國幡多郡と伊豫國宇和郡に二分されている。大図第196号の鳥原の前面の海には、小島が無数に描かれているが、これは、寛政4年の「鳥原大変肥後迷惑」の異変による巨大な山塊崩落により形作られたものである。すべての島に名称が付されている。「寛政四年湧出新島」と注記されている(図9)。大図第209号の桜島の北側の錦江湾中には、「安永八年湧出新島」と付記された島が描かれている。

3 寺社名

幕府直轄となった第4次以降の伊能測量においては、その位置を測量

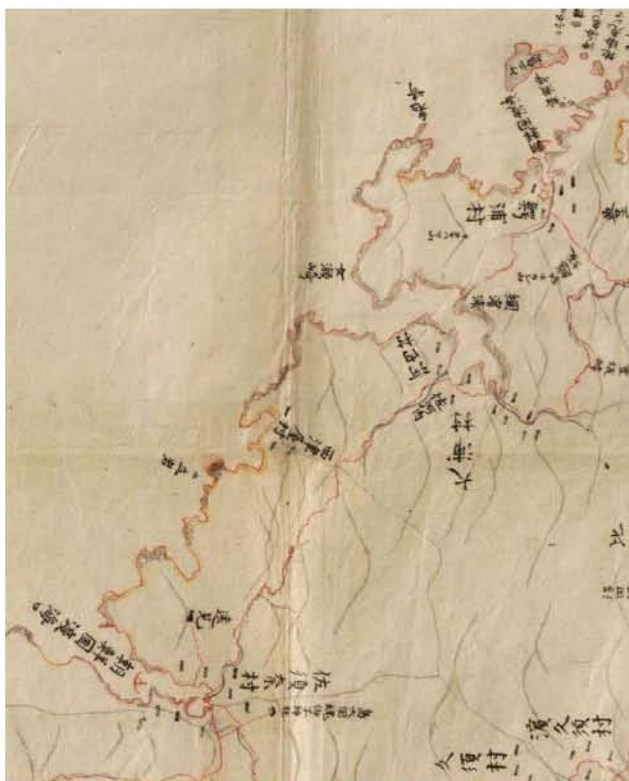


図10 大図第192号 対馬朝鮮国渡海

という寺院が記載されている。これは、朝鮮外交の施設でもあった。以訖庵には、京都五山の僧が輪番制で外交顧問として詰めていた。また、対馬北端の鰐浦村と佐須奈村には、朝鮮国渡海との注記があり、対馬の朝鮮との外交における特別な位置を示している。

4 領主名・城主名


内務省模写の国会大図には、各村の領主名が村名に添えて記載されている。陸軍模写のアメリカ大図には大図第111号などを除き、領主名は省略されているが、城主名として大名の氏名が記載されている例も多く、交代寄合の旗本在所に氏名が記載されている場合もある。幕藩体制の基本として領主名は必要不可欠な情報であり、「大日本沿海輿地全図」には、当然記載されていたと考えられる。

5 名所旧跡ほか

当時有名だった名所旧跡も記載されている。例えば姥捨山(大図第82号)には、測線が到達する先には、月見堂、田毎月、姥石などと記されている。各地の温泉には、温泉と付記されている所もあり、大図第196号には、雲仙の温泉湯壺、大図第202号には、小浜温泉の温泉湯壺との注記がある。

長崎には、出島、阿蘭陀屋敷、新地唐人荷物蔵、立山、臺場、御番処など外交、貿易の窓口としての施設名が記載されている(大図第88号)。

交通に係る注記に触れると、江戸の荒川、中川には、舟渡、渡場などと記された場所が多く(大図第88号)、橋が少なかった当時の重要な渡河手段であったことがわかる。大阪の大川には、天満橋、天神橋、難波橋の浪華三三橋が描かれている(大図第136号)。江戸の隅田川には、永代橋、大橋、両国橋、大川橋、千住の大橋が描かれ注記が施されている(大

図第88号)。大図第88号にのみ表示されているのは、江戸城御門である。また、四谷大木戸、高輪大木戸も記載されている。各地の関所も記載されている、箱根、仙石原、根府川、新居、氣多、猿ヶ京、木曽福島などのほか、ヶ所の関所が記載されている。

村名の読み方

注記は、カタカナ表記の場合を除き、読み方の難しいものが多数ある。村名については、長野県地名研究所の編纂による「地名研究必携」によりその読み方を引用した。「地名研究必携」は、長野県地名研究所を主宰されている滝澤主税氏の労作である。滝澤氏は、国立公文書館所蔵の天保郷帳に記載されている村名等のデータベースを作成され、すべての村名の読み方を明らかにされた。「地名研究必携」の存在がなければ、筆者の伊能大図地名データベースは、かなり不完全なものにならざるを得なかったので、「地名研究必携」については、特に触れておかなければならない。

「地名研究必携」は、天保郷帳に記載された64,000を超える国名、郡名、村名を明治以降の村名の変遷及び現在の市町村名をつけて一覧表にまとめたものである。「地名研究必携」の刊行後、「日本地名分類法」が同じく滝澤主税氏により発刊されており、「東日本編」「西日本編」「総索引」の三分冊となっている。これらの著作は、私家版に近い限定された出版であるため、その存在は、必ずしも十分に知られていない。筆者は、これらの著作はより活用されるべきであると考えて特にここで紹介する次第である。

村名と集落名の読み方については、このほか地元役所に問い合わせることも行った。その結果読み方の判明した地名も多々ある。

江戸府内図の注記

江戸府内図は、第8次までの全国測量終了後、第9次伊豆七島測量とほぼ並行して行われた。江戸府内測量の成果により、それまでの測量成果を江戸でつなげることができた。江戸府内図は、街路の測量成果であり、一種の街路図であるので、地名等の注記は街路に沿う情報が記載されている。江戸府内図に記載されている注記は、江戸郊外の村名、江戸市中の町名、寺社名、大名旗本の屋敷名、幕臣の居住地名、橋名など、詳細である。町名は、丁目まで記載され、寺院の門前と記されている町も多い。

おわりに

伊能大図の地名データベースを作成したのは、平成17年のことであり、その後、誤読・脱落などの修正も施したが、10年の歳月がたち、この度「デジタル伊能図」の刊行により、改めて点検・確認したのを機会に、伊能大図の地名について気がついたことを思いつくまに述べたのがこの報告である。伊能大図の地名についての体系的な考察では全くないが、そのつもりでご一読願いたい。山名、寺社名、難読地名などについては、稿を改めて解説したいと思っている。なお、「デジタル伊能図」は、高価なものであるため、購入を躊躇される方も多くおられると思われる。私が作成した伊能大図及び江戸府内図の地名データベースは、「デジタル伊能図」の中では編集されて収納されているため、私の作成した原データを参照したいという方には、商業的利用以外の研究に役立てていただければ、自家使用に限って提供させていただきたいと思っている。ご希望の方はご連絡ください。

佐原屋庄兵衛とは何者か

玉造 功

一 はじめに

『伊能忠敬江戸日記』の文化四年三月の記事には、
 厳島図などの特別地域図の完成に關係して佐原屋庄
 兵衛が登場する。抜粋すると、

・三月 朔日「厳島 天橋立図 琵琶湖図持参曆局へ
 行く。」

・三月 四日「佐原屋庄兵衛来る。」

・三月 七日「佐原屋庄兵衛画図持参。」

・三月十三日「佐原屋厳島画持参。」

・三月二十九日「厳島 天橋立 琵琶湖 浜名湖持参、浅
 草御役所へ行く。」

この佐原屋庄兵衛については、佐久間達夫は「川
 船積問屋」としている(注一)。確かに、文政七年(一
 八二四)に出版されたガイドブック『江戸買物独案内』
 にも「箱崎町二丁目、十組 奥川筋船積問屋、佐原屋
 庄兵衛」と掲載されている。では、奥川筋船積問屋
 とはどのようなものか。



図1

『江戸買物独案内』から佐原屋庄兵衛
 (国立国会図書館デジタルコレクション)

二 奥川筋船積問屋としての佐原屋庄兵衛

江戸幕府成立後、江戸の経済を支えたのは、京・
 大坂を中心とする上方から入ってきた「下り物」と
 呼ばれた商品であった。江戸時代も半ばを過ぎると
 関東の農村地域でも商品生産が成長しはじめ、醤油
 のように上方産に取って代わるものも現れ、十八世
 紀後半から十九世紀にかけて江戸と関東農村地域を
 経済的に結ぶネットワーク(江戸地廻り経済圏という
 が成立していく。関東各地にはその地方の特産品を
 生産・集荷して江戸に送る一方、江戸からの商品を
 周辺農村地帯に卸す郷町(在方町)が発展していっ
 た。利根川水系の水運

も、年貢米を江戸に回漕
 するだけにとどまらず、
 様々な商品の双方向の
 流通ルートとして発展
 していった。このよう
 な江戸と関東各地の河
 岸を結ぶ水運の結節点
 となったのが奥川筋船
 積問屋である。

川名登の『河岸』(法
 政大学出版局)によると、
 江戸に入津した高瀬船
 の荷物は舁下(はしけし
 た)船宿(舁下問屋)の小
 舟に積替えて江戸市中
 の送り先へ届けられた。
 荷物を下ろした高瀬船
 はそれぞれの奥川筋船
 積問屋に向かった。奥川

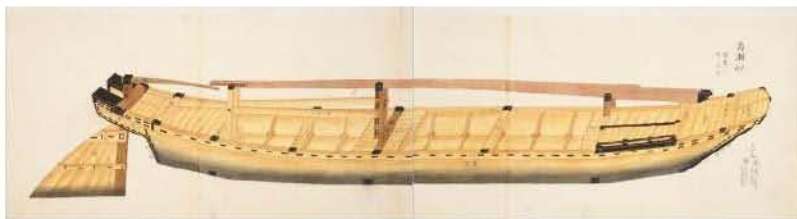


図2 『船鑑』から高瀬船図

(国立国会図書館デジタルコレクション。高瀬船図の左右二図から作成)

筋船積問屋の業務は江戸の諸問屋などの荷主から関
 東・奥羽・信越へ送られる荷物を引き受け、江戸で
 荷下ろしした高瀬船に積み込み、各地の河岸問屋に宛
 てた送状を添えて送り出すことであり、荷物の送り
 先方面ごとに船積問屋が決まっていた。各河岸では
 依頼する船積問屋がいくつか決まっており、船積問
 屋もまた複数の河岸を担当していた。

佐原河岸は他の河岸と異なり佐原屋庄兵衛だけを
 積問屋とし、佐原屋庄兵衛もまた佐原河岸だけを積
 場所としており、一対一の対応関係にあった(注二)。
 天保五年に火災にあった佐原屋庄兵衛は、再建にあ
 たって佐原商人仲間から四十両を借りている。この
 ような密接な関係からか、佐原村から高瀬船で江戸
 に廻漕された物資の多くは箱崎町の佐原屋庄兵衛に
 着船して荷物を下ろし、佐原屋庄兵衛配下の茶船な
 どの小船に積替えて江戸各地の送り状の相手方まで
 配送された。



図3 『船鑑』から茶船図

(国立国会図書館デジタルコレクション)

江戸から佐原河岸へ送られる荷物もまた佐原屋庄兵衛が引き受け、空になった下りの高瀬船に積込み佐原河岸へと送られた。ただし、船積問屋自らが廻船業にたずさわることではなく、船賃(注三)は荷主側(佐原商人仲間など)と船主側の間で決められた。船積問屋は船賃の割を船積みの口銭として積船から受け取った。

河川水運ではしばしば事故が起こった。利根川で起こった難船事故については佐原の商人仲間が処理したが、関宿の関所から南の江戸川方面での難船事故については佐原屋庄兵衛が佐原商人仲間の代理として対応した。江戸川の市川字柳原川岸で発生した佐原村の権次郎船の事故では、佐原屋庄兵衛が各荷主ごとの積荷の被害状況を

「伊藤藤蔵様分

一、御荷物拾得、

内四樽無難

内五樽少々濡

内六樽大濡」

などと佐原商人仲間に報告(注四)している。

佐原屋庄兵衛はまた船宿を兼ねており、佐原の商人、船頭たちが宿泊した。後に伊能茂左衛門景晴(伊能節軒一八〇八〜八六)は「江戸佐原商人ワ積問屋箱崎町式丁目佐原屋庄兵衛江泊、宿賃銭貳百文ツ」と記録している(注五)。さらに佐原の商人の様々な相談にも応じ、佐原河岸の河岸問屋をめぐる対立について佐原屋庄兵衛が仲裁したこともある(注六)。

三 佐原屋庄兵衛と伊能三郎右衛門家

佐原屋庄兵衛は当然のことながら伊能三郎右衛門家の薪、米、清酒などの荷も扱っている。伊能忠敬は酒造業をめぐるトラブルのおり、その詰問状に「佐

原屋庄兵衛方の帳面を糺」せば「早速相分申候」としている(注七)。佐原と江戸の間の物資の運送については、佐原屋庄兵衛が窓口として記録をしているのであるから、「佐原屋庄兵衛方の帳面」が証拠となるということである。

ところで、『伊能忠敬書状 千葉縣史料』(以下『伊能忠敬書状』)には、佐原にいる娘の妙薫にあてた手紙が多いが、薪、米、清酒以外にも味噌、ひしお、納豆、らっきょう漬などから好物の紫蘇巻唐辛子にいたるまで船で送るように指示した文面を見ることが出来る。伊能忠敬の江戸での商売や生活に必要な物資は、佐原河岸からの舟運で運ばれたのであり、その窓口は佐原屋庄兵衛であった。



図4 「江戸実測図 南」から黒江町・亀島町と箱崎町
(国土地理院HPの古地図コレクションから作成)

伊能忠敬の『江戸実測図(南)』を見ると、箱崎町二丁目の佐原屋庄兵衛の船積問屋は伊能忠敬が住む黒江町や亀島町と至近距離にあることがわかる。伊

能忠敬にとつて佐原屋庄兵衛は便利な場所にいた。

ときには佐原河岸以外からの荷物も運ばれてくる。第八次測量中に佐原の家族から依頼のあった備後置表について、備後出身の内弟子箱田良助に発注するように申付けた。箱田良助の父親の細川園右衛門と親類の谷東平(注八)の世話で、「量数三十三量」を備中から幕府の浅草御蔵に行く御城米(天領からの年貢米を積んだ船に乗せた。佐原屋庄兵衛に着船するので引取り、代金についても船の宰領上乘に佐原屋庄兵衛から渡すようにと指示している(注九)。

四 飛脚便の窓口としての佐原屋庄兵衛

『伊能忠敬江戸日記』の文化四年十二月十六日に「此日佐原屋へ佐原書状出す」、十二月十九日に「此日も佐原屋へ書状出す。飛脚佐兵衛屋立の由。」とある。このように、佐原屋庄兵衛は船の荷物だけではなく、飛脚を使って江戸と佐原間の手紙や軽い荷物を配送する窓口でもあった。この場合も、佐原商人仲間が飛脚便を運営する荷宰領との間で料金などの詳細を取り決め、佐原屋庄兵衛が江戸側の窓口となった(注十)。安政二年の荷宰領と佐原商人仲間の間の取決め(注十一)によると、三と八の付く日が「佐原屋帳面〆括」で江戸側の受付締切日になり、「四九之日早朝江戸出立」となった。月に六往復の定期便であったが天候等により遅延したり問題を起こすこともあった。

伊能忠敬も飛脚をめぐるトラブルに巻き込まれたことがある(注十二)。佐原の妙薫からの書状や衣服を十八日の夜に飛脚が届けた。ところが書状に「府中屋証文」も一緒に送ったとあるが見当たらない。そこで、忠敬は「御文を繰返し又ハ衣服包の渋紙、衣服迄も相改候得共、相見へ申さず、大ニ氣を痛

こととなった。早速翌十九日の朝、佐原屋へ伊八を差遣わして、「飛脚ヲセンギ」したところ「飛脚方取落し」た事が判明し、伊八が持ち帰ることができた。そこで伊能忠敬は娘に対し、大切な書類を飛脚に預けるのは宜しくない。急ぐ書類ではないので妙薫が出府する折りに持参すべきであると叱っている。

五 伊能忠敬測量隊と佐原屋庄兵衛

全国測量のあいだ、伊能忠敬と佐原の家族の間ではどのように手紙の遣り取りをしていたのであろうか。

具体例を見てみよう。文化十一年四月二五日付高橋景保宛の御用状(注十三)は、第八次測量中に江戸帰着の日程について高橋景保に伺いをたてたものである。その中に、このたびも佐原に書状を送りますので、毎度御世話をおかけしますが箱崎町二丁目佐原屋庄兵衛まで御届け下さるようという文面がある。このとき佐原の妙薫と嫡男の景敬の妻リテに送られた書状が『伊能忠敬書状』一一九である。内容は五月廿一日、廿二日頃に帰着するので深川留守宅の準備をするようにというものである。

高橋至時が麻田剛立同門の西村太冲を紹介した書状(注十四)の中に、「御国元への御状、両通とも即日箱崎の佐原屋方へ為持遣し申候。」とある。各地から出された佐原の家族宛の手紙は、御用状とともに幕府の勘定所を経由して暦局へ、そこから佐原屋庄兵衛に届けられ、佐原に送られたのである。

第三次測量以降は、暦局方への書状は幕府の代官所や地頭所だけでなく各藩に依頼(注十五)することが出来るようになった。薩摩藩の公用便を利用した事例として『伊能忠敬書状』二がある。文化九年二月七日と三月五日に佐原から出された手紙は、三月

二十日頃「浅草の御役所」から江戸城内の「御勘定所」へ、一二日に「御勘定所」から「薩州江戸屋敷」へ渡され(注十六)、五月初に鹿児島城下に届き、「日本一ノ大難所の渡海ニ候得ハ、船便も無之」、種子島の赤尾木で伊能忠敬が受取ることができたのは五月十七日のことであつた。さらに『伊能忠敬測量日記』同年五月二十六日に「江戸書状相渡、尤二十九日定飛脚出立の由」とあるので、妙薫とリテに宛てたこの手紙もまた御用状とともに薩摩藩の定飛脚によって鹿児島城下から江戸へ送られたものである。種子島は伊能忠敬が家族の手紙を受取った最南の地である(注十七)。



図5 大図213号「大隅・種子島」より赤尾木付近
(アメリカ議会図書館蔵)

主要な街道筋であれば飛脚問屋を利用することができる。伊能忠敬が文化二年閏八月十二日に京都町奉行所に依頼した暦局行書状(注十八)が、二八日に暦局に「三つ井越後所(屋より達す)」(注十九)とある。あの越後屋が飛脚問屋をも経営していたの

だろうか。

急ぐ場合はどうするのか。文化十一年三月二二日付で、まもなく江戸に帰着するので準備するようにという内容の妙薫とリテに宛てた手紙(注二十)を桑名城下から出している。その中で、手紙を桑名藩に頼むと、浅草暦局を経て佐原屋庄兵衛に送られるが、今回は急ぐので「七日限の高賃」の飛脚で直接佐原屋庄兵衛まで「急状」を差出すことにしたとある。「高橋景保御用日記」には「八日限」という飛脚便を使った例がある。

送られたのは手紙だけではないようである。妙薫とリテの手紙に、薩摩藩から贈られた芭蕉布三反や煙草などが佐原に届いたと記されていたことに対して、伊能忠敬は「是ハ薩州御屋敷より浅草高橋江被遣、夫より佐原屋江御出し被下候や」(注二一)と答えている。

伊能忠敬と佐原の家族を結ぶ手紙は、幕府の御用状とともに、時には、各藩の公用便、飛脚問屋の至急便を利用して全国各地を行き来していた。もちろん佐原と江戸の間の窓口は佐原屋庄兵衛である。

六 おわりに

佐原屋庄兵衛に関する記事は『伊能忠敬測量日記』や『伊能忠敬書状』だけではない。

伊能三郎右衛門家の第六代伊能景利の日記は富士山の宝永噴火の貴重な記録としても知られている。宝永四年十一月三十日の日記(注二二)に、江戸から佐原に帰着した小倉三次郎が佐原屋庄兵衛からの書状を景利に届けた。その書状には富士郡の間屋と吉原宿の間屋からの被災状況の「御進進書」の写しなども載せている。江戸で何かあれば、佐原屋庄兵衛がその情報を佐原に届けている。

忠敬の伊能家婿入りに貢献した伊能豊秋の日記の宝暦十二年二月二日(注三)にも「川船御役所の儀に付き、佐原屋へ参り…」とある。

伊能忠敬の孫である伊能忠誨が、高橋景保の手伝いを当分御免、帰村することになったときも、行徳まで送ってくれたのは佐原屋庄兵衛であった(注二四)。

江戸時代後半の開東地廻り経済の成長発展という時代背景の中で、佐原屋庄兵衛は伊能三郎右衛門家をはじめとする佐原村の商人の活動を支えるとともに、第二の人生を歩む伊能忠敬と佐原の家族をモノと情報の両面で結ぶ役割を果たしていた。

【注】

(一) 「伊能忠敬(勸解由)宅への来訪者・訪問先」

佐久間達夫(伊能忠敬研究第二十九号)

(二) 佐原河岸と佐原屋庄兵衛の関係については下記の論考を参考にした。

・「十七世紀の利根川水運と地廻り経済」

渡辺英夫(茨城県史研究 第八十七号)

・「奥川船積問屋と佐原商人仲間」

田中康雄(史学 第四三三号 慶應義塾大学)

(三) 佐原河岸から江戸までの高瀬舟の船賃について、「御米五十六俵 此内舟賃十俵余引ル 引メ四十六俵ホト可積上分」という記録が『伊能忠敬未公開書簡集』A一〇六にあり、貴重な史料である。

(四) 「文化十四年十二月 佐原村権次郎難船につき諸用帳」

(『千葉県の歴史』資料編 近世六 六二三頁)

(五) 「史料紹介 江戸後期下総佐原における風俗と物価」 渡辺孝雄 『近世の村と町』所収

(六) 『千葉県の歴史』通史編 近世一 五九頁

(七) 『伊能忠敬未公開書簡集』A二七一・六

(八) 伊能忠敬から「天文ノ弟子」と呼ばれ、備中備後の測量に随行している。また箱田良助が第七次測量隊に参加する時の宣誓書に署名したことも知られている。

(九) 『伊能忠敬書状 千葉縣史料』

五、五六、百二、一二四

(十) 「奥川船積問屋と佐原商人仲間」

田中康雄(史学 第四三三号 慶應義塾大学)

(十一) 『千葉県の歴史』資料編 近世六 六二六頁

(十二) 『伊能忠敬書状 千葉縣史料』一七

(十三) 『天文暦学諸家書簡集』の書簡八四

(十四) 『伊能忠敬測量日記』享和三年五月二日

(十五) 第三次測量で領主便の利用が認められた事の威力が、久保田(秋田)藩での対応から窺える。

藩庁からは、江戸表へ書状を差し出すこともあるので、その書状はすぐに久保田(現在の秋田市)へ送り届けること(『測量日記』享和二年七月七日)という指示が出された。

八月三日の夜に能代での日食の観測結果を報告する層局行測量御用状を当地の庄屋に渡したところ、庄屋は「此夜中に久保田へ送り届」というのである。(『測量日記』享和二年八月三日)

(十六) 勘定所から薩摩藩屋敷に渡された日付について、『伊能忠敬書状』二では三月二日とするが、『伊能忠敬測量日記』文化九年五月十七日では「三月二三日御勘定所より薩州御屋敷へ相渡候由」とあり一致しない。

(十七) 余談になるが、家族の手紙を受取った最北の地は北海道広尾町である。『測量日記』寛政十二年七月十日の記事によると、嫡男の伊能三郎右衛門景敬らが五月十七日に江戸で出した書状を七月十

日にヒロウ(広尾)で受取っている。

同年八月一日の測量日記には、厚岸の「御役所へ御用状序に江戸へ書状届を願う」とある。江戸からの手紙が、襟裳岬の北約四五キロの十勝地方の広尾町の地に五十二日で到着している。

堀江敏夫氏が「蝦夷地での伊能忠敬の先触等」(伊能忠敬研究第三二号)で指摘したように、東蝦夷地が幕府直轄となり、宿駅が整いだした証であろう。

(十八) 『伊能忠敬測量日記』文化二年閏八月十二日

(十九) 「高橋景保御用日記」文化二年閏八月二十八日

(伊能忠敬研究第六八号)

(二十) 『伊能忠敬書状 千葉縣史料』五六

(二一) 『伊能忠敬書状 千葉縣史料』三九

(二二) 「富士山宝永噴火の降灰域縁辺における状況推移を記録する良質史料『伊能景利日記』と伊能景利採取標本」小山真人ほか

(二二) (歴史地震 第十九号 歴史地震研究会)

(二三) 「伊能豊秋日記」宝暦十二年二月二日

(伊能忠敬研究第五四号)

(二四) 「伊能忠敬日記」文政五年十一月七日

(伊能忠敬研究第三八号)

【図】

1

『江戸買物独案内』は国立国会図書館デジタルコレクションの古典籍資料(貴重書等)でインターネット公開している。約二六〇〇件余の江戸の商家の名前や屋号、居住地、職種などを知ることが出来る。特に「飲食之部」は楽しい。

3, 2

『船鑑』は享和二年(一八〇二)に、幕府の川船役所が作成したもの。国立国会図書館デジタルコレクションの古典籍資料(貴重書等)でインターネット公開している。

愛媛県立図書館 久門家文書 解説 (二)

解説者 伊藤栄子
記事整理 渡辺一郎
同 高宮 勲

九、測量御用之節諸人用 安知生村

八月廿二日

一、三拾六人 割当り出(ママ) 人足氷見へ八ツ時参り、夜五ツ時帰ル 出戻り

同廿六日廿七日

一、三拾六人 右同断廿六日入込、廿七日暮方より追々二帰ル

一、式人 喜三右衛門新田角迄、步行板式枚持参又取二遣ス 夫とも賃四匁 但是数四人 老人二五歩役ツ、

一、老人 右同所へ明俵三十俵、縄拾五把共馬人ニテ持参并村内集メ候夫とも

一、式人 西条へ青駄老挺、持参人足賃老匁六分 但老人八分ツ、

同廿六日夜

一、明日急ニ古川分姥ケ洲御昼休ニ相成候ニ付、今晚中御小屋床掃除等仕候様忠左衛門へ被仰付、人足召連出候節弁当料

一、老匁八分 右之時召連人賃

一、老匁式分 右之時入用蠟燭四丁代

一、拾匁八分 右之時村方より出候人足六人分賃 但老人老匁八分ツ、

ハッソ

一、七匁五分 右同断□□拾五丁賃

但老□五分ツ、
ムシ

同廿六日・同廿九日

一、才領儀三左衛門出候両度分弁当料

同断

一、八匁 右召連人足日用賃

一、三匁六分 廿六日夜廿七日夜廿九日夜三十

日夜并先達而御用被仰聞候節、

町宿より帰り入用らうそく共拾式丁代 但老

丁三分ツ、

○八丁

同廿六日同廿九日

一、才領万作出候両度分弁当料

同断

一、八匁 右同人召連人足日雇賃

一、三匁七分 廿六日夜 廿七日夜廿九日 夜三

十日夜并先達而御用被仰聞候節、

○八丁

同廿六日同廿九日

一、才領伝右衛門出候両度分弁当料

同断

一、八匁 右同人召連人足日用賃

一、三匁七分 同廿六日夜廿七日夜廿八日夜廿

九日夜三十日夜并先達而御用被仰聞候節

○八丁 御宿より帰り入用らうそくと拾式丁

但老丁三分ツ、

但老丁三分ツ、

ハッソ

同廿六日同廿九日

一、才領兵左衛門出候両度分弁当料

同断

一、八匁 右同人召連人足連日用賃

一、四匁式分 同廿六日夜 同廿七日夜廿八

日夜廿九日夜三十日夜并先達而御用被仰聞候

時入用とも、らうそく拾四丁代

○拾式丁

同式六日同式九日

一、才領兵左衛門両度弁当料

同断

一、八匁 右同人召連日用賃

一、三匁三分 同廿六日夜同廿七日夜廿九日

夜三十日夜御用被仰聞候時入用とも、らうそ

く拾四丁代

○八丁

ハッソ

一、但是は外並も可有御座哉、御見計可被下候

右四人召連人足分、此内毎々支度仕罷出掛、

不用相成候而迷惑仕候段断申出候 内問何レ

も難儀人ニ而御座候間、よなひ相立遣候様御

取計可被下候

ハッソ

右之通ニ御座候 已上

辰九月

よなひ(余内、余荷とも書き、よないと読む給料の割

増)

一〇、天文方御役人御入込之節

先達而申通候御仕成帳之内、相替り候ケ条并相増ケ条共

氷見組

一、伊能勘解由殿御家来分一間、但若党は別間又は一間之内屏風仕切之積ニ申通有之候処、宇和島辺ニ而は内弟子上田文助、久保木左衛門方と同間之由相聞候 勿論御入込之節は左衛門方少シ先へ入込候由相聞候間、同人方へ承り合若党神保庄作儀は文助左衛門方と同間ニ指置可然

但同間ニ相成候ハ、臥具其外、文助、左衛門方同様ニ可致事

一、棹取兩人小もの同間之積リニ申通候処、兩人之者は内々別宿相好ミ候由相聞候間、勘解由殿御宿近辺ニテ老軒手当致置、入込之上別宿江案内いたし可然事

一、湯殿、雪隠は間毎ニ老ツ宛

但有来り無之所は仮リニ出来之筈

一、御宿印之事

白 長式間程ツ、簾之様ニ仕立、

竿長五六間

赤 杉竿か竹か

毛綿五色 黄

藍

水色

是は御宿々持送り之筈

一、夜分御測量場所拵入用

鉄突 二三挺 御当方ニテ、もじと申筋

鍬 二三挺

土 拾荷程

是は場所ニより御入用之由ニ候間、ふぐニ入置御指図之場所へ持参候様用意

一、丁縄式筋 途中御見分之節用意

是は上より御貸被下候筈

一、菅笠拾

右同断

一、日傘老本

用意

是は海辺御見分之節、勘解由殿江外より差掛ケ候由

一、島々井地方村ニ而も海辺ニ山有之場所、海辺江出張候端々江は目印相建、且村中又は村境ニ川有之場所も、海辺端々へ目印相建置可申事

但本文印 測量方ぼんでんニ不紛様、笹附し竹ニ白紙八九枚ツ、附ケ、建置可然事 村境へも建候事

一、途中御休所小屋

一、壕台(縁台か) 二面ならべ四角ミニ柱を建、けた渡し屋根油障子ニいたし、右之通之もの四通り出来置候様先達而申通置候処、右六通り出来尤屋根は障子相止メ桐油葺右六通り之内三通之分老軒ニいたし、老番御休所場所見計ひ懸置、残三通り分は場所を見立ニ御休所へ懸置可申、勿論老番御休ミ相済次第第三之御休ミへ相廻シ候筈

但御側量(ママ)ニ先ニ御分り之節は、御人数ニ応じ本文小屋取わけ持参、御一先江式軒ツ、ニして順送り右小屋内仕切入用之節はすだれ之筈、右ニ付すだれ用意 小屋之所江毛氈ヲ敷、新敷机老ツ指置候筈 此机三宝山ニ成ル

是は御朱印台之積り

右脇江ニ腰掛り刀掛ケ老ツ指置可申事

但御休所へ用所用意之事 上下老ケ所ツ、手水道具とも

一、駄荷葛籠(ママ)三ツ 用意之事

是は御荷物之内長持有之候所、到而重り持急候ニ付、右葛籠江分ケ 貰ひ候由

一、青縄

用意之事

一、御宿間毎ニ屏風片シツ、用意之事

是は上ノ間ニ而は御朱印之所江立テ、其余は休足之節立候由相聞候

一、島井山付之村方ニ而は、下地用意申通候外ニ步行板五六枚、はし三三四挺用意之事

一、宮ノ下川千汐之節手当前西手足入場所へは式間程ツ、有之候杉竿を渡し、步行板ヲ置候筈

付紙 本文步行板五六枚 小船二積 はし三

三挺 新居浜浦と船屋村申合船屋村立石之辺ニ相控、道方懸り役人へ承り合せ乗り廻シ候事

右同断 新居浜浦より御代島前へ小船ニ積立相廻し置右同断

右同断 垣生村は小手山之端辺へ右同断

右同断 黒島は同島前江

右同断 但大島は黒島と申合相着候而可然、

若御一先ニ相成候ハ、別段用意之事

此人足

一、加茂川

同所江筋へは步行板橋掛ケ可申、若橋掛がたき分は御用意漁船ヲ以船橋かけ可申事 但步行板指支候ハ、加茂川橋板相用可然

一、御本陣川、市塚川とも江通りへは歩行板ヲ以橋かけ之事

右四ヶ所川々東西堤へ土俵ニ而下り上り場出来之事

一、海辺御廻り筋大体之場所は、はしご、歩行板ヲ以橋かけ御通シ申共、余程所は御用意御船ニ而御渡申筈

一、東方小川尻歩行板ニ而橋かけ又は土俵ニ而飛橋出来之事 汐時ニ而候ハゞ御用意船相廻候事

一、海岸御見分先ニ而見通しニ障り候竹木は伐除可申事

右道方川方竹木伐除方差配御役人

羽生万助

一、御泊り之所々江は御他邦より御仕成方聞合せ之もの入込可申候間、右宿手当に弐三軒ヅ、用意可致置事

一、随勤役

白石弥三兵衛

栗本三十郎

真鍋喜兵衛

一、御賄方下役

池田右平

越智彦藏

一、御側量(マ)之節堅メ同心兩人之筈之處、御二先ニ相成候而は指支候ニ付四人罷出候筈之事

一、御見分所人足引纏ひ肝煎中野村新兵衛、大町村亀右衛門一同藤田八之丞指出候筈之事

一、先達而申通有之候御代島ニ而出来小屋相止ミ可申事

一、御見分之節見通し印幟六本竿とも用意之事

一、此度罷出候村役人諸肝煎之もの共、公辺御役人と相名之筋は当分相改可然事

相名(同名の意とおもわれる)

一一、御休泊并町数

中野村

利兵衛

兎野山村

四郎左衛門

御休泊

今在家境より凡五丁

小休

惠美須大黒堤立(マ)手之下

右小休より凡拾弐丁

同

一、御宿

氷見より凡四拾丁

小休

右より凡弐拾五町

昼(カ)

右より凡弐拾町

小休

一、御宿

一手御本陣川土橋より

立石より始ル

小休 御揚場

右より凡弐拾弐丁

昼 立石

夫より船ニ而新居浜

小休所着

右小休所より沖手打廻り凡三拾町

一、御宿

一手新須賀通

御宿より凡弐拾丁

小休 沢津村

船着

是より下略

八本松 砂場

一二、町在御宿其外心得

一、御役人方御役知行被相尋候ハゞ

留主居

一、四百五拾石

同

一、四百石

奉行役

一、三百五拾石

同

一、三百五拾石

用人

一、三百五拾石

町奉行

一、弐百石

代官

一、百五拾石

同

一、百五拾石

郡奉行

一、百五拾石

同

新居浜浦

一手御代島

小川宇左衛門

日根野九郎三郎

大久保寛右衛門

神保惣右衛門

三宅勘兵衛

三浦濤馬

小川三郎左衛門

赤堀三郎右衛門

徳永三右衛門

一、百五拾石 浅井柳右衛門

右之外は存不申段可申事

一、此度随勤之面々役録被尋候ハ、

白石弥三兵衛

栗本三十郎

真鍋喜兵衛

右兩人とも徒格ニ而拾石二三人扶持

一、浦奉行之儀尋有之候ハ、

浦方之儀も代官郡奉行兼勤と可申候

一、此度随勤之面々役□□□□□□□□□□(消えていて文字なし)

代官所元々

松永次郎藏

郡奉行下役

白石弥三兵衛

一、米代木銭之事尋有之候ハ、

木銭は上拾式文下六文と可申答ニ、尤あの

方より勝手次第披払候ハ、其通可受取事

一、米之事尋有之候ハ、

老人前老宿五合、昼式合五勺ツ、

一、休昼飯は旅籠代ニ而相渡候事ニ候ハ、米

相場ニ引合可受取事

一、米相場 平シ石ニ付銀六拾三匁

一、金相場 両ニ付銀 銀六拾六匁

一、銀相場 銀歩老匁二百七文

一、人馬賃銭払尋有之候ハ、

御定之通り相答可申、尤あの方より勝手

次第払候ハ、其通り受取可申事

御当方御定

駄荷老疋 三拾式文

老里ニ付駄賃 乗懸老疋 同断

軽尻老疋 式拾老文

人足老人 拾六文

駕老挺 三拾式文

一、江戸御届ケ状相頼御便り尋有之候ハ、

朔日 十五日

一、御用之儀も有之候ハ、無滞相弁可申事

一、道筋ニ耕作いたし居候もの共も笠取、下二

居無礼無之様可申付事

一、御宿有之所火之元等弥堅可申付事

一、御宿前用事無之もの猥ニ立廻り申間敷事

一、道法之儀相心得罷在尋有之候ハ、答可申、且其村方より見渡候地方高山并海中島名道

法等相弁居候分は尋ニ応じ可相答、不慥成筋

は不存旨相答可申事

一、若何事ニ而も尋有之候ハ、御巡見衆御通

行之節之通可申答事

一、御他領之儀御尋有之候節、粗承り候事杯を

存たる様ニ申間敷事

一、小判老歩小玉等若御用ニ有之時、有合候ハ、

御用ニ立無之時は当所ニは不自由ニ有之段可

申事

一、山林竹木之儀御尋候ハ、領分ニ松雜木竹林

は所々ニ御座候 尤前方伐払林敷江松植付候

場所も御座候得共、未成木ハ不仕候と答可申

候

一、預り札之儀御尋も有之候ハ、近來御近領銀

札銭預り札等通用有之、領分銭払低ニ而指支

申候ニ付、町在一同相願候而一ケ年切預り札

通用被指免御座候旨可申答

一、新居浜浦魚座之儀若御尋も有之候ハ、

浦方漁師共近年及困窮渡世出来不申候ニ付、

漁師ども為救浦方之ものへ仕入被申付、若差

支候節は役所向より世話も有之儀ニ御座候

と可申答

一、御領分村々へ兼而御手当等之儀御尋も有之

候ハ、

一、忠孝奇持人有之候得ば、夫々御札之上

御称美被下物等之事大旨相心得御答可申

事

一、難儀人有之候得ば、御調之上御救扶持

被下候品之事

一、養老米被下候事

一、窮民有之候得ば御調之上一生御救扶持

被下候品之事

一、凶事之節は、上より麦等御調之上ニ而

御貸被下候品之事

一、若金銀両替相頼預り札呉候様申候ハ、廻

り合は無御座旨申答、正銭相渡預り札相渡申

間敷候

一、途中并御宿ニ而御測量有之節、堅メとして

同心兩人御出シ披成候得共、町在役人御宿肝

煎之もの氣ヲ付無礼無之様勿論、見物之者差

留メ可申事

一、村々絵図并書上帳之事

御城下より西氷見村迄之村々図面書上帳は、

御領分へ御入込御前宿へ村々役人老ツ、持参

差出可申事

但罷越候村役人相究候而右前

書付可申出事

付紙

本文持参之節御案文之内遠山見渡と申御ケ条

御座候処、領分之儀は南ニ高山を受候国ニ而

山々数々相見へ申候ニ付、いづれいづれを認上

宜敷可有御座哉、且は他領山々杯山名道法等難

相分筋も御座候ニ付、遠山見渡之儀は認上不申

候 御通行之節御尋も御座候ハ、口上ニ而可申

上と相断置可申事

一、御城下より東新居浜浦迄之村方絵図面書上帳は、西条御泊り江差出上可申事

一、新居浜浦より東村々図面帳面は新居浜浦御泊りへ差出可申事

公儀天文方御役人廻浦二付、御船并浦船御

手当覚

一、九反帆御船、御船印、御挑灯之事 老艘

但御船頭代り水主老入ツ、乗組諸事差配之筈高垣ニいたし幕打、疊敷、但内仕切り幕すだれ

一、九反帆御船 右同断 老艘

右同断

一、御飛脚船 御船印、御挑灯之事 老艘

村役人乗組御案内之事

外二御水主老入乗組之事

浦船

一、六反帆 御船印、御挑灯之事 老艘

右御賄方諸道具并懸り御役人

一、八反帆 右同断 老艘

御荷物船 浦船

一、五反帆 御船印、御挑灯之事 老艘

随勤御役人并医師

一、漕船 浦船 拾貳艘

内三艘ツ、天文方御役人衆御船 貳艘

貳艘 御台所船へ

貳艘 御荷物船へ

貳艘 随勤御役人船へ

一、小船 三艘

是は市塚川より御乗船之節、汐之模様ニ寄元

船迄之橋船并海上ニ而不時ニ御上り候節用

意

一、漁船

是は測量方御入用諸道具積立、村役人肝煎并

手伝人足とも乗組罷在御用次第相勤候筈

但人数多乗組差支候ハ、人足共三人ツ、

見合せ漕舟等へ乗セ可然事

小以(小計)

外二

漁船

拾艘

是は市塚川より御代島、新居浜浦御渡海之

節、天気模様ニ寄り何時ニ而も御船々へ漕付

候様、新居浜浦ニ而用意、大島、黒島御渡海

之時分ハ右同断黒島ニ而用意之事

右は市塚川より御乗船之積リニて同所江船揃ひ

いたし置、若磯浦通りへ御出も有之節は、御通行

ニ随ひ新居浜浦へ乗廻し可申事

但前段之内小船三艘之儀は浜辺乗廻し、若御用

有之節相勤可申事

御台所船之儀は模様ニ寄御賄方船ニ而仕候

儀も可有之条、御賄方懸り御役人へ承合せ乗廻し

候事

磯浦通り江御通行有之候とも御荷物は船ニ

而相廻し候か、又は上手通りへ相廻シ候とも

其節ニ至り相究メ可申事

御船間取り用意物

御船颯々丸 二間に仕切り

一間 伊能勘解由殿

一間 稻生秀藏殿

但押楫(カカシ)脇之間薄縁敷、御家来取揖脇間

は諸伺口并茶所

御船奔飛丸

一間

二間仕切 坂部貞兵衛殿

柴山伝左衛門殿

青木勝次郎殿

下河部政五郎殿

上田文助殿

久保木左衛門殿

但押揖脇間薄縁敷、御家来并棹打兩人、取揖脇

間右同断

右之通相心得御案内可申候

但若老艘へ一同二御乗組御家来杯居所差支候

ハ、断を申、貳艘江取分ケ候而も可然、右等之

節は随勤御役人へ申出可及取計事

右御船肝煎老入ツ、乗組差配可致事

外二給仕人三人程ツ、見合ニ而乗組せ候事

中野村組頭

新兵衛

大町村

龜右衛門

右兩人申合せ老入ツ、乗組罷在御用相并可申事

用意もの

一、刀掛ケ

四ツ

内

壹腰懸り 貳ツ 颯々丸へ

貳腰懸り 壹ツ 奔飛丸へ

四腰懸り 壹ツ

右竹二而出来

外二四腰懸り壹ツ宛、御家来居候場所へ

一、老艘江 たばこ盆三ツ宛、たばこ、きせる添

内貳ツ 上之分

壹ツ 下之分

一、土びん 壹ツか貳ツ宛

一、茶并茶碗并台とも御人数二可応

但宜敷品用意之事

上分

一、燭台 ぼんぼり付、ろうそく貳ツツ、

一、家来居候場所江も燭台か又はぼんぼり壹ツ

用意

一、上ハ草履 貳三足ツ、

一、手水提 壹ツ宛 杓とも 手拭上下之分用

意

一、手たらひ 壹ツ宛

一、筆紙墨用意 硯箱とも

是は途中用意之筋相用ひ候而も可然

外二御渡海之模様ニ寄り、ふとん、まくら

も壹ツ宛御人数二応じ用意之事

多喜浜西分之儀ニ付心得

一、多喜浜西分之儀品も有之ニ付、左之通相心

得可申候

多喜浜西分之儀は郷村、松神子村、垣生村

地先二而三ヶ村、新田畑高之内と相心得地所

主大体水田中通より上手郷村分、沖手之所は

両村之分、委は図面之趣ニ相心得可申事

多喜浜西分

高三百四石七斗三升七合

内

百五十石程

七十石ロムシ

八拾石ロムシ

小以

右之通り高相分り居候積り二相心得可申事

右之通り相心得何等御尋之節は前条ニ随ひ御答可

申事

付紙

一、新田畑高貳百貳拾石三斗七升九合 郷村

一、同百三拾七石壹斗六升九合 松神子村

一、同百六拾七石七斗五升七合 垣生村

右之通相心得可申事

一三、乍恐内存奉申上御事

一、持高 中野村惣吉事 幾右衛門

右之者心得方宣敷、袴、小脇差御免之者二御座候

处、不相変実体二而家業出情仕居申候 未持高は

少御座候得共、村内小前之者為二も相成、

且何等之節セ話等も深切ニ仕候者二御座候

大札之節其身一代、何率上下着用御免披仰付被下

候様仕度奉存候

一、 中野村 三兵衛倅

八太郎

右親三兵衛袴御免之者二御座候处、倅儀兼々実体

二而御法度向能相心得家業出情仕居申候間、何率

其身一代袴、小脇差御免被仰付被下候様仕度奉存

候

一、 組頭 友助

右之者兼々実体二而骨折相勤、村方何等之儀行届
取計申候 最早歳六十余ニ罷成候处、不相変出情村
内之儀深切ニセ話仕罷在申候

且当村二而は家筋之者二も御座候 何率其身一代
格別之思召ヲ以、宜御取扱被為仰付被下候様仕度
左候ハ、益出情何角為成於私共も難有奉存候 此
段奉願上候 宜被仰上司被下候 以上
巳十二月十二日

右之通奉願上候 願之通被為仰付被下候ハ、難有
仕合ニ奉存候 已上
辰十一月廿六日 庄屋

(この文書は月日の遅い方から書かれているが、そのまま
とした。)

【参考】『大日本沿海輿地全図』武蔵・相模（部分）
（国立国会図書館蔵）（浦賀～久里浜）
※右が北



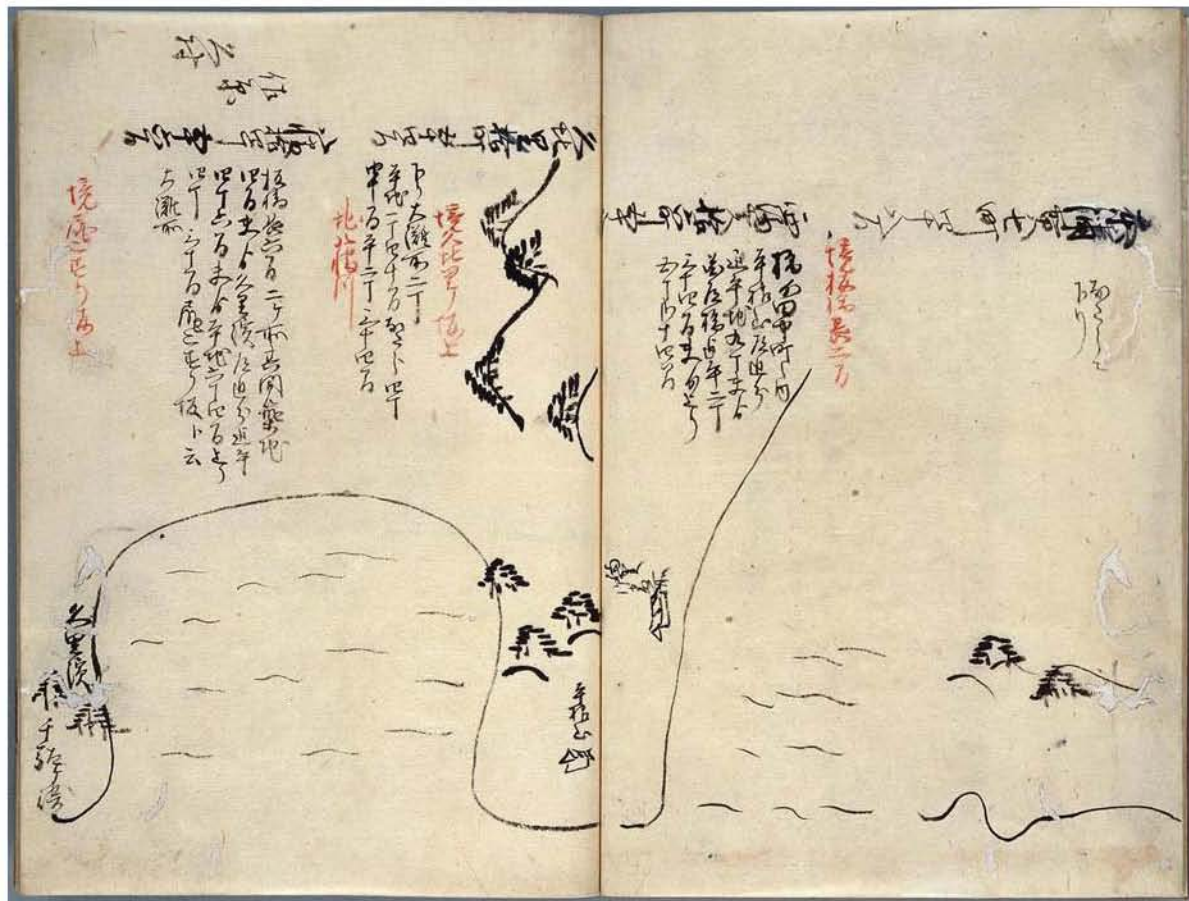
測量日記

同十四日、朝曇。五ッ頃西浦賀出立。久里浜村、此間に西浦賀持の久比里あり。元浦賀という。又内川村、八幡村あり。野比村、長沢村、津久井村を経て上宮田村に至て止宿。名主丹藏。村々役人送迎。案内は同前。昼頃より晴、夜は曇る。

伊能忠敬が享和元年（一八〇二）四月、第二次測量の際につけていたフィールドノートである。測量下図としては「測地原稿図」が知られているが、本図はより簡略なおおまかな地形と主要地点間の距離を記している。第三次測量からは間重富の進言により測量に画工を同行して沿道風景を描かせたが、第二次測量では忠敬自身が風景を描いていたことがわかる。松の木の描き方に忠敬先生の絵心が感じられる。

伊能忠敬自筆 野取図帳 一三浦半島一部

前田 幸子



『伊能忠敬自筆 野取図帳 三浦半島一部』（浦賀～久里浜）

【早稲田大学図書館蔵】



『大日本沿海輿地全図』
第93図 武蔵・相模
(国立国会図書館蔵)

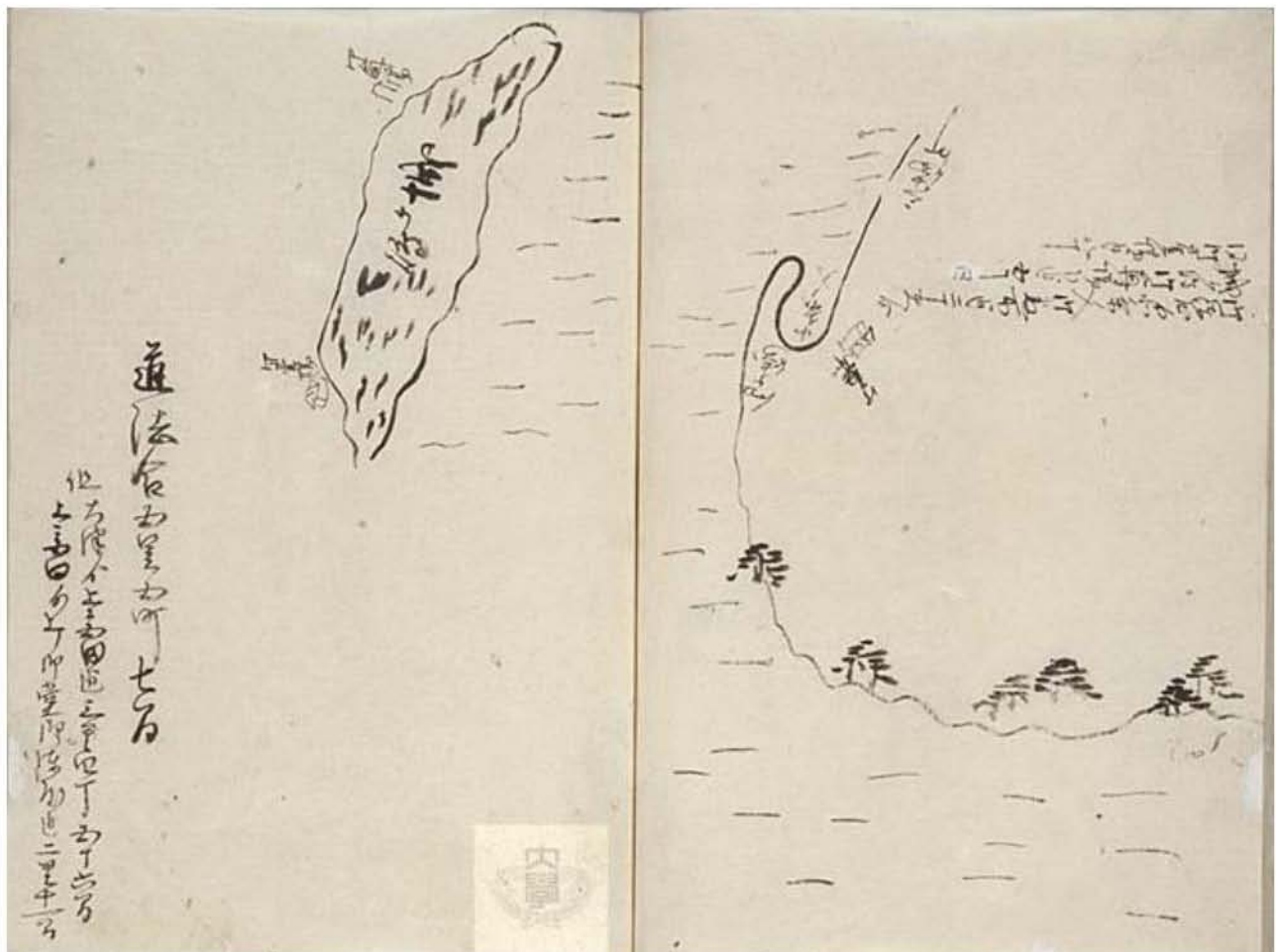
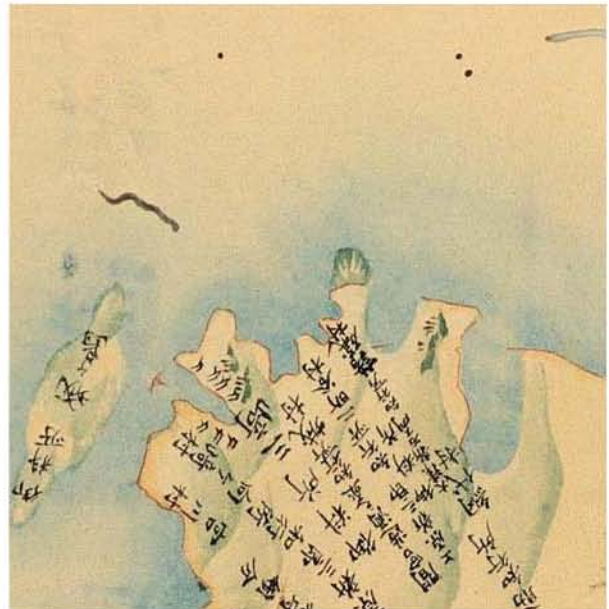
※『野取図帳』の全
体は早稲田大学図
書館サイト『古典籍
総合データベース』
「洋学(蘭学)コレ
クション」で閲覧す
ることができる。

測量日記

同十五日。朝七ツ半頃大地震。六ツ後上宮田村出立。
菊名村、金田村、松輪村、此海辺岩石大難所、毘沙門
村、同前。宮川村、向ヶ嶋村、三崎港七ツ前に着。宿
湯浅与治右衛門。城ヶ島役人来て測量を聞。城ヶ島の
周囲を問に舟行も不成。又道も無之様を申すに付遠見
測に成。此夜曇天不測量。

【参考】『大日本沿海輿地全図』武蔵・相模(部分)
(国立国会図書館蔵)(城ヶ島付近)

※右が北



『伊能忠敬自筆 野取図帳 三浦半島一部』(城ヶ島付近)【早稲田大学図書館蔵】

連載 新説 伊能測量物語（再開）

第五話 第二次測量始まる

渡辺 一郎

第一次測量のあと、いろいろの経緯があったが、第二次測量では相模、伊豆半島沿岸を測り、房総半島を経て下北半島まで本州東海岸を測ることになる。

お手当は少し上がった一日一〇匁になっただけだったが、宿泊と人足の提供について、道中奉行・勘定奉行から沿道の村々に先触れが出された。

勘定奉行ら五人が押印し、人足二人、馬一匹、長持一棹の持ち人足（四人）を、お定めの賃金を受取って提供するよう命じられた。

さらに追って書きで「この触れは昼夜を限らず、早々継ぎ送り、請け書を添えて最後の村から最寄の幕府代官に返すように」と指示された。

村々への伝達は幕府代官からで、代官は添え状をつけ「お先触れが出ているから、刻付けで早々継ぎ送るように」と命じた。刻付けの廻状とは、たとえ深夜でも受取れば、受取時刻を記し、急いで自分用の写しをとって、すぐ次の村に送らなければならない緊急通報である。第一次測量の「添え触れ」とは格段の違いであった。

長持ちの追加は希望がかなえられたが、人足数は足りなかった。交渉をしたが「決まっただけで変えられない」という下っ端役人の返事だった。不足分は自費で雇えといわれる。忠敬は少し不満で、測量中、九十九里の畏友・飯高惣兵衛と面談した際に、幕府の出し惜しみをぼやいている。

しかし、道中奉行・勘定奉行から先触れを出さ

れたのは、沿道の協力を受けるのには大きな効果があった。村々から村役人が出て案内し、ところによっては、先触れ以上の大きな便宜をうけることができた。

仙台領では、若年寄・立花出雲守のお達しが、勘定所から仙台藩江戸留守居役へ通知されていて、領内では家老・片倉小十郎から郡方を経て村々に指示され、どこでも非常に協力的であった。

第二次測量の経路 享和元年（一八〇一）四月二日、江戸を出発した伊能隊は一行六名だった。第一次からの伊能秀藏、平山宗平に平山郡藏、尾形慶助と下



富岡八幡宮 深川

僕の嘉助が加わった。深川の富岡八幡宮に参拝してから、江戸湾岸を西に向かい、三浦半島を周回して、相模湾岸を西へと進む。伊豆半島沿岸を南下して一周し、沼津に出る。東海道を東に向かつて測かり、一旦江

戸に戻る。

六月一九日、再度江戸を出発して、江戸湾岸を東に向かい、房総半島沿岸を一周する。あと常陸の海岸を北上し、磐城、松島、金華山から、三陸沿海を釜石、宮古と測って、尻屋岬に進み、下北半島を一周したあと野辺地に出る。ついで青森を経て三厩に一月三日に到着した。帰路は奥州街道を再測量しながら一二月七日に江戸に帰着する。測量日数二二〇日だった。

伊能支隊、川崎大師河原で道に迷う 四日、本隊は川崎宿から東海道を保土ヶ谷へ向かい、手分け隊の平山郡藏、宗平、伊能秀藏の三名は、川崎から大師河原、渡田を経て市場村までの約四里の海岸線を測りに出かけた。道に迷って夜遅く八時頃帰着する。

忠敬「随分遅かったな。えらく心配したぞ。慶助ら三人を迎えに出したが、どうしたんだ」

郡藏「すいません。大師河原から市場村までの四里を案内人無しで測りました。雨天で手間どって、作業が遅れました」

「とにかく予定を済ませましたが、終わったとき周りは暗くなっていました」

「明かりを手にいれて、帰ろうとしましたが、案内が無いので闇夜の道に迷ってしまいました」

忠敬「幕府御勘定奉行の先触れが、お代官経由で出ている筈なのにけしからん」「保土ヶ谷の村役人も探しに出たそうだ。心配したが無事でよかった」

郡藏「恐れ入ります」

こんなことは、後年では全くあり得ないが、第一次、二次の頃では考えられることだった。

鎌倉から江ノ島へ 三浦半島を周回し四月二〇日小坪村に泊まる。翌日は材木座を経て、由井浜より鶴ヶ岡八幡宮前迄歩測で測り、あと無測量で参詣する。

建長寺、円覚寺から大仏、長谷村へ下り坂下村、稲村ヶ崎を回り腰越へ。村役人は寺院宿泊を用意していたが、江ノ島への砂州が干上がった。忠敬「江ノ島に渡れるようだが、江ノ島泊りはどうかな」

村役人「それはいい。江ノ島の役人に掛け合いま



伊能図大全より鎌倉・江の島・茅ヶ崎部分

しょう」

江ノ島泊りと決めると、江ノ島の東海岸を岩屋の前の龍池まで測り、夷屋吉衛門方に泊まる。この夷屋は親戚だったかも知れないが、現在の夷屋と違い反対側にあつたらしい。

翌日は西海岸を測り、全員揃って弁天の本宮に参詣。岩屋周辺も測った。

根府川関所で関着 江戸から三浦半島 湘南海岸を測量してきた伊能隊は、小田原藩の根府川関所で押し止められた。

関所下役「御用旗の方々、関所手形を拝見します」忠敬「さような物は持っていない。幕府御勘定奉行のお指図により諸国を測量しているもの。ここに命令書も所持している。お通しください」

「それとこれとは別の話しです。関所には関所の大法があります」

「関所の通行については江戸で勘定所に伺った。江戸では、奉行の命令は手形以上の証明だから、手形はいらないと言われたし、実際に栗橋御関所では何の問題もなく通行できた」

下役は上司の意向を聞いて答える。

「幕府の御普請役でも通行のときは手形を持参しています。まして百姓・町人の身分で手形を持参しないものは通すことは出来ません」

忠敬はカチンときた。

「我らは百姓・町人ではなく、元津田山城守家中の浪人である。幕府天文方に所属し、御勘定奉行の先触れにしたがい諸国を回国しているもの。手形は要らないはず」

上役に取次いだのち

「今度は御用に差し支えるので通しますが、次回

は手形を御持参ください」

「御勘

定奉行の

お触れは

手形以上

の証明な

ので、今後

も関所手

形を持参

する気は

無い」

「一同

出かけよ

う」

と忠敬

は関所役

人を無視

して歩き

だす。

郡蔵は心配して、「先生大丈夫ですか」

「構わぬ。何も起こらないよ」

案の定、役人は何もいわなかったし、通行を阻止もなかった。



伊能図大全より 根府川の関周辺 部分

伊豆沿岸測量の追加 本州東海岸を測った第二次測量で、なぜ当初の計画に無かった伊豆半島が加わったのか。蝦夷地を船で周回して補足測量する案が不成立となったあと、高橋の申請書の中に、突如として伊豆測量が登場する。

幕府の評議のなかで浮上したことを思わせるが、

筆者は、前号で述べたように、松平定信の意向だったと推測する。根拠史料はまだ発見できないが、周辺状況からは充分考えられる。

定信は老中首座・將軍補佐役を辞任していたが、幕閣に影響力を持っていた。文雅の交流を通じて堀田摂津守とは頻繁に逢っている。当然、伊能測量の話も聞いていただろう。伊豆・相模は海防の要地といい、自らも徒歩した伊豆国を測量に加えようとするのは考えられることである。

忠敬は土肥では態々名主・善八宅を訪れ、定信巡視の供をした村上島之丞制作の伊豆の国図を参観している。見えない糸の一つである。

この地図は現存しており筆者も一覽したが、あまり良い図ではない。

下田で大方位盤紛失 下田以遠は、道は更に厳しく、長持ちの運搬は難渋すると予想されたので、大方位盤を江戸に送り返すことにした。

「こも包み」にして、深川の五味藤五郎方へ送るよう宿舎の庄左衛門と町年寄りに依頼して出発するところが、この荷物は測量が全部終わっても届かなかった。

問合わせても返事がない。下田船の宿・鉄砲洲の太田屋喜八という者を探し出し、他の廻船問屋の荷物に紛れていないかを調べた不明だった。

この上は、代官の江川太郎左衛門役所か幕府勘定奉行のお役所に訴えるしかない也太田屋に伝えたところ、それでは下田町の役人や宿がお咎めをうけるから、厳しく交渉するので、少し待って欲しいといわれる。

二月になって漸く荷物が届いた。町年寄から詫言状が来たが、忠敬は宿亭主・庄左衛門は不届き者で

あると激怒する。全く分からない話である。横取りを試みたらしいが、知らない者には価値がない品物なのだから。

伊豆半島の測量を終わって 三島から東海道を江戸に向かつて測り、六月六日江戸に戻る。途中三島宿で高橋先生から送られた量程車を受け取る。量程車は引いて歩けば距離がわかる測定器である。伊能測量以外でも使用例があるが、引いて歩く動輪

があつてその回転距離を歯車で受けて数字で表せるようにしてあり、箱車状になっている。理屈では便利な器具

と思われるが、海岸測量では相手は砂または岩石なので、余り出番が無かった。東海道の測定などは絶好な筈であるが、日記には現れない。帰着日の六日に品川から深川まで量程車を引いたとあるばかりである。



量程車(伊能忠敬記念館所蔵)

銚子で富士を望見、技術に確信を持つ

郷里房総を測る 江戸で帰着届けや挨拶、出発の届、暇乞い、などを済ませて、六月一九日東に向かい出発したが、初日から難航だった。小松川新田に泊まろうとして荷物を送ったが、海岸線は普段往来しないので泥が深く、芦原や竹藪もあつてはかどらず、行徳泊となってしまう。荷物は小松川新田に行っているの、着替えもなく難渋した。

二〇日検見川村、二一日五井村、二二日中嶋村、

二三日木更津村、二四日富津村、二五日湊村、二六日金谷村、二七日吉浜村、二八日勝山村、二九日岡本村、七月一日那古村、と泊まりを重ねて、七月二日房総半島先端の洲崎村に着く。

ここで四泊。天候が不順だったが五日目には遠山、大嶋の方位が測れたので出発。六日滝口村、七日北朝夷村、八日江見村、九日天津村、一〇日興津村、一日勝浦村、一二日岩和田村、一三日小浜村、一四日中里村、そして粟生村、小関村を経て一六日屋形村に着く。

粟生村は畏友飯高惣兵衛の在所、小関村は忠敬の出生地だったが泊まっていはいない。

屋形村は現在横芝光町となっているが、同じ町内の小堤には父の実家・神保利右衛門家や父の立た分家・神保理左衛門家があり、今日までも続いている。

屋形村の名主・海保兵右衛門は神保家の親戚で、当時網元として盛業中だった。招きに応じ隊員一同を引き連れて一泊した。

忠敬はこの日を利用して、単独行動で父貞恒はじめ神保一族の墓参を済ませている。一方、海保本家の庭先では、隊員一同で天体観測のパフォーマンスもおこなっており、青年期にお世話になった神保一族に敬意を表した。

時間を作って大網元で畏友の飯高惣兵衛にも逢っている。その際、忠敬は幕府手当ての「ミミツチさ」をばやいたらしい。兄貴分の惣兵衛が「幕府の測量隊長という晴がましい事業の責任者を務める忠敬を励まし、つまらないことをばやくな」とたしなめた詩が残っている。長女お稲もこの近くに住んでいたはずである。勘当の身だったが、影ながら対面できたかも知れない。

一七日井戸野村。忠敬だけは娘の嫁ぎ先、太田村の加瀬氏泊。いろんな意味で故郷はいいものだった。一八日銚子の飯沼村着。佐原から息子の景敬、親類の平右衛門、七左衛門、久保木清淵らが見舞にくる。ここに九泊して富士山の方位を測った。

房総測量で作業要領を固める 第二次測量の大きな特徴は、第一次の反省にもとづいて、作業方法を



伊能図大全より 銚子半島 部分

大幅に改善し、マニュアル化がおこなわれたことである。

距離は間縄を張って測る。測線の方位は正方向からと逆方向と二度測って平均をとる。

距離の読み違い防止のための近傍交会法目標のとり方、測り方。遠方の交会法目標の設定と計測の頻度。

など以後の伊能測量の作業要領は第二次測量からおこなわれたと思われる。

そういう記録は何処にもないし、当時から測量に従事した内弟子尾形慶助、のちに幕臣渡辺家を継いだ渡辺慎が記した唯一の伊能測量解説書『伊能東河先生流量地伝習録』にも書いてないが、周辺状況からはそう推測できる。

七月二六日の測量日記には「晴天、この朝、日の出、大若岬にて慶助富士を測る。一九日より富士山の方位を測らんと、日々手分けし、高に上り遠鏡を出しけれど、日々蒙気おほくして見えざりき、この朝、富士山を測り得たり、其の悦び知るべし、余病氣も最早全快に及べり、この日奥州小名浜まで先触れ出す」とあり、文面に喜びが溢れている。

これはなにを意味するか。房総沿岸の測量に忠敬は三七日を費やしたが、連泊したのは、半島先端の洲崎(すのさき)(四泊)と銚子(九泊)だけで、いずれも富士山の方位を測るためだった。銚子で九日目に富士を測れて嬉しかったというのである。

富士山の位置は、江戸の自宅からと、伊豆半島測量中にしつこく測り、測量下図のうえでは確定していた。そこで洲崎と銚子で、これまでに測ってきた測量下図の上の富士山の方位と、現場における実際の方位を対比したのである。とくに、銚子での測定は新しい作業マニュアルの完成度の総合確認のよ

うな意味があった。九日待つてようやく測り、嬉しかったというから、精度も期待値の範囲に入っているにちがいない。

地図の制作についても改良がみられる。まず、緯度一度の距離は二八・二里と測定された。この値は現在の値に対して誤差約〇・二%である。以後の地図制作は緯度一度を二八・二里としておこなわれた。また、縮尺が変更された。大図は一町一分としたので、一里は三寸六分、縮尺は三万六〇〇〇分の一となった。小図は一里を三分としたので、縮尺は四万三二〇〇分の一となる。

そのほか、第一次ではなかった中図を試作した。大・小図は幕府に上呈し、中図は堀田摂津守に提出したという。大図は大きすぎ、小図は細かすぎたのである。いまも残っている伊能図は中図が断然多いから、狙いは的を射ていた。

第二次測量の成果は、第一次測量の蝦夷地部分を含めて、大図三二枚、小図一枚、中図四枚にまとめられたが、大図、小図は現存しない。中図は北から三枚が伊能忠敬記念館に、四枚分を二枚に描いた図が早稲田大学図書館に所蔵されている。いずれも針穴が残っており針突法で制作されている。針突法は日本画界の写図方法といわれるが、第二次測量以降はおこなわれた。第一次測量の大図には針穴は残っていない。



伊能忠敬銚子測量記念碑

第二次測量の中図をみると、伊豆半島から下北半島まで本州東側の海岸線が現在の地形とほぼ同様に描かれている。これらは海防上最も重要な地域であり、幕府の老中・若年寄を唸らせたのではないか。背後にいた松平定信にも堀田摂津守から見せられたろう。

このようにして伊能測量の評価は幕府内に定着した。とにかく、日本の東半分の地図を作らせようという方針が内定する。

銚子滞在 富士山の望見を求めて銚子に滞在中、佐原から船で親戚一同が見舞いに訪れたが、滞在が長引いたので、見舞い客は段々に引き揚げていった。特に久保木清淵には武州、相州、豆州、両総州、房州の沿岸地図の下書きを依頼したという。これまでに描かれた測量下図の写しを渡して、絵画風に仕立てる試みを頼んだのだろう。第一次測量の地図では、蝦夷地は鳥瞰図風にえがいたが、奥州街道は一本の線があるばかりだった。

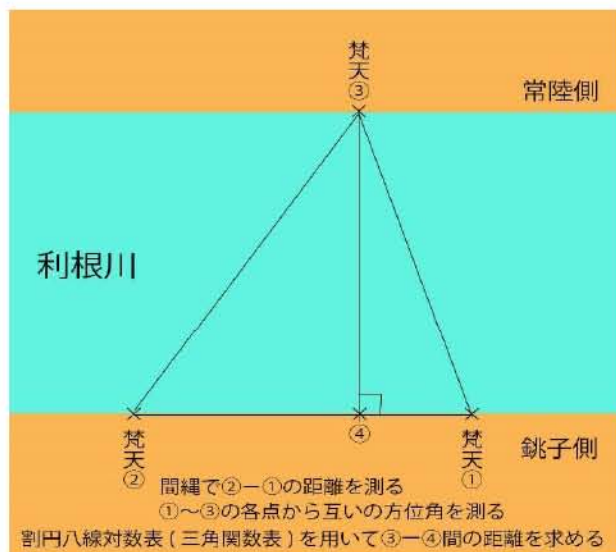
高橋至時から、もう少し考えろと言われたらしい。伊豆、相模、房総は地形も変化に富んでいる。美しく地図を仕立てるサンプルを依頼したのではないか。伊能図の原形を決めるための構想が、銚子で忠敬と久保木の間で話し合われた公算が大きい。

利根川を測る 大若岬から富士の望見が成功すると忠敬は早速明日の準備にかかる。

忠敬「銚子での富士山方位の測定では、皆に走って貰い、ご苦労だった」

「あすは利根川を測って常陸に入る」「大河で対岸との連絡が大変なので、これから明日の打ち合わせを致したい」「皆、略図の前に近寄ってくれ」

忠敬「まず、渡船場で少し離れた場所に3間の大梵天①をたてる。利印1番としよう」



「そこから上流に約百間離れた場所に梵天②を立て、2番とする。1番と2番の間が補助線となる。これを正確に間縄で測る」

「次に、梵天③番を常陸側に渡し、渡船場近くにたてる」

「立て終わったら、梵天①から③番の方位、②番の方位と②番から③番および①番、そして③番から①番を測る」

平山「かしこまりました。どう分担しますか。私が秀蔵さんと先にわたりますか」

忠敬「いいだろう。郡蔵が添え羅針、秀蔵が第③梵天だ」「細部は任せるが位置を直すときは、いつ

ものとおおり梵天を振って合図する」

忠敬「こちら側は私が本羅針、尾形が梵天②番、宗平が間縄だ」「川幅は宿についてから割円八線対数表で求める」「質問はあるか」

嘉助「荷物は何時渡しますか」

忠敬「こちら側には人足2人だけ残して、作業に必要なものは先に渡そう」

郡蔵「かしこまりました」

翌日早朝、夜明けとともに伊能隊は渡船場に集まる。案内の銚子の町役人も見送りに出る。

郡蔵の指導で①番の杭を打ち梵天を立て、尾形は②番梵天を持って走って位置につく。渡し場では、町役人が一般客を整理して待たせて、伊能隊の乗船を待っていた。渡船の用意が出来たとの知らせを受けて、添羅針を持った郡蔵が先発隊を出発させる。

郡蔵「先発組乗船。先生、お先に。」

2頭の馬を含めた乗船は大騒ぎだったが、このような形で川幅をはかり、常陸側に入った。

*

幕府勘定奉行からの先触れを受け、波崎町の町役人2人が船着場に出迎えた。

町役人甚左衛門「これはこれは伊能様。お疲れ様です。波崎の町年寄の甚左衛門と孫平でございます。今日は五郎左衛門にお泊まりだそうですが、それまで御案内させていただきます」

忠敬「恐れいたします。よろしくお願いします」

甚左衛門「私共に出来ますことはお手伝いします。お指図をお願いします」

忠敬「恐縮ですが、お一人は先頭に立って、街道の道案内をお願いします」「そして、通行の方々に幕府天文方の御用で海岸筋を測量するので、道を明けていただくようお願いください」

孫平「お安い御用です。私が引き受けます」

忠敬「それから、お一人は私の傍らにいて、地名、山名、など地理的な質問にお答えください」

甚左衛門「さーて。これはご満足いくお答えが出るかどうか分かりませんが、やってみましょう」

忠敬「それでは初めです」

隊員の方へむき変え、

忠敬「ご覧のように町役人の方々が忙しいところをお出役だ」「伊豆から安房、上総、下総の測量を通じて固まった伊能測量術の基本どおりに常陸の測量に入る」 測線の方向を見ながら

「波1番梵天は百間先の浪打際から三〇間くらいの場所にする。慶助、添え羅針の郡蔵と出かけてくれ」「町方の衆、案内をよろしく」

慶助・郡蔵・町役人「かしこまりました」

町役人は「どいたどいた」と見物人を排除しながら先頭に立つ。羅針を持った郡蔵と梵天を持つ慶助は、木杭と掛矢を持った人足をつれ、急ぎ足で歩きます。

忠敬は利③番から波①番の方位を測る。本羅針では、方位は北を基準に十二支に分割し、それをさらに一〇分に分割した。羅針、つまり小方位盤の1目盛りは3度となる。3度では荒すぎるので、1/2, 1/3, あるいは1/4くらいまで目視で読みとった。

測り終わると利3番に再び梵天を立てる。合図を待って郡蔵が波1番から利3番の南からの方位を測る。この場合、忠敬と郡蔵のデータは一致する筈である。一致しない場合は調整をおこなった。日常作業のなかで誤差を防ぐ手段である。

忠敬の計測が終わると、「宗平、間縄」と声がかかる。宗平は間棹を持って、波1番に向かって、人足

に縄を張らせながら歩きます。縄尻は人足が3番の位置に固定する。間縄は六〇間なので足りない場合は、間棹を立てて中継ぎをおこなう。

＊

先触れは、昨二六日奥州小名浜まで発出していた。このあと、約三里進んで矢田部泊。高六三〇石、家数一八六軒。二八日国末（くのこせ）村、谷田部より六里、家数二六軒、領主五名の合給。二九日五里進んで汲上村へ。宿舎は田舎旅宿で粗末。この日は途中の小宮作村、神向寺村付近の海岸で、伊能忠敬と七左衛門に出会い、依頼の品を受け取り、しばらく立ち話をした。

晦日、成田村。惣名を夏海という。松川陣屋郡代方元締谷田十兵衛が酒一樽、松魚一匹を持って挨拶に出る。七月二日久慈川を渡って会瀬（あふせ）村。会瀬は歌枕などに良く出る地名で、宿の床の間に掛けてあった軸の歌を日記に写している。

＊

三日、助川村（日立市）、高萩村を経て足洗村に忠敬は七つ半後に着く。測量人は夜五つ後到着というから完全に夜だ。常陸では忠敬は先行し、作業は平山郡蔵以下の隊員にまかされていた。作業が標準化され、忠敬の監督を要しなくなっていたのだろう。それにしても五つといえは八時ころだ。隊員は頑張っていた。忠敬は先行して段取りをつけている。

五日小名浜米野村着。塩釜まで先触れを出し三日間逗留。代官手代が挨拶に出る。幕府勘定奉行からの先触れの威力で、領主の役人が所々で挨拶に出ている。第一次と較べれば遙かに仕事がやりやすかった。

八日小名浜出立。四ツ倉、広野、小浜、受戸を経て一三日相馬領塚原村に着く。ここで月食を観測しようとした。昼頃着いて、手ごろな百姓の隠宅を借りて観測しようとしたが、うまくゆかないので一泊で切り上げる。一四日鳥崎（からすき）村に移って九つ後名主利兵衛宅に落ち着く。ここでも名主宅は海岸に遠く、月の帯食は見えそうもないので、海岸の百姓家を借りて天測場所を作っておき、夜、雲間で恒星の高度を測った。一五日逗留、昼に太陽の南中を測りに行き、夜も天測場所に出かけたが終夜曇天で月食は測れなかった。観測は失敗だった。

月食の観測は経度差を測るためのもので、江戸の天文方と同時観測し、食の始まり、終わりの時刻差から経度差を求めようとしていた。時刻は前日の太陽南中からの時間を推揺球儀（振り子時計）の振動数で測った。一日五九、〇〇〇回だったという。

だから前々から大変な準備が必要なのである。しかし、月が見えなければ無駄になる。お天気任せの努力だった。



垂揺球儀 伊能忠敬記念館蔵

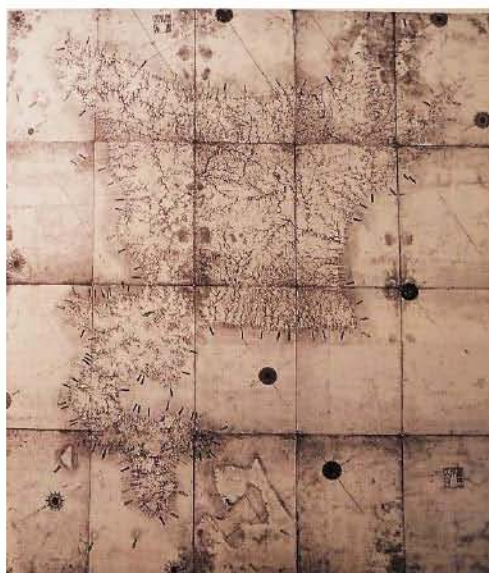
伊能忠敬 周辺の人⑤

間宮林蔵 前田幸子



はじめに

間宮林蔵は本誌にもたびたび登場する人物である。伊能忠敬の測量術の教え子であり、自身も測量家・探検家として著名である。さらに近年、最終版伊能図の北海道図がすべて間宮林蔵の測量に基づいていることが解明された。会誌第七十五号で「北海道図と間宮林蔵」の特集が組まれたことは記憶に新しい。間宮林蔵は伊能忠敬研究において、ますます重要な人物となっている。これを機に、間宮林蔵の人間的な面についてもさらに探求し、忠敬が称賛してやまなかったその人格的魅力についても理解を深めたいと思う。今回は史料にみえる逸話や事跡を中心に、間宮林蔵の実像を探ってみよう。



間宮林蔵『北海道実測図』国立公文書館

おいたち

間宮林蔵は安永九年（一七八〇）常陸国筑波郡上平柳村（現つくばみらい市上平柳）に間宮庄兵衛・クマの子として生まれた。子供に恵まれない両親が、月読神社に祈願してやっと授かった一人っ子だった。家は農家で籾職人を兼業していた。貧しかったとも、割合に裕福だったともいう。八歳の頃から寺子屋に通い始めたといわれるが、その頃からさまざまな逸話が伝えられている。海老原庄右衛門に算術を習っているときに先生が割り算の説明をする、「それなら習わなくてもわかっていう」と言っさつさと帰ってしまった話、十三歳で筑波山に登り山頂近くの立身窟で立身出世を祈願した話、竹竿で樹木の高さや川の深さを測って遊んでいた話、小貝川の岡堰のせき止め工事で普請役の工事の拙劣さを笑い、竹籠を使った方法を提案した話、などいくつかの伝承がある。特に数学的才能を示す逸話が多い。並外れた利発さで神童と呼ばれていたといわれ、また両親の愛情を一身に受けて育ったためか、大人を恐れない大胆な発言が多かったようである。岡堰での竹籠を使った方法は籾屋の倅らしい着想だといわれるが、それにより林蔵はこの工事の担当者であった幕吏・下条吉之助に認められ、十三歳のときに江戸に出ることとなった。両親は下条に説得されて、林蔵を江戸に出す決心をしたという。林蔵は出府するに当たって隣村である狸村の名主飯沼甚兵衛の養子となった。間宮家のほうでは親戚から養子を迎えて継がせた。下条吉之助は林蔵を江戸に連れ帰ったあと、十八歳になるまで手元において修業させたといわれる。

蝦夷地へーカラフト探検ー（年齢は数え年）

十八歳頃から林蔵は測量家で普請役の村上島之允（別名・秦檣丸）（二七六〇―一八〇八）に師事し、寛政十一年二十歳の時、初めて蝦夷地に渡った。翌年、林蔵が二十一歳の時、第一次測量で蝦夷地に来た伊能忠敬と出会った。

二十三歳で林蔵は病氣にかかり一旦辞職したが翌年復職し、以後は東蝦夷地・南千島の測量に従事する。二十六歳で天文地理御用係として蝦夷地日高のシツナイに勤務、翌年にはエトロフ島に渡り、沿岸実測や新道開発にあたった。

文化四年（一八〇七）四月、ロシアの軍艦がエトロフ島のシャナの会所を襲う「シャナ事件」が起こった。居合わせた林蔵（28）は徹底抗戦を主張するが、会所を放棄して箱館に帰る結果となる。六月、この事件に関し箱館奉行の取り調べを受け、十二月には江戸へ召喚され取り調べされたが、林蔵のみ咎なく、ただちに蝦夷地に戻った。この年、堀田摂津守の蝦夷地巡検に

当り林蔵に踏査を下命、以後次第に重用された。文化五年（一八〇八）林蔵（29）は第一回カラフト探検を命じられ、松田伝十郎とともに大陸に最も近いラツカ岬まで行き、カラフトが島であることを目視にて確認した。閏六月宗谷に帰るが、再度の探検を願い出て翌七月、第二回目のカラフト探検に出発、現地で越年する。

文化六年（一八〇九）林蔵（30）はカラフト島北端のナニヤーに至り、土地の首長とともに海峡を渡って大陸に到達、満州仮府デレンで清国役人と会見する。九月に宗谷に帰着。文化七年（一八一〇）林蔵（31）は村上貞助に口述して『東轅地方紀行』『北夷分界余話』を著した。

再び蝦夷地へ―内地測量の旅―

文化八年（一八一二）江戸に帰った林蔵（32）は『東韃地方紀行』等の報告書を幕府に提出し、身体的理由から退職を願い出たが、探検の功績により一生無役、松前奉行支配役下役に昇進という異例の待遇となる。五月から伊能忠敬に測量術を学び年末には再び蝦夷地に向かった。

文化九年（一八一三）松前の獄舎にゴロヴニンを訪ねる。秋にいったん帰府後、九月再び蝦夷地に下り測量を続ける。以後は江戸と蝦夷地を往復しながら測量を続け、四十歳から蝦夷地内部の測量にかかる。この測量で集めたデータは『大日本沿海輿地全図』の蝦夷地部分の最終版に活用された。

後半生は幕府隠密―シーボルト事件以後―

四十三歳で測量を終え、江戸に帰って普請役となった林蔵は、四十五歳からは内偵や巡視、見分といった職務に従事する。四十七歳のときに最上徳内とともに江戸に来たシーボルトを訪ねたが、文政十一年（一八二八）シーボルトから届いた小包を奉行所に差し出したことが発端となつていわゆるシーボルト事件が起こる。林蔵（49）は密告者として非難され、人望を失った。翌文政十二年、林蔵（50）は隠密として長崎に下る。以後は外国関係を中心に各地を偵察し、密貿易の摘発をおこなったりしている。天保三年（一八三二）林蔵五十三歳の時、シーボルトが著書『日本』で間宮海峡の名を世界に紹介した。以後も薩摩へ入国して隠密活動をしたり、水戸家に出入りするなど活躍したが、五

十九歳で病の床に就き、天保十五年二月二十六日、六十五歳で江戸の自宅で死去した。

間宮林蔵三十歳の肖像

『東韃地方紀行』より

林蔵は三十歳のとき第二回目のカラフト探検で大陸に渡った。このことを以て「間宮海峡発見」とする説もあり、この探検行が林蔵の最大の業績とみなされているようである。林蔵は同僚で親友でもある村上貞助（村上島之允の養子）に口述して『東韃地方紀行』『北夷分界余話』『北蝦夷島地図』を著し、詳細な記録を残した。特に清国官吏の饗応を受けた場面は林蔵の人生のハイライトと言ふべきであろう。村上貞助の写実的な描画で林蔵の姿が鮮明に表現されており、非常に興味深い絵となっている。これらの著書は幕府に献上され、幕府はその功績を高く評価した。

清朝役人の船中で、酒を振る舞われているこの人物こそが間宮林蔵とされています。



『東韃地方紀行』艀廬中置酒 国立公文書館蔵

林蔵の人物像

林蔵については、内外の著名人による記述が数多く残されており、どれも興味深い。長くなるが、諸本にみえる逸話を以下に掲げる。

手指欠損

久坂玄瑞『俟采扱録』（原漢文）

我が清末船越翁、嘗て江戸に遊びて倫蔵を見る。手指尽く腐壞痂結す。その苦楚想ふべき也。

【備考】林蔵の手指はすべて凍傷により変形欠損して、北方探検の労苦を忍ばせた。

蝦夷言良く通ず

久保田見達『北地日記』

（文化四年五月）林蔵は蝦夷言は至つてよく通じ、其の上此の嶋の絵図を仕立て新道を開方を動しゆく。地理も巧者。

読書好き

小林東鴻『蝦夷草木図』

…：間宮某ノテトを経て、混同江を遡ること二里黒竜江地方徳楞里略の満州の官府に至り、三姓副都統衙門差派の官客数名に遇て、殺家炊梁、醇酎の饗宴を受く。その人坐船蓬居の狭きにも坐帙をはなさず、飲食対話の暇も手巻をすてずと。実に文を好むといふべし。その往返辺サンダ・コルテッケ其他諸夷の郷邑を経過し、略その風俗をみる、是未曾有の事なり。

【大意】間宮林蔵が満州の官庁に行き、官吏数名に会つて酒食のもてなしを受けた。林蔵は狭い船室の中でも、飲食対話中でも、書物を手離さなかつたという。非常な読書好きであつた。

清国官吏の信頼

小宮山楓軒『懷宝日札』

間宮林蔵韃地ニ至リ、清ノ官人ニ面ス。官人ノ曰、汝吾民トナルマジキヤ。サラバ、北京マデ同道シテ縦観セシメント云フ。林蔵曰、公等イマダ某ガ為人ヲモ知シラズシテ、如此ノ言アル、疑フベシ。清人曰、子ハ漢字ヲ知ル人ナリ。サラバ聖人ノ道ヲ知ラン、ココヲ以テ疑ハズト。林蔵親シク蟠龍ニ話スト云フ。其紀行ヲ幕府ニ上リシトキ、諸有司ノ議ニテ、故障アルベキトコトハ、多ク削ラセタリト云フ。

【大意】間宮林蔵が満州に渡り清の官吏と対面した。官吏が北京まで案内してくれるというので、林蔵は「あなた方は私にどんな人間であるかも分からないのにそんなことを言うのはおかしい。」という、清の官吏は「あなたは漢字を知っている人だ。ならば聖人君子の道を知っているはず。だから疑わないのだ。」と言つた。林蔵がじかに窪木清淵に話したそう。林蔵の紀行文を幕府に呈上した際、諸役人の意見により差障りのある箇所は多く削除されたという。（※蝦夷人に友好的な文言は削除された。）

学者・武人・旅行家 ゴロヴニン『日本幽囚記』

そのうちに一人新顔がやつて来た。それは日本首府から派遣されて来た、間宮林蔵という測量天文家であつた。（中略）彼はそのためにも早速ながら自分の器具類をわれわれのところへ持ってきた。例えばイギリス製の銅の六分儀、コムパス付きの古風な観測儀、作図用具、人工水準用の水銀などで、「この品々の西洋風の使用法を教えて頂きたい」という頼みであつた。

彼は毎日通つて来て、殆ど朝から晩まで詰めきりで、自分の旅行の話をしたり、彼が描いて来た各地の要図や風景などを見せてくれた。それはわれわれから見ても極めて珍しいものであつた。彼は日本人の仲間では大旅行家と認められ、日本人たちはいつも彼の言を傾聴し、どうしてそんな大旅行を思い立たれたのか、と驚嘆していた。というのは彼は千島諸島中第十七島まで行き、サハリンにも行き、そのうえ満州領のアムール河に達したからであつた。彼の虚栄心は大したもの、絶えず自分の壮挙や、その間に耐えた苦勞を物語り、その最上の証明として旅行中に炊事用に使つた鍋を持って来ては、獄舎の炉で何や彼や煮炊きして、自分でも食べ、われわれにも御馳走してくれた。それから彼は米飯で火酒を蒸留する器を持っていて、いつも脇の炉にかけていた。出来た酒は自分でも飲み、われわれにも御馳走したが、水兵たちが大好きだつた。（以下、林蔵の天測術についての記述や林蔵が極めて珍しい情報を沢山知らせてくれたという記述が続く）

この測量家と知り合いになつた勿々の頃、彼は日本では学者として有名なばかりでなく、卓越した武人として名譽の者であるということを知つた。フヴォストフが日本を襲撃した時、彼は択捉島にいて、他の同僚たちと一緒に山中に退却したが、幸いロシアの小銃弾が一発、背部の軟かい場所に命中したが、倒れずに無事に落ち延び、その功によつて官位を授けられ、現在でも年金を貰っているのである。間宮林蔵はわれわれの面前で大言壮語して、（中略）いうこともあつた。われわれは笑つて、こう冷やかに

てやった。(中略)すると間宮はむつとして、「日本人は戦さにかけては外国に負けぬ」と説得するのであった。この男はわれわれの目の前で日本の兵術を自慢して、われわれを威嚇した、最初の日本人であったことを、特記して置かなくてはならぬ。そしてわれわれだけでなく、彼の同僚にまで、嘲笑されていたのである。(以下、林蔵の緯度・経度測定術についての記述)この学者はわれわれの大敵となったが、年がら年中議論をしたり喧嘩をしたわけではなく、時にはいろいろな問題について仲よく話をすることもあった。(以下略)

林蔵の告発

高野長英『蛮社遭厄小記』

幕府は(中略)ただひたすら外国の侵略を警戒し続けてきたが、世の中には善事がすくなく凶事が多いのがならいである。たまたま高橋作左衛門と外国隠密役間宮林蔵との間にすぎが生じた。ところが高橋氏が、不謹慎にも、文政年間中、かれが作成した日本地図を、誇らしげに外国人にあたえ、かつ深く外国人とまじわり、書状を往復したため、これを探知した間宮が、幕府に謀叛人として訴え出た。そのため幕府は、かれを捕えて獄に下し、糾明した。しかるに高橋氏には、もちろん叛逆のくわだてがあるわけではなく、かえって国家にたいする忠節の功が多いことが判明した(以下略)

【備考】林蔵の行為は私交を以て公事を曲げざる正当な行為ではあったが、当時は否定的にとらえられたようだ。一部人士の反感を買い、従来交際があった人物でも、事件以後は敬遠する者が多かったといわれる。

乞食姿で廻国

渡辺崋山『全楽堂日録』

(天保二年八月 勘定吟味役 中川忠五郎の話) 間宮林蔵は予が配下のものなり。……又偵察にいづるには、髪も月代もせで、乞食・非人のごとく仕立、いとだて(※むしろ)を負、諸国を廻ると云。我玄関へ来てものを乞ふに、取次のしらぬものは、真の乞食の狂人となりしやと、とがむるもありとぞ。

乞食姿の苦勞話

間宮林蔵本人談話

探偵は形を変じ、衣を易へ、さまざまの人物となりて、微行することなれど、尤も困ぜしは乞丐(※乞食)とありしとき、身に着るものは薄く、手荷物などもなきに、常に路費百両ほどは必ず所持せしゆえ、是をかくし持つべきやうなくて困じたり。古布などに包み、腰にまとひ置くに、物に触れば忽ちにガタリと音する故、人に悟られやせんと、断へず心にかゝりし、是には困りし。

ふすまの下張

小宮山南梁

西国の大藩にて、一切他邦の人を封内へ立入らしめざるものあり(※薩摩のこと)。林蔵これを探らんとて、一策を構ひ、其隣国のものなりとて、彼の城下なる経師の弟子となりて、粗(あらあら)その国の虚実を窺うことを得たり。居ること三年、たま／＼城内に張付の修理ありければ彼経師に従て入込み、因て城内を一覧して帰れり。後に其藩侯在府の折に、幕府の有司某をその邸に招くことありしに、談、彼の藩内のことに及び、城内の形状まで詳にこれを知て語りければ、侯大いに恠(あや)しみ、其故を問

はれしに、某笑て、不審し給ふも理(ことわり)なり、帰藩の折に城内其辺なる紙障(ふすま)を剥て、其下を見給へといふにより、侯、後に其言の如くすれば、下張の内に、往々名刺一葉を挿みて、大府(幕府)探偵間宮某とありしに、一藩皆その探偵の妙に驚きしとなり。

【備考】薩摩藩潜入は林蔵の密偵で最も大きな仕事だった。命がけではあったが、成功すれば、そうとうに出世したものであるという。

洋酒のふるまい

加藤桜老の日記

天保二年十月、桜老が深川の木場に林蔵を訪れた際、林蔵はロシアの酒、フランスの酒などを持ち出して、桜老に振る舞ったという。

地図が散乱

古賀謹堂が吉田賢輔に語った話

幕府の儒官古賀侗庵の子謹堂が(文政九年頃か)深川蛤町の林蔵の隠宅を訪れた際、林蔵は褐(粗衣)に巻き帯をしたままで謹堂を迎えた。室内には地図が散乱し、傍らには天球儀や地球儀があるのを見たばかりだ、と語った。

寒中も単一枚

安井息軒『睡余漫筆』

余が江戸に來りし頃は八十許の老人なりしが、寒中も単(ひとえ)一枚にて暮せり。

足の裏を鍛える

川路聖謨『寧府日記』

(弘化三年五月十四日)林蔵が夏は多く跣足(だし)で歩いているのを見て、「先生いかなればかくはした給ふぞ」と問うと、「足のうら柔(やわ)に成とこまることある」と答えた。

仙人の如し

栗本鋤雲『独寐寤言』

此人老人に及び、深川に住せし由。其旧縁故あるを以て、時々戸川播磨守が家に来り夜譚（よばなし）し、一酌陶然の後、家に帰るに懶しとて泊する事も度々なりしが、家人に請ひて一片の蒲団を借り、常に帯も解かず其儘座敷の隅に横臥し、夏も衾（かき）せず、冬も炉せず、深更と雖も目覚れば告げずして去る、十年一日殆ど仙人の如くなりしと、戸川の親戚なる医官曲直瀬養安院が直話なり。

我がまゝなる生れ付 渡辺畢山『全樂堂日録』

（林蔵の上役 勘定吟味役 中川忠五郎の話）

間宮林蔵は予が配下のものなり。このもの隠密御用相勤候事いと奇特なれど、其人となり甚奇人にて、我がまゝなる生れ付なれば制しがたき事なり。……又屋敷替などするに、いつもいずれへもとどけし事なし。……さりとして其事をもて責れば、面倒なりとて直に退身の願を出す。……されどいと廉直なる人にて、倅を召出さんといふに固辞して云には我等はもと百姓なり。かやうなる危難の間に御奉行をいたし候も、我能にて侍れど、倅が幾年生れかえり候とて、我真似は出来侍らざれば、もとより百姓のことなり、なにも子孫の栄を望み候に心なし、と申せしとぞ。（※倅＝生家間宮家の養子）

御旗本に召出され候共辞退

小関三英書簡

（天保六年六月）自ら出世を望候杯（など）と申候には無之、たとへ御旗本に召出され候共、辞退致候存慮之由に御座候

その功は功として

シーボルト『日本』

我がヨーロッパ人をして、日本の北部にありて黒竜江まで連なる島々およびこの大河が海に注ぐ所にて浸す国土自身にいて、精密なる知識を得しめたるものなり。最上徳内及び間宮林蔵の二人これなり。……この学問上の大功績は間宮林蔵にも認めざるべからず。あるいはこれに過ぎたりともいうべからん。彼は余の日本滞在の終の遭厄（※シーボルト事件）の年において、日本政府が我に對する取調を誘致したる人にして、余もし自ら救うの道を知らざりしならば、我が日本記載の最も重要な材料は、この奇禍のため皆湮滅したるならん。されどその功は功としてこれを認めざるべからず。彼は蝦夷・サハリンの旅に最上徳内の足跡のみならず、彼は最上の発見の境界をば大いに超過したり。

日本人は我を征服せり クルーゼンシュテルン

Les Japonais n'ont vaincu!

【備考】シーボルトが紹介した地図を見たロシアの世界周航探検家クルーゼンシュテルン海軍提督は「日本人は我を征服せり」と叫んだといわれる。彼はかつて間宮海峡を確認しようとして果たさず、カラフトを半島だと断定した。

林蔵は三角測量を併用

シーボルト『日本』

彼は三角術家にして、画を善くし、又三角地点測量の天文学的知識をも抱きたり。

【備考】林蔵は導線法とともに三角測量法も併用していたようだという。国会図書館蔵『蝦夷

全図』に大小いくたの三角網の記入があることなどは、その証左となしうるといわれる。

犬となりて来たる フイツセル『日本風俗備考』

我が日本の一友人：甚だ驚怖せし状ありて曰く「今日、江都の官人、間宮林蔵といえる者に出会いし」：これより前、間宮林蔵犬となりて来たる風評あり。この人に見つけらるれば、危難を蒙るべしといえあえりしかば、友人も大いに怕れたりしに、ついに不幸を受けたり。

【備考】フィツセルは出島オランダ商館員。林蔵の監察が諸人から恐れられていたことがわかる逸話である。風評の表現には英雄間宮林蔵が隠密になったことへの驚きが感じられる。

軽賤には稀な志ある人物 松浦静山『甲子夜話』

幕府の下級役人の中に間宮林蔵という者がいる。一度会いたいたいと思っているが、まだ会えていない。この人は以前、蝦夷地で事件があったときに蝦夷地の最端にまで到達し、満州に入国して清人にも会って話をしたと聞く。近ごろ聞いた話では、林蔵は常陸の人で、先年の蝦夷御用の時に松前奉行支配下役に召抱えられたが、蝦夷地が松前氏に返却された後は御普請役となり、御勘定所に従属してその後は天文地理の書を読み、元来妻子も無く、家には甲冑が一領と着替が一領、ほかに当面使用する武器と兵書などが有るだけだという。軽賤の者には稀な、志ある人物である。御勘定奉行の密旨を受けてあちこちで御用を勤めているので在宅することも少なく、一人

の備われ婆が留守番をしている。今年「庚寅」(※天保元年 一八三〇) 長崎奉行に従って旅行中に、備前国鞆の津で流行病にかかり危篤となった。このとき林蔵は所持していた書類をすべて焼却し、翌日奉行に直接対面して密旨の証文を手渡しで返却し、宿舎に帰ってまもなく死んだという。この男は「馬革を以て屍をつつみ還葬る」(※戦場で死ぬこと。馬革に屍を裹まれて還ることこそが男子の本懐であるの意) という言葉にも恥じないだろう。悲聴すべし。頃は八月のことだという。検使として御普請役が二人、出立して備州に赴いたということだ。

【備考】林蔵は静山死去後の天保十五年まで生きたので、この逸話は静山の間違いとされる。

甲冑道楽

小宮山楓軒『楓軒年録』

(天保六年六月四日付 楓軒あて友部好正書簡)

「林蔵甲冑を多く集め申候」

【備考】前掲の松浦静山『甲子夜話』では天保元年当時は林蔵は甲冑一領を所持していたが、天保六年現在の本書簡では甲冑を「多く」所持している。これらの史料は、晩年の林蔵にはかなりの余裕があったことを窺わせる。洞富雄『間宮林蔵』は林蔵の経済面について、「本給三〇俵三人扶持に、年金一〇両(天保二年以降)・足高二〇俵(天保四年以降)の手当があり、しかも晩年には水戸家からも月俸を受けていたのだから、ぜいたくは何ひとつせず、傭婆と二人だけの生活では、甲冑道楽をやるくらいに余裕があることは、はじめからわかっていたはずである」とのべている。

幕府の評価

前項で洞富雄は林蔵の俸禄は「本給三〇俵三人扶持」と言っている。しかし『江戸幕臣人名事典』(「寛政重修諸家譜」以降の幕臣の人事記録)をみると、林蔵の俸禄は足高や役扶持が加わって、はるかに高かったことがわかる。

高百五十俵十人扶持 『江戸幕臣人名事典』

間宮鉄次郎(まみや・てつじろう)

□四歳 紋所四ツ目 高百五十俵内三十俵三人扶持 本高百五俵御足高外御役扶持十人扶持 本国常陸 生国武蔵 拝領屋敷 本所石原町 当時浅草□町御蔵手代組頭青柳栄之助方同居 養父間宮林蔵死御普請役 実祖父青柳久左衛門死御蔵手代 実父 青柳繁右衛門 御蔵手代 弘化元年八月二十五日林蔵明跡御普請役 付 嘉永七寅年閏七月二十七箱館奉行支配調役下役被仰付 安政三辰年十二月二十四日箱館奉行支配調役並被仰付 万延元年十二月晦日箱館奉行支配調役被仰付 (傍線筆者)

間宮鉄次郎は林蔵亡きあと養子となって江戸の間宮家を継いだ人である。この資料から林蔵の俸禄がおそらく最終的には高百五十俵十人扶持であったこと、また拝領屋敷もあったということがわかる。高橋至時が天文方に拔擢されて旗本になったとき、俸禄は高百俵だった。これと比べると、林蔵は身分は低かったが旗本以上の高給取りだったといえる。幕府が林蔵の業績を、高く評価していた証左であろう。林蔵にとって百五十俵は金銭的にはあまり意味がなかったかもしれないが、幕府が高給を以て自分の業績を評価したことには満足していたのではない

だろうか。なお、晩年は落ちぶれて貧窮したという説が散見されるが、前述のような逸話から考えると、実際は高給取りだったにもかかわらず、世の人々には林蔵の暮らしぶりが、あたかも貧窮のどん底にあるかの如くに見えたということであろう。

明治政府の評価

林蔵没後五十年目にあたる明治二十六年(一八九三)、東京地学協会から間宮林蔵への贈位が申請された。幕府の小吏でありながら、その業績によって外国の書物にも名が載っている林蔵を「近世ノ偉人又愛国ノ志士」と讃え、没後五十年に当たって、ぜひ林蔵の功績を世の人々に伝え、地学(地理学等)奨励の一助としたいという趣旨であった。これに対し、十一年後の明治三十七年(一九〇四)日露戦争開始の年に、林蔵のカラフト探検の業績が改めて認識され、四月二十二日に正五位が贈られた。

林蔵の跡目相続

林蔵は子がなく、また士分は自分限りでよいとして、後継ぎも決めていなかった。したがって林蔵の死後は士分を継ぐ者がなかったため、江戸の間宮家は断絶する運命にあった。それを惜しんだ上司の戸川播磨守らが林蔵の死を秘し、翌月「跡目相続伺」を上申、半年後の八月にこれが許されたという。跡目をついだ養子の鉄次郎(15)は、浅草蔵前の札差青柳家の次男で、間宮孝順と名乗って普請役に任ぜられ、安政元年にはカラフト探検に従事、十四年にわたって蝦夷地関係の仕事についた。

忠敬の「贈る言葉」―偉なるかな倫宗―

文化八年（一八一二）、『江戸日記』には忠敬宅へ測量技術を学びに来た林蔵が度々登場する。技術を習得したあと、林蔵（32）は十二月再び蝦夷地に向かう。かたや忠敬（67）は第八次測量のため十一月、九州に旅立つ。出立に際し、忠敬が林蔵の求めに応じて贈ったのが「贈間宮倫宗序」である。この文章は忠敬と林蔵の出会いが第一次測量の時だったと記述されていることと知られる。ただし、よく言われる「師弟の約束をした」ことは書かれていない。

贈間宮倫宗序

非常之人に世にまたとない優れた人物
非常之功に世にまたとない勲功

【大意】昔の人は言った。世の中に非常の人が

いて、はじめて非常の功がある。非常の功は成り難いが、それ以上に非常の人を得るのは難しい。非常の人を得ることができれば、非常の功が成就するのはたやすいのだ。寛政の末、幕府は多くの役人を派遣して大いに蝦夷地を開発させた。しかし蝦夷地は遠く東北の辺地にあり、北方異民族の土地と接している。酷寒でしかも習俗も異なり、実情がよくわからないため、うまくいかなかった。間宮倫宗という者がいる。かつて役人とともに蝦夷地を往来していたが、その後は単独で探査し、遂には満州の地に至り、清国の官庁を訪れて帰って来た。その詳細な報告書を幕府に献上したので、蝦夷地の精粗を指さして考えられるようになった。幕府はその功績を評価して職に任じ、さらに蝦夷地の測量を

贈間宮倫宗序

古人有言曰。世有非常之人而後有非常之功。蓋非常之功難成而後非常之人最難得焉。其及得非常之人。則非常之功庶幾乎可就矣。寛政之末。霸府令群吏大開蝦夷地。於是航之於海。墾之於田。教育之於指方。各有奇人才子以慮之。而蝦夷之為地。僻在東北隅。與北狄相接。層氷凝寒無粒食無居室。自開闢以來不見教條所存。撫欲撫育之無由躬臨之。土地之広袤不詳其方。夷俗之多少無知其實。故群吏之所慮率不得其歸者蓋由此矣乎。有間宮倫宗者。嘗與群吏俱往來夷地者有年矣。而後孤劍單身不厭窮厄地之所盤旋。島嶼之所向背。悉窮其方以詳其風容以察其態狀。遂到于北狄滿州之地。訪清人之都護府而歸。具以獻有司。於是夷地之詳略可指而慮也。霸府偉其功而命之職。更入夷地。而慮其方。今茲辛未之冬將発。就余問測量地之術。先是寛政庚申之歲。余亦稟命測蝦夷地。中路與倫宗相見。自是相親如師父。今也余職量地將赴九州。倫宗曰。君忘赴西州吾則入北狄。地之相去數千里。相別有年數矣。願乞一言以為會期之符。余曰。偉哉倫宗。政府大起非常之役非無其人。然如子之所履歷。豈啻櫛風沐雨之云哉。絶粒食犯凝寒。能人外獸内之俗徒吾不逆而。終極其根実者有復幾何哉。行矣倫宗。能修其職以裨益政府非常之功乎。是為贈言之別。

文化辛未仲冬

伊能忠敬

命じたので、今ここに辛未（※文化八年 一八一二）の冬、蝦夷地に発とうとしている。倫宗は私に測量地の術を習った。以前、寛政庚申（※十二年 一八〇〇）の年に私も幕命を受けて蝦夷地を測量し、その途中で倫宗と出会い、以来、師のような父のような関係で親しんだ。今、私は測量のため九州に行こうとしている。倫宗が言った。「あなたは西海岸に赴き、私は北方異民族の土地に入ろうとしている。お互いに数千里も隔たって何年間も会えない。願わくはお言葉を一言いただいて再会を期する符にしたい」と。私は言った。偉なるかな倫宗。幕府は大いに非常の役を起し、優れた人材もいなかったわけではないが、君の履歴は単に「風雨にさらされて辛苦奔走した」というだけではない。米飯を絶ち、酷寒を乗り越え、異習俗の者を服従させて職務を遂行し、ゆくゆく蝦夷地の根本の実情を究めることができれば、どれほど多くの収穫があることか。行け倫宗、その職務を全うし、非常の功績をたてて政府の役に立て。以上、励ましの言葉を贈り、別れとする。

【参考文献】

- 『間宮林蔵』 洞富雄 吉川弘文館
- 『間宮林蔵』 赤羽榮一 清水書院
- 『間宮林蔵の再発見』 大谷恒彦 ふるさと文庫
- 『近世日本の北方図研究』 高木崇世 芝 北海道出版企画センター
- 『東韃地方紀行』 間宮林蔵述 東洋文庫 平凡社
- 『日本幽囚記』 ゴロヴニン 岩波文庫
- 『伊能忠敬研究』 57号 河島悦子 伊能忠敬研究会
- 『伊能忠敬研究』 29・30号 安藤由紀子 "
- 『伊能忠敬研究』 41号 井口利夫 佐久間達夫 "

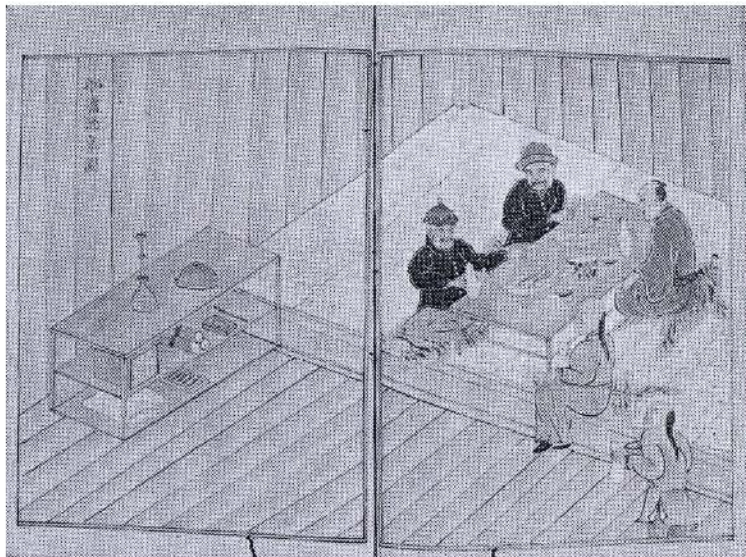
余話

間宮林蔵の肖像について

昨年十月、『江戸幕府日記』を閲覧しに国立公文書館を訪れた際、企画展「ようこそ歴史資料の宝庫へ」が開催されていた。その中に間宮林蔵述『東鞆地方紀行』『船盧中置酒』図があり、赤い矢印で「この人物こそが間宮林蔵」と解説がついているのを見て驚いた。「今までのイメージと、あまりにも違う・・・」。間宮林蔵といえば、だれもが裁着袴に紋付羽織を着て測量用の鉄鎖を手に入っている、あの肖像画を思い浮かべるだろう。間宮林蔵のイメージは、この肖像画と「隠密」という言葉で出来上がっているのではないかというくらいにインパクトの強い名画である。たまたま手元にある大谷恒彦著『間宮林蔵の再発見』の「林蔵の肖像画の行方」の項で、この画のできるまでが詳述されているので、以下に概略を紹介する。

間宮林蔵の肖像画として著名なこの画は、松岡映丘画伯（柳田国男の実弟）が明治四十三年に描いたものである。画伯は間宮林蔵の若き日の雄姿を描き出そうと苦心し、生家の間宮正倫氏ら林蔵の血統の生存者をモデルにして描いた。顔貌はそれでよしとして、結髪が問題であったが、「先生（林蔵）が生前画工に画かしめたる清吏と満州デレンにて船中对酌の図有り。この図中の人物は極めて小さく画きあり候へども、幸いに先生の結髪だけは相判り候につきまげはこの図によることとし、かくて先生が、間宮家の定紋付の羽織を着、脚絆をはき、海上測量用の鉄鎖を持ち居らるる所を写すべし」と述べて、画伯が間宮家所蔵の船中对酌の図を

参考にして描いたことを明らかにしている。『間宮林蔵の再発見』所載の間宮家所蔵図が左上の図である。この画が小さく、また横向きで容貌がわかりにくいいため、画伯がモデルを必要としたことがわかる。左下の公文書館所蔵図と酷似しているが、林蔵の部分だけが異なっており、月代を剃り、髭がない。公文書館所蔵図の林蔵は乱髭髭面で野人的な姿である。松岡画伯が描きたいと切望した林蔵の若き日の雄姿は、はたしてどちらに近かったのだろうか。（了）



『東鞆紀行』「船盧酒宴図」（東京間宮家所蔵）



『東鞆地方紀行』「船盧中置酒」（国立公文書館蔵）



間宮林蔵肖像（原本は戦時中行方不明）

小説

林蔵と秀蔵（下）

柏木隆雄

文化十二年四月二十七日、伊豆七島測量の旅立ちの日であった。忠敬は老齢と体調不良のため初めて測量に参加せずに居室に残った。

秀蔵は忠敬の看病と留守役として残る。測量隊を近所で見送ると言っていたが、品川まで見送りに出た。そのため帰宅が遅くなり挙句、茶屋で酒を呑み、帰宅したのは夜九つ。忠敬を見舞うのもなくすぐ自分の床に入ってしまった。

忠敬は不埒な行爲と激怒し、同じく見送りに出て泊りこんでいた親戚の伊能七左衛門に、家から出ていけと勘当の申し渡しをさせた。秀蔵は忠敬のいつもの癩癪とは異なる怒りに怖れをなし、家主の桑原隆朝に取りなしを頼んだが入れられず、翌日雨の中、忠敬宅を出て行った。

測量隊出立の日、忠敬は病臥していたので看病するのが当然だった。この日、秀蔵の不埒な振舞に佐原からの客人もあきれる。忠敬は秀蔵が佐原へ行っても家に入れないようにと強く伝言した。

佐原へは日本橋からおおよそ二十里の道程である。林蔵は下総の木下河岸からの定期の乗合い船には乗らずに、持ち前の健脚で陸路を辿ることにした。浅草の源空寺から行けるところまで行つて、明日、佐原入りすることにした。日光街道を横切り、木下街道に出て、その夜は鎌谷宿に泊まった。

翌朝、まだ明けぬ曉七つ半に宿を發った。手賀沼を過ぎ利根川の土堤に立つところに日の出となった。茫々と広がるすすきの原の向こうに銀の帯のような利根川が見えた。この眺めは蝦夷地の原野を貫く石狩川の流域に似ていた。

利根川の土堤の道を銚子に向かって歩いて行けば佐原に辿り着く。

佐原近くなると、江戸表に物資を運ぶ高瀬船の白帆が見えた。風がなく、停まっているような航行である。やがて大きな栈橋を持つ佐原の船着場に着いた。昼九つ半に到着した。“香取神宮此れより一里”の看板が立っている。町には南に直角に小野川という川幅七間ほどの掘割が入り込んでいて、遡って行くと町中に行けるように思えた。

伊能三郎右衛門家の所在を尋ねるとすぐに判った。この小野川に沿って左岸を歩き、四つ目の石橋をこえるとすぐ左手が伊能店と教えてくれた。その通り四半刻も歩かずに店に着いた。手前に長屋門があり構えは京町屋風で道沿いには紅殻格子が八間も続く大店であった。格子の一部は引戸になっていて、店への出入口に違い鷹の羽の家紋を染抜いた暖簾が掛けられている。

店先に積まれた炭俵を台車にのせて通り庭の奥の土蔵に運んでいる男に声をかけた。

「ご免、お頼み申す」

「へい、何のご用で」

男は、明らかに客ではなさそうな旅姿の林蔵にげんな眼を向けた。

「伊能家の者は居るかな、それがしは江戸の間宮という者であるが」

「少々お待ちを」男が店の奥に声をかけようとした時、帳場に座っていた男が立ち上がった。

「恐れ入ります。てまえは手代の駒三と申します。如何ような御用でございましょう」

林蔵は役職の身分は伏せて、「伊能先生に江戸で測量術の手ほどきを受けた間宮と申すもの、昨年ご逝去された忠誨^{ちかへ}どのとは厩局天文方でいくたびかお目にかかっておりまする」

手代の不審を解こうと忠誨の名もつけ加えた。「火急な用事で伺い申したが、要件はご当主に話したい」

手代の駒三は首をかしげて

「少しお待ち下されまし」と言つて奥に消えた。

伊能三郎右衛門家は、忠敬の嫡男の景敬が継いでいたが、忠敬が九州測量の時に病死し景敬の子の忠誨がその後を継いだ。忠誨は忠敬の願ひ入れで厩局に勤務し天文学を学んでいて、江戸と佐原の間を往来していた。そのような無理がたたつたのか二十二歳の若さで病死したため伊能三郎右衛門家の世襲は忠誨の代で途絶えてしまった。家業の継続は、当分の間、親戚の伊能七家で合議制をとり、規模を縮小しながら経営に当たっていた。手代が戻ってきた。

「恐れ入りますが、いま家主は出かけておりましてお目にかかることができませんが、間宮さまのことを他分存じ上げている者がおりますので店の者に迎えに行かせます。いま暫くお待ちいただきとう存じます」

「そうかお手間をかけてあいすまぬ、それでまえを知るといふ御人はどなたでござるか」

「神保敬慎さんです。そうそう、江戸に居る頃は伊能秀蔵と名乗っております」

林蔵はそれを聞いて驚いた。

「秀藏どのは佐原に居るのか、ぜひお会いしようござる。知っているところではない。同じ釜の飯を喰った仲だ」

師忠敬の晩年、秀藏が不埒な行いにより、忠敬の怒りから勘当され、江戸表からも放逐されたと後になって知った。

秀藏はいまこの佐原の町で敬秀塾を開き、子どもたちに和算や読み書きを教えているとのこと。

「いま使いを向けますからどうぞ奥でお待ちを」と手代が言った。

「かたじけない、ここで待たせていただく、その間に辺りを少し歩いて見とうござる」

林藏は秀藏を迎えに行く先刻の男と同時に外へ出た。

「ごくろうなことござる、相済みぬ」

男に小銭を握らせた。

店の前の小野川に架る木橋から急に音をたてて水がこぼれ落ちた。何の仕掛け、橋の上から覗いてみると木枠の樋のようなものがあり、そこにも水の流れがあった。

川柳の枝が水面まで垂れ下がって、風情のある光景を醸しだしていた。

秀藏らしい男が手を振って近づいてきた。あの早足の少し後に反りかえる歩き方は間違いなく秀藏だった。

「おお、間宮どの」

「秀さん、元氣そうだな」

二人はすぐには言葉がつながらなかった。十一年ぶりの再会である。秀藏は四十三歳になっていた。江戸の忠敬の許から追放されて佐原に戻っても伊能家に入ることもできず、親戚は気を遣って、忠敬の生家筋の神保の姓を名乗らせ、名前も忠敬

の一字をとって敬慎と改めさせた。

秀藏は伊能家の現状をいかつまんで話した。

「手代が主は出かけているといったそうだが、主などいまは居ない。七家の一つから養子を入れたがこれもすぐに破断となった」と言った。

林藏と秀藏は手代の駒三に家の中へと招かれたが、陽のある内に、忠敬先生の墓に参る、と断った。

林藏は景保どのが国禁に触れ逮捕されたこと、天文方の下河辺、門谷、吉川など秀藏の知る名前を挙げて、これら面々も今頃は、小伝馬町で罪禍の咎めを受けておろう。三日前の江戸での事件のあらましを、寺への道すがら秀藏に話した。伊能家にも調査が及ぶかもしれない。いたずらに地図を持ち出したり隠したりせず、何事も知らぬ存ぜぬで通すように、と注意をうながした。

牧野山観福寺、真言宗豊山派の名刹である。伊能三郎右衛門家の菩提寺で、忠敬一族の墓地もそこに在った。寺の一段高い所に一区画の螢域を成していた。左右に對いあう形で墓石が並んでいる。

秀藏は寺の賄所で線香を買い求め、弘法大師の修行旅姿の立像に眼を遣りながら、大師堂正面の石段を登り伊能家の墓地に向かった。

この寺は樹林が深く、境内には枝垂れ桜や梅の木が植えられ庭園の趣きがある。

林藏は本殿の佇まいを高所から眺めながら、師の終息の場所にふさわしい品格と情趣を持つ寺だと思った。

二人は忠敬の墓前に進み深く頭を垂れた。林藏はひざまづいて手を合わせながら何やら話しかける素ぶりで唇が震えているのが見てとれた。

作左衛門景保の罪状と逮捕のことも報告しているのであろうか。

秀藏はぬかづく林藏を背にして、ひときわ小さな墓石に手を置き、そこにも線香を供えた。七歳で夭折した弟の順治の墓であった。

林藏が急に声をかけた。

「秀さん、お主の母上の墓はここにあるのか。差しかえなければお参りしたい」

林藏が秀藏の母のことを覚えてくれていたのだ。秀藏は改めて林藏の情を感じとった。深川黒江町の御用所で製図の作業中に、秀藏は自分の出自のことを、つつみかくさず林藏に話したことがあった。

秀藏は忠敬の実の子でありながら母親が不明であるとして庶子の扱いを受けていた。

先妻の達が亡くなつてから、忠敬の身の回りの世話をしていた番頭筋の女が忠敬の継室となった。柏木幸七の娘の奈みである。奈みは忠敬との間に三人の子を生み、そしてはかなくも二十六歳の若さで病死してしまう。伊能家には未入籍だった。この奈みの子が秀藏である。

忠敬は奈みの死から間もなく忌明けてすぐに仙

台藩江戸詰の典医、桑原隆朝の娘の信と祝言をあげた。奈みの死で継妻の地位は信に移る。奈みのことは話題にしないことが暗黙の了解となり、親族からも意図的に葬られてしまった。

奈みの父親であり伊能家の番頭でもあった柏木幸七は、伊能家一族繁栄のため涙をのんで伊能家の意向に従った。奈みの葬儀は柏木家できり行い亡骸も柏木家の墓地に埋葬した。

柏木家の墓地は、伊能家の墓地の上手、落葉の朽ちる小径を二十歩ほど登ったところ。奈みの墓石は細長い三尺ほどのもので北西の片隅に在った。戒名は”心蓮妙諦信女”秀蔵は六月八日の命日には例年詣でていた。

林蔵はここでもひざまづいて手を合わせた。

「秀さん、お主が何歳の時に母上はお亡くなりになったか」

それは秀蔵四歳の時、弟の順治が二歳、妹の琴はまだ一歳にもならぬ赤子であった。

この幼い三人の子に継母の信は自分の子のように優しく接した。信には江戸育ちの娘らしく立居振舞に品があった。忠敬も信を大切にし、子どもたちの養育と躾を任せていた。この信も身体が弱く、病気がちで父親の菓石も効なく、寛政七年二月に病死する。

林蔵と秀蔵は再び伊能家の墓所に戻り、信の墓にも詣でた。

晩秋の陽足は短く、観福寺の参道の杉並木の影が重なりあつて辺りを暗くしていた。

林蔵は佐原泊り。伊能家には寄らず二人で町中を歩いてから、秀蔵の手配した旅籠に入った。小野川畔の小さな旅荘であった。

「佐原には数理を学ぶ伝統がある。また国文学、儒学の高名な学者も輩出している。それにこの町の賑いだ。活気が溢れている。江戸の周辺でこれだけの殷賑をきわめている町は奇である。江戸の物は何でも手に入る。噂も情報もだ」

林蔵から隠密らしい言葉がでた。諸国を巡っているの見方だから的を射ている。林蔵は佐原の町

にたいそう惚れこんだようだった。語り口も熱をおびている。

佐原は商人の町、地産の酒、醤油、ごま油、米穀のほかにも、京呉服、ひな人形、舶来物の緞子、敷物、ギヤマン食器などを商いしている店もあった。ひと昔の話だが、かの赤穂浪士の吉良邸討入りは翌々日には瓦版が届いた。

江戸から二十里、飛脚は一日で届く。利根川の水運が利便となつて人も物も運んできた。

秀蔵はうなづきながら耳を傾けていたが、口をはさんだ。

「間宮どの、蝦夷地の踏査はもう終えられたのですか。幕府の統治からまた松前藩の直轄に戻ったと聞き及んでおりますが」

「仰せのとおりでございます。蝦夷地でのてまえの役目は終わり申した」と話をつづけた。

「クナシリで捕えたロシアの軍人ゴローニンを釈放しロシアに戻したことがロシア側を軟化させた。そのうえ、ロシアの大都、モスクワがフランス軍に攻めこまれて、多大な災禍を蒙ったようで、ロシア本国のおひざ元がそんな状態では、当分わが国にも手がだせまい」

林蔵の知識は、書物奉行の高橋景保から密かに見せてもらったオランダ風説書からの情報である。「ロシアの敵はフランスにあり」

二人の間に笑いがこぼれた。兩人とも酒はいける口、鰻を肴に話は深更まで及んだ。

宿の二階の部屋から小野川が眺められた。先程まできこえていた篠笛は酒客をのせた賄舟に乗りこんだ囃方の笛の音であった。

日本の将来、今後の動向について林蔵は見識を示しこう言った。

「わが国の鎖国は長くは続けられないだろう。開港を拒否しつづければ諸外国と戦さになる。対抗するには武器の質、量とも諸外国には格段に劣っている。負けること必定、ならば先ずいくつかの港を開き、長崎のように商船だけを湾内に入れ、舶来物資を買い込むと同時にこちらにも日本の特産物を売りこむ。絹、着物、刀剣、食器など何でもよい、卵や海塩なども欲しがる筈である。その売った金で、最新の武器を買って国の戦力を高めればよいのだ」

林蔵は水戸藩の江戸屋敷で、郷里の先輩の儒学者から聞いた説を借用して述べた。

秀蔵はなるほど聞いていた。林蔵の常陸なまりが言葉の尻にでているのを久しぶりに聞いて、地図御用所での林蔵の多弁を懐かしく想い出した。

「間宮どの、これからの日程はいかがで」

「そうだな、せっかくに佐原まで参つておるので明日は香取神宮に参拝してから、津宮の久保木清淵先生をお訪ねしようと思つておる」

「さようで、それならてまえが案内を」

秀蔵が申しでると「かたじけないが先刻、伊能家で道筋を聞いてまいった。お主は学問塾の休講を重ねてはならぬ、子どもたちにも申し訳がたたぬぞ」

林蔵はそう応じたが、秀蔵はまた尋ねた。

「清淵先生をお訪ねのあとはいかがなさる」

林蔵は急に小声になって「以後のことは内緒、内緒、隠密の身では明らかにできぬぞ」

笑いながらいつそう声をひそめて秀蔵の耳にささやいた。

「水戸家に参ろうと思つている」



松平定信公木像(洪沢栄一記念館蔵)
洪沢栄一は天明の大飢饉を救った
松平定信公を信奉していた。

秀蔵はこれを本当の行動だと思った。地図御用所で常陸や水戸の話になると斉昭公のことを話題にし、心酔している口ぶりを見せた。

林蔵は真顔で

「秀さん、江戸に戻らんか。お父上を見習へ忠敬先生は五十路に入ってから江戸に出られ、あれほどの事績を残された」

秀蔵四十三歳、忠敬とは血のつながりはあっても、生きる術において及ぶものはないと自覚していた。

「いや、それはできん。ご免蒙る」

秀蔵はその先は言わなかった。

林蔵と秀蔵、二人は自分の人生をどう締めくくったのか。

伊能忠敬の偉業の陰で、確かな記録を残すことができたのか。

(了)

松平定信と文人 松宮 輝明

日本全図を作った伊能忠敬の師は幕府天文方の高橋至時です。亜欧堂田善(永田善吉)の師は松平定信公のお抱え絵師谷文晁と洋風画家で銅版画家、蘭学者の司馬江漢です。この4人の中心人物が首席老中松平定信でした。(永田家由緒書)

司馬江漢は伊能忠敬が一八〇五年(文化二年)西国、四国、九州、壱岐、対馬測量の幕命を受け品川の大木戸より測量を開始する時に忠敬の『沿海日記』に「江漢が送別のため見送りに来た」との記録があります。忠敬と江漢は親しい間柄であったと思われます。

松平定信は八代將軍徳川吉宗の孫として一七五八年(宝暦八年)田安家の七男として生まれました。田安家は八代將軍徳川吉宗の子や孫から始まる御三卿(田安、一橋、清水家)です。

御三卿は御三家に準ずる格式です。一七七六年(安永五年)田安家より白河松平家の養子となり、十七歳の若い白河藩主(十一万石)として迎えられました。一七八七年(天明七年)三〇歳の定信は、江戸城に登り首席老中として「寛政の改革」を断行しました。その政策の中で日本が外敵の脅威にさらされている事を痛感し、正確な日本地図が必要であると考えました。

平成十八年九月白河市で福島民友新聞社、徳川記念財団、漢字文化振興会、立教志塾会の主催で『漢字文化・江戸を考える。白河市文化講

演会』が開かれました。徳川宗家から十八代当主徳川恒孝氏が『江戸二百六十年の太平を支えた仕組みと心』と題して講演され、対談で『徳川と白河楽翁』と題して、白河藩主の裔孫で桑名藩主松平家十七代当主松平定純氏が対談されました。

定信は一八二三年(文政六年)に桑名に移封となりました。白河など三藩主が同時に転封された「三方領地替」について外の二藩の藩主の子孫の方も加え、国替の事情など歴史的な秘話が披露されました。その中で定信公の子孫の松平定純氏は「白河領より桑名藩に国替えしたのは、白河には海が無いが桑名には海があります。これからは外国の侵略に供え海防が必要となります。三重桑名の海を使い軍事訓練を徹底し国を守らなければならない。そのために白河より桑名に移る必要がある」と考え国替えが実行されたと話されました。



白河藩主・幕府首席老中松平定信公肖像
(福島県立博物館蔵)

ドラえもんが伊能測量を説明しました！

戸村 茂昭

放送三十年を超えるテレビ・アニメでおなじみの『ドラえもん』が、「のび太」と彼の同級生の「しずかちゃん」「スネお」「たけし」が公園で困っているのを見て「どうしたの？」と話しかけるところから始まり、次の二コマ目（図1）で困っている理由が紹介される。これに対して、二十二世紀の未来から連れて来られた物知りのドラえもんが「今は飛行機や人工衛星などの空からのデータをもとにして地図は作っているが、空からのデータが無くとも足があれば作れるよ。」と教え、それに続くコマ（図2、図3）で伊能忠敬の測量現場に連れてゆき、伊能測量による地図の作り方を説明する。このような江戸時代の科学をまんがと記事で解説する小学生向けムックを進めている小学館から、伊能測量の部分に対して正誤チェックや内容についての助言など、監修という形で知恵をお借りできないかという依頼が五月下旬に舞い込んだ。



図1



図2

これは大役だ。安易には受けられないぞ、と判断し、渡辺一郎名誉代表に相談したところ、



図3

バックアップするからやってみろ、との暖かいエールを戴いた。そこで意を決し、「了解いたしました。私のバックには伊能忠敬研究会の大御所も控えておりますので、私の力及ばずの点は、協力してもらいます。よろしく取り計らいねがいます。」と返信した。すると早速、ラフ原稿と共に具体的に監修してほしい項目として「①史実として誤りがないか。②旅の苦難を描くシーンが予定されているので、どんなことあったか、具体的に提案してほしい。」とのことであった。

さっそくラフ原稿に一通り目を通したところ、

忠敬の装い（図4）に違和感があった。そこで、これについては「膝から下は脚絆が正解」と申告。また、歩測で測った距離を例えば「50間」と表示してあったので、小学生の読者にもわかるように



図4

ルビを振り、注釈を付けるべきでは、とコメント。更に、原案では、距離の測り方として歩測以外の方法として紹介していたのは間縄だけであつたので、実行的には、他に「間棹」や「鉄鎖」或は素材として「クジラのヒレ」等も使った旨を付け加えた。その他、次に列挙したような読者（子供たち）に是非とも知って欲しいと思ったことをお伝えしたのであった。

- ・ 坂道の測量では、三角関数を使って平面距離に変換した。
- ・ 山の高さは富士山だけ測った。
- ・ 歩いて測量しただけでなく、絶壁の海岸など歩けない所は海上から船で測量した。
- ・ 引き潮の時を狙って絶壁の海岸を測ったこともある（房総の小湊）
- ・ 交会法で下総の銚子（犬吠）から富士山の方位を測った。



襟裳岬の近くでは、地獄に落ちたような大変な思いをした。
瀬戸内の島々、五島列島、佐渡島、屋久島、伊豆七島などの島々も漏れなく測量した。
東日本の測量は沿岸が主であるが、中国、九州地方は網の目のように内陸部も測量した。
神社仏閣などはわざわざ山門まで測量すると共に、由緒なども興味深く調べて、測量日記に記録した。
測量中の全日数（3662日）、一日も欠かさずに毎日、日記を付けた。
おこりという持病（ぜんそく）を持っていたが、途中、挫折しなかった。
師匠を敬い、お墓は師匠（高橋至時）の隣、（浅草源空寺）に葬ってほしいと遺言し、実現した。



その結果、ラフの段階では八頁であったものがその他、細部の誤字修正なども含め合計十回近く、メール交換という手段で監修させてもらった。
最終的には十四頁という大幅なボリューム増で脱稿し、七月十七日、本体722円（税抜き）で発売されたのであった。

日本地図を歩いて作った男 伊能忠敬・おわり

三年前に伊能図を見て「珠洲から白山が見える」ことを知った地元の方が、狙っていた白山をようやく撮影できたという内容です。地元記者から問い合わせがあり、「山島方位記」と伊能中図の白山の方位線を根拠に挙げました。その後、金沢大学の先生にカシミール3Dで作ってもらった白山の稜線と撮影写真の稜線がほぼ一致しました。私も珠洲市へ帰った際には気をつけて見るようにします。（河崎倫代記）

二〇一五年十二月十一日付「北國新聞」より

夕焼けに稜線くっきり

立地地図と一致
白山の稜線が鮮明に写った
白山の稜線が鮮明に写った
白山の稜線が鮮明に写った

珠洲から白山を撮影

伊能忠敬の弟子も観測

白山の稜線が鮮明に写った
白山の稜線が鮮明に写った
白山の稜線が鮮明に写った

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて ―各地の記念碑・標柱等紹介(七)―

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいていたきました。厚くお礼を申し上げます。二〇一六年一月現在、福岡県各自治体に問い合わせ中です。

前号からほとんど前進できず、紹介できる記念碑等は一点のみですが、『測量日記』に記された「一行・一文」の謎解きもまた一興かと、今号でもページをいただきました。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することとしました。旅行や仕事で現地にお出掛けの節は、是非とも訪ねてみてください。

一、福岡県大牟田市

大牟田市は福岡県の最南端に位置し、南と東を熊本県に接している。九州のほぼ中心に位置し、東に三池山、西に有明海を望み、気候が温暖で自然災害も少ないまちである。

大牟田市は、日本の近代化を支えてきた石炭産業の隆盛とともに発展してきた鉱工業都市であり、平成二七年七月には、市の三池炭鉱関連遺産(宮原坑、三池炭鉱専用鉄道敷跡、三池港)を含む「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録された。

現在は、石炭産業から発展した高い技術力と交

通アクセスのよさを生かし、「やさしさとエネルギーあふれるまち・おおむた」づくりに取り組んでいる。

(大牟田市ホームページ・ウィキペディア等)

(1)

①名称 石碑「伊能忠敬測量之地」

②銘板 (石碑自体には文字は刻まれていない)
「伊能忠敬測量之地碑」

昭和四十五年十二月 大牟田観光協会

③設置場所 大牟田市栄町一丁目一 築町公園内

④設置年月日 昭和四十五年(一九七〇)十二月

⑤設置者 大牟田観光協会

⑥設置の背景・経緯 文化九年の大牟田測量を記念し建立

⑦見学の可否 随時可能



(2)

①名称 案内板「伊能忠敬実測について」

②説明文 (前略)大牟田の地は二度目の文化九

年一〇月彼が六七歳のときで、現在地を「大牟田川土橋六間」と測った記録が残っている。(後略)

③設置場所 大牟田市栄町一丁目一 築町公園内

④設置年月日 平成二年三月

⑤設置者 大牟田観光協会

⑥設置の背景・経緯 「大牟田川土橋六間」と測った大牟田測量ゆかりの地に石碑を建立し、後世にその偉業を伝えるため

⑦見学の可否 随時可能



(大牟田市立三池カルタ・歴史資料館提供)

※築町公園には石碑と案内板が設置されている。案内板は石碑設置からおよそ二〇年後に、その左手前に設置された。石碑は『伊能忠敬研究』第五号(二〇〇九年)に当会会員井上辰男氏(筑前町在住)が紹介している。

『測量日記』、『一行・一文』の風景

一、福岡県久留米市大善寺町の「傘橋」
からかさばし

『測量日記』文化九年（一八二二）十月十日の項に、次のような記述がある。

高良玉垂社へ打上

宮本川 神幸橋（渡巾一十六間

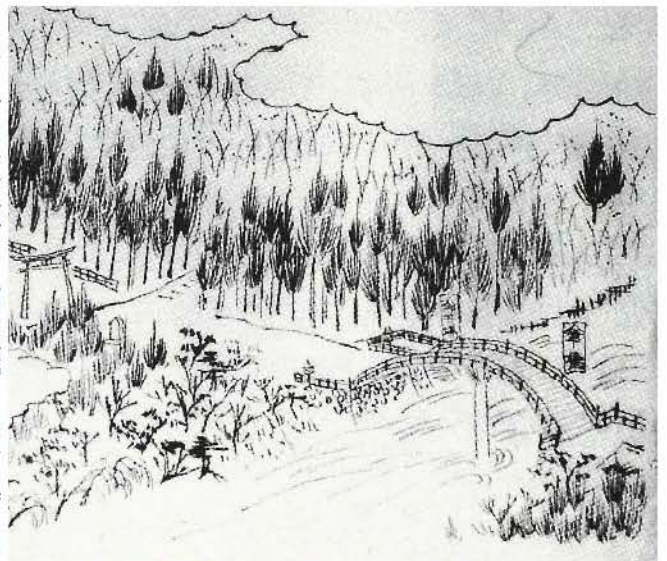
橋杭 石柱にて一本）また傘橋とも云

橋杭（橋脚）が一本とはどのような橋だったのか。久留米市生涯学習推進課からいただいた画像の中に、大善寺玉垂宮社務所に建てられた「傘橋記念塔」があり、その竿石が日記に記された「石柱」であるという。直径八〇cm程の円柱の石材を縦に三本つないだ高さ約五mの石柱である。上部橋受けでは七本の支持材が斜め上に上がり、川を横断する太鼓型の橋を受ける構造だった。この広川（旧名は霰川）が洪水のときは太鼓橋部分を外して流失に備えたという。久留米藩主有馬氏によって天明元年（一七八二）に架けられ、「拔河曳橋」と呼ばれた天下の名橋だったが、嘉永四年（一八五二）の大洪水で流失したという。



（写真はサイト「くるめんもん」から許可を得て転載）
『測量日記』の一文だけでは勿論のこと、写真を見ても解説を読んでも、橋の全容がまったく想像できなかったが、篠山神社所蔵「筑後名所図絵」に出会って、ようやく納得できた。

まさに、天下の奇橋である。



伊能測量隊も渡った傘橋（中央の橋桁が「傘橋記念塔」の石柱） 篠山神社所蔵「筑後名所図絵」より

二、静岡県松崎町の「惣土蔵」旧依田善七邸
『測量日記』享和元年（一八〇二）五月二日の項に、次のような記述がある。

松崎村 江川太郎左衛門御代官所

家一九七軒 名主善六と云

居宅座敷とも惣土蔵なり

伊豆半島・松崎町の「伊豆の長八美術館」（漆喰鍍絵の名人、入江長八の作品を展示）を訪ねることになった。例によって、『測量日記』と大図の該当部分をプリントし、ガイドブックとネットでは代々名主を勤めた家柄で、幕末から明治期に地域の発展に寄与した篤志家だった。約四百年前に建てられた依田家住宅は静岡県文化財に指定されている。木造平屋建て、なまこ壁と塗籠の防火建築が特徴である。現在、NPO法人伊豆学研究会が買取り、修復と保存・活用をめざして広く一般にも協力を求めている。

西伊豆地方では海からの強風が大火を引き起こすことが多く、なまこ壁・塀と漆喰造りの防火建築が多く建てられた。旧市街地には今もなまこ壁の商家や橋が残っている。おそらく忠敬一行は昼休憩に依田家を利用し、その「惣漆喰造り」に目を見張ったことだろう。

※松崎町は、ドラマ版「世界の中心で、愛をさけぶ」のロケ地でもあり、旧依田家のなまこ塀通りを歩く綾瀬はるかを観た人もいられるかもしれない。



あとがき

今回は三市町に残る忠敬関係の記念碑や事物等を紹介しました。「大牟田市立三池カルタ・歴史資料館」の梶原様、久留米市民文化財部文化財保護課の水原様、穴井様、「くるめんもん」

Kurume-mori.com 様には大変お世話になりました。

全国の会員の皆さまにお願い！

「伊能忠敬没後二百年記念誌」の発行に向けて、全国四七都道府県内の伊能忠敬関係エピソードを探しています。記念碑・案内板、『伊能忠敬測量日記』に記載された事物・事象、伊能図に記された地名など、身近なところに意外なものがあるかも知れません。これぞ！と思うもの、これは？と思うもの、何でもお寄せ下さい。

Kakawa616u138@yahoo.co.jp

（没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代）

三重県菰野町図書館で
伊能忠敬と菰野という展示会が開催された！

戸村 茂昭

はじめに

筆者は、イノペディアというウェブサイトの管理人をしている関係上、サイトを覗き込んだ方から伊能忠敬がらみの問い合わせをしばしば受けることがある。その問い合わせに対応する過程において、教科書や小説などに出てきていたが自分には土地勘がなかった場所を忠敬先生が訪れていることを教えられ「あくそこだったのか」と感じ入ることがある。本稿はそんなことを体験した顛末を報告するものである。

一・古事記に登場する日本武尊終焉の地

平成二十七年五月二十日、突然、我が家の固定電話に電話がかかってきた。発信者は三重県菰野（こもの）町図書館の方であった。問い合わせの趣旨は「伊能忠敬測量隊が菰野という村を測量したことに関する史料はありますか？」というものであったという。つまり、電話を受けたのが家人であったため、その問い合わせの背景などの情報は一切分からない状態で筆者が問い合わせを引き継いだのであった。残念ながら、菰野という土地の名前は筆者にとっては初耳、そこでイノペディアに掲載してある「伊能大図地名索引（星栞由尚）」で調べてみた。しかし、目指す菰野村という地名は掲載されていなかった。但し菰野（こもの）村という地名はあったが三重県ではなかった。止むを得ずヤフー地図で調べたところ四日市の西北西十四kmに位置したところの町名であるこ

とは確認できた。そこで伊能大図第一二九号（桑名）を風潰しに調べてみたがやっぱり見つからない。そこで、今度は「伊能忠敬の全国測量」という図書に掲載の測量回次別測量ルート図で調べたところ第八次（九州第二次）測量の帰途、ヤフー地図で確認した四日市の西北西の地点に菰野と思われる地点を測量しているようなルートになっていることを確認することが出来た（図1）。



図1. 第八次測量ルート
(四日市近辺)

そこで意を強くして今度は伊能忠敬測量日記（こま）を開いて第八次（九州第二次）測量の帰途の部分に該当する第二十六巻の目次を調べたところ、「文化十一年三月十九日、菰野村・明福寺」と記載されていることを発見してようやくほっとしたものであった。さっそく当日の日記を解読してみると、次のような興味深い内容が記載されていた。

「右二町斗引込原中に森二つあり。一は宝冠塚という。一は宝裳塚という。日本武尊の冠裳を所納という。塚上に碑あり。」

「武備社、能褒野陵という。日本武尊の御陵也と。」
つまり、この地こそ古事記に登場する日本武尊終焉の地にして、白鳥になって大和に向かって飛び立ったとされている地で、このことは古事記愛

読者である筆者にとつては晴天の霹靂のような内容だったのである。興味がより一層湧き、伊能大図を開いて見てみた。（図2）



図2 伊能大図（武備社、菰野近辺）
『伊能図大全』河出書房新社より

すると、菰野村とおぼしき場所は「東菰野村」という表現になっていたのであった。更に天眼鏡で拡大しながら目を凝らして測線を辿ってみると、日本武尊の御陵也と測量日記にしたためられている武備神社が明確に表現されていたのであった。測線を更に辿っていくと、測量日記では「一ノ宮追分○印迄九町五十四間、式内椿太神社（つばきおおかみやしる）一宮という前迄横一里二十四間、祭神猿田彦命・・・」と書かれているのを読み下していた時点では分からなかったが、伊能図を見て驚いた。すなわち、街道から当該神社への参道の起点からその神社まで一里二十四間の測線が伸びていたのである。伊勢の国の一宮であり、日本最古の神社ということであるから信仰心の篤い忠敬先生どうしても参拝したかったのかもしれない。やはり、測量日記だけではわからないが、伊能

図と照らしてみると、いろいろと見えなかった目から鱗のような伊能測量の事柄が見えてくるものである。そこで、測線を更に辿っていくと、菰野村から四日市への測線だけでなく、そこから北上する測線が描かれていた。

この菰野を測量した時点は二年をも超える月日をかけて九州第二次測量をした復路の途次である。通常であれば帰心矢の如し、の筈であるから、東海道をまっしぐらに江戸に向かうのが常識的であるように思われる。にもかかわらず、忠敬先生一行は何故に、菰野村から北上する図一の水色のルートで示される複雑な道草を食っているのでしょうか？このような計画は幕府からの指示なのであるのか？或は、プロジェクト・リーダー忠敬先生の道楽（例えば、日本武尊の御陵というような名所旧跡の観光）からの道草なのであるのか？

第六次測量の帰途における奈良の測量は幕府からの支持のように測量日記では書かれているが、第七次測量から始まった九州、中国、近畿及び中京に対する網の目のような測量ルートの具体的な設定、そしてこれは測量日記の解説から感じられるのであるが、旅先における臨機応変的に行っているように見える本隊と支隊を手分けしたルート設定というプロジェクト・リーダー忠敬の名采配ぶりには、誠にもって改めて敬服の至りが極まったのであった。

二、展示会の開催

以上のような調査結果を踏まえて、菰野町図書館の担当の方に筆者は次のようにメールを送信したものである。

「先ほど、件名に関して問い合わせいただきました

たイノペディア（伊能忠敬と伊能図の大事典）をつくる会の戸村様でございます。お問い合わせいただきましたありがとうございます。お問い合わせを戴きました直後から、伊能忠敬の菰野における足跡に付いての調査に入りましたが、いやはや難航いたしました。「菰野」という地名が伊能図上に見つけられなかったからでございます。しかしながら、結論として、足跡の発見には成功致しました。それは、「第八次測量（九州二次）からの復路の途次、文化十一年三月十九日」に菰野村明福寺に止宿しております。そして近辺における測量の状況は測量日記二十六巻に縷々七百三十余りの文字で表現されております。

その伊能忠敬測量日記（原文）DVD^①は当ウェブサイトでお求めいただけますので、ご検討ください」と。

その後、交信が途絶えていたところ、去る九月四日になって、次のようなメールを受信したのであった。

「戸村 様

先日は大変お世話になりました。いろいろと教えていただきありがとうございました。

おかげさまで当館の展示「伊能忠敬と菰野」も無事終了いたしました。

つきましては、『伊能忠敬測量日記DVD』の購入を考えております。また、『伊能忠敬文献目録』の在庫はございますか？こちらはまた郵送にてお申し込みします。よろしく願います。

このメールに接した瞬間、嬉しさがこみ上げたものである。さっそく、ネットを介して調べたところ、つぎのような記事を検索することが出来た。

企画展示…幕府測量方 伊能忠敬と菰野

（2階 郷土資料コーナー）・菰野町図書館

実測による日本地図作りの始祖である伊能忠敬氏は、寛政12年（1800年）から文化13年（1816年）まで、足かけ17年をかけて日本全国を測量し「大日本沿海輿地全図」を完成させ、日本史上はじめて国土の正確な姿を明らかにした人物でもあります。

その間、第一次測量から第十次測量まで全国各地で測量を実施しましたが、そのうちの第八次測量（九州第二次）の帰路において菰野町に立ち寄り、明福寺（大字菰野地内）に宿を取ったとの記録が残っています。今回は、その足跡をたどります。ぜひ、ご来館いただき、郷土資料コーナー（2階）からタイムスリップしましょう！なお、展示コーナーには、伊能図（東京国立博物館所蔵伊能中図原寸複製）及び伊能図大全全7巻も展示いたしておりますので、お楽しみください。



タイムトリップ」

伊能忠敬 銚子に現れる

宮内 敏

昨年11月21・22日、「日本ジオパーク関東地区大会銚子大会 2015」が千葉県銚子市で行われた。伊能忠敬の銚子測量は銚子ジオパークの貴重な文化遺産であるとの思いから、銚子ジオパーク推進市民の会の一員として参加した。

ジオパークとは「地質遺産を含む大地の公園」のことである。自然遺産や文化遺産などと結びつけて地球科学の普及や観光を通して地域社会の活性化を目指す活動で、三つに要約される。

一つは大地の遺産を保全する、二つは大地の遺産を教育に役立てる、三つは大地の遺産を楽しむジオツーリズムの推進で地域の経済を持続的に活性化する。

2004年にユネスコの支援で世界ジオパークネットワーク(GN)が発足し、ジオパークを審査し認証する仕組みができた。日本では、2008年に国内の認定機関として日本ジオパーク委員会(JGC)が発足し、JGCが2008年に認定した地域により2009年に日本ジオパークネットワーク(JGN)が設立された。

2009年洞爺湖有珠山(北海道)、糸魚川(新潟県)、島原半島(長崎県)が、その後山陰海岸、室戸、隠岐、阿蘇がGNに加盟を認められ、「世界ジオパーク」となった。銚子はJGCにより2012年9月24日に認定され日本ジオパークとなった。今大会は4年に一度の再審査を控えた銚子で行われた。大会テーマは「ジオパークで身近な人と

つながり世界を広げよう」です。

21日は開会式・基調講演・分科会・バーチャルジオツアー・物産市・ブース展示が、翌22日は5コースに分かれてジオツアーが行われた。

伊能忠敬関連として、21日はブース展示とバーチャルジオツアーを、22日は伊能忠敬と巡る銚子ジオツアーを企画し参加した。

以下、銚子の紹介を兼ねた報告です。

ブース展示

「伊能忠敬と銚子測量」

忠敬の測量方法、銚子での富士山の方位測量の重要性、銚子測量の検証など紹介した。

展示内容は伊能中図関東版、伊能小図全国版、導線法、交合法、天体観測、国土地理院地図と伊能図測線の重ね合わせ図、アナログとデジタルの説明、アナログデータを正確に読み取る工夫、トランスバサール法(対角線法と言われ伊能測量で使われた)とバーニア法(ノギス等)、小中学校



「伊能忠敬と銚子測量」のブース

生を対象とした「理数の遊びの小道具」などの展示。その他、NHK大河ドラマ化を目指す「伊能忠敬のぼり旗」を掲げ、しっかりとPRした。展示ブース

に常駐できないのでコンピュータによる「伊能忠敬と銚子測量の紹介」とランドサット衛星画像と伊能中図の重ね合わせを銚子基準に行うデモをした。見た人からは「すごいですね」と言ってもらったが、1クール15分のエンドレスと長かったため、待ちきれない人もいた。

バーチャルジオツアー

「伊能忠敬と巡る銚子ジオパーク」



バーチャルジオツアータイトル画面

タイムトリップした伊能忠敬と一緒に銚子のジオサイトを巡るツアーです。忠敬役から銚子測量当時のエピソードを聞きながら、ジオサイトをご案内するという企画です。

かつらをかぶった忠敬役と銚子ジオパーク案内役のゆるキャラ「ジオっちよ」がスクリーンを背に、掛け合う形式で行います。

出演はジオっちよこと銚子ジオパーク推進市民の会の白土さん。伊能忠敬役兼ちよーぴーは同じく市民の会の宗さんです。二人の熱演が好評でした。



バーチャルジオツアー伊能忠敬と巡る銚子ジオパークより抜粋



屏風ヶ浦
東洋のドーバーと呼ばれる海食崖で、高さ：50M、長さ：10kmほどある。
(大会前日、名勝と天然記念物に答申された)



犬吠埼
浅海堆積物が天然記念物、アンモナイト等の化石や運が良ければ琥珀等も見つけることができる。



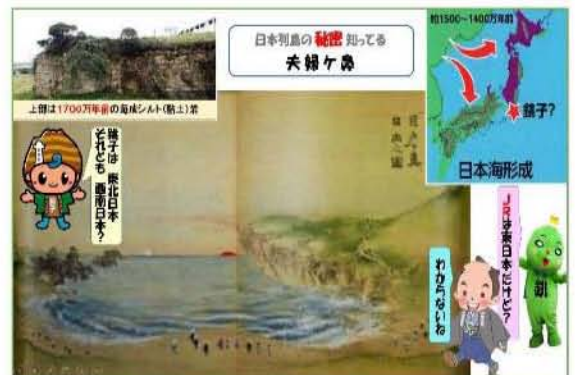
銚子飯沼観音 (坂東 33 カ所観音霊場第 27 番札所)
五重の塔脇に、オランダ人技師リンドによる銚子飯沼水準原標石がある。(日本初の日本水位尺で、当時の深淺高低の基準となった)
当時、飯沼観音周辺は関東有数の繁華街で、測量隊一行は観音近くの田中吉之丞宅に 9 日間宿泊した。



銚子ジオパークの主なジオサイトは、伊能図の測線に沿って存在している。



長崎海岸の宝満島上部は日本海が開き始める頃とされる 2100 万年前の溶岩で覆われている



夫婦ヶ鼻の地層は日本海が開き終わった頃とされる 1700 万年前頃の海で堆積した泥岩。



ランドサット画像が徐々に伊能中図に近づき重なる。銚子を基準に重ると北海道と九州方面でズレを確認できるが、他はきれいに重なる。

リアルジオツアー

「伊能忠敬と巡る銚子ジオパーク」

我々の班はEコース、お客様と私がジャンボタクシーに、伴走車にスタッフ4名が乗り込み、総勢13名で銚子駅を7時50分にスタートする。

国道126号から銚子ドーバーラインへ向かい、銚子半島を反時計回りに案内する。

車内で銚子の現状（人口減、財政難）について紹介、かつて銚子・佐原は利根水運の物流中継地として共に栄えたことも紹介する。

愛宕山では短時間ながら北総一の展望を楽しむ。測量のため忠敬が銚子入りした屏風ヶ浦の台地から銚子半島一周の測量コースを説明する。

伊能忠敬銚子測量記念碑前で銚子測量の重要性について、遊歩道で屏風ヶ浦の成り立ちなど説明する。



犬岩



伊能測量隊の見た富士山
犬若岬：富士山のシルエット

犬岩では義経伝説、地層、海岸植物を説明する。犬若岬では富士山の方位測量の地を案内する。外川からは伊能忠敬測量線に沿っての案内となる。宝満では日本海が開き始めるころの2100万年

前の溶岩について説明する。
犬吠埼では国の天然記念物である白亜紀の浅海



ストーム性の堆積構造
犬吠埼灯台下

堆積物や地層を案内する。
また、海岸植物や灯台なども案内する。
白亜の灯台をバックに記念撮影をする。

君ヶ浜・海鹿島では海岸植物などを案内する。
トンビ岩では海鹿島礫岩を案内する。

美香保丸遭難碑前では、榎本艦隊の美香保丸が函館を目指して航行中、黒生沖で座礁したこと、榎本武揚の父は箱田良助といい伊能測量隊員であったこと、政府軍の神龍丸も榎本軍討伐後の帰り、同じ場所でも遭難したこと、乗組員だった播磨龍野藩士専八が静養先で淡路まんと知り合い生まれたのが国木田独歩であることを紹介する。



とんび岩の図（銚子円福寺所蔵）

伊能測量当時も観光名所であった。
今は埋め立てられこの絵図の面影はとんび岩を残すのみである。

昼食はとんび岩近くの活魚料理店「一山いけす」、
「おいしい」の一言を頂き一安心する。

夫婦ヶ鼻は日本海が開き終わった頃の地層です。銚子が東北日本に属するか、西南日本に属するかを考えて頂く。（今後の研究を待ちましょう）
ウオッセで、お土産タイムを兼ねて小休憩する。
岩石公園には利根川河口の掘削で移設された古銅輝石安山岩がある。能登にもこれに近い安山岩が存在していることから、日本列島成り立ちの解明に役立つことを紹介する。（金沢支部の皆さん！2000万年前ごろ、能登と銚子は近所であったかも知れません。人類の誕生は後のことです）
飯沼観音ではリンドの水準原標石などを案内する。忠敬の富士山の高さ測量のことも紹介する。

飯沼水準原標石

日本が近代という夜明けを迎えた一八七二年（明治五年）十二月、明治政府の招きにより来日し、日本各地の河川や港湾事業に従事したオランダ人技師リンド（Isaac Anne Lindo）により、この地に水準原標石が設置された。
これを基点として「日本水位尺」が定められ、各地の高低深淺が測られることになった。
この「飯沼水準原標石」は、日本における河川測量の原点であるとともに、日本水準原点設置の原点ともいえる。
文化財としても、歴史的、学術的にも価値の高いものである。

平成十一年六月吉日

飯沼山 圓福寺
銚子市 観光協会

五重の塔脇の案内板から

利根川沿いを車中よりご案内し、15分銚子駅に帰着する。お礼の言葉を頂きつつ解散した。
主要ジオサイトの案内は、銚子ジオパーク市民の会の小玉さんはじめスタッフの方々の協力を頂き成功させることが出来た。

忠敬先生没後

2000年記念事業について

一、2018年の忠敬先生没後200年記念事業について、十二月二三日に理事会でおこなった決議をふまえて、一月十八日に香取市長さんと意見交換を致しました。出席役員は渡辺名誉代表、鈴木代表、伊能楯雄理事、木内佐原支部長、伊能敏雄佐原支部事務局長です。

二、考えられる行事として、進行中の企画を含め、次のようなものを挙げました。

- ① 富岡八幡宮
伊能忠敬先生没後200年記念祭
- ② 源空寺墓前祭
- ③ 観福寺墓前祭
- ④ 伊能測量関係者記念シンポジウム
△ 伊能洋、間宮正孝、シーボルト子孫（在ドイツ）など出席
（香取市民ホール）
- ⑤ 伊能測量関係者顕彰研究発表大会
（伊能忠敬研究会、伊能忠敬顕彰会）
（東京）
- ⑥ 香取市に新伊能忠敬像
（伊能忠敬顕彰会・香取市）
（元佐原駅前建設）
- ⑦ 大河ドラマ「伊能忠敬」の推進

（大河推進協議会・香取市・他）

（NHKに陳情中）

- ⑧ 各地の講演会・パネルトーク開催の支援、研究会会員による講演会講師・パネルトークのパネラー紹介
- ⑨ 伊能忠敬関係記念出版

・都道府県別伊能忠敬の足跡（普及書）
石川県支部 河崎担当

・大谷亮吉以降の伊能忠敬についての新知見（研究者向け）渡辺、鈴木ほか

・伊能忠敬測量日記解説の決定版
電子本 既刊

三、研究会の新たな企画行事として、伊能測量関係者顕彰研究発表大会を説明しました。

- ① 当時の幕府要職および地元協力者を含む伊能測量関係者子孫に声をかけ史料・伝承の発掘に努める。
- ② 二〇〇年前の御協力に対し記念大会会長名で感謝状、記念品を贈る。
- ③ 発表会をおこなう。

会場：東京都心の便利な施設
開催時期：2018年 秋頃
日程概要：2日間を予定。基調講演、参加者紹介、参加者懇親会、記念式典、感謝状贈呈、資料発表会などをおこなう。一般来聴歓迎。

四、香取市長さんのお話

- ① 事業間の連絡協調の為の協議会を早急に設けたい。研究会も入ってほしい。
- ② 香取市の大会は、駅前の銅像建設に合わせて2020年半ばにシーボルトの末裔ブランデンシュタインさんを招聘して行いたい。

その際珍しい遺品など持参していただけるので、記念館に展示したいと思っている。

準備のため学芸員を派遣する予定である。シーボルトの末裔に佐原を見てほしいと思う。

- ③ 伊能研の関係者大会は全国を対象とする雄大な計画で大変結構である。応援する。ただ、開催場所としては、香取市ではなく東京でやるべきだと思う。どのくらい集まってもらえるかな。
- ④ 源空寺は伊能研主導でよろしく。

五、今後の対応

以上を踏まえて、伊能研としては、イノペディアと連携して、源空寺墓前祭と、伊能測量関係者末裔大会を企画推進することにした。

（文責 渡辺一郎）

測量日記電子本の 書籍化についての需要調査

会員各位

別項(559)で紹介しているように測量日記の電子本が完成しましたが、書籍の方がいいという、会員もいらつしやるかと思っています。

そこで希望がどのくらいあるか、調べてみるようになりました。

会員価格 全28巻

1. 目標価 20,000円
一般価格 25,000円
2. 発行時期 2016年秋以降
3. 目標部数など 60部セット
A4版 1セット8分冊で検討

購入希望のある方は事務局またはイノペディアの戸村または渡辺にお知らせください。

調査の結果、実行できないことになる恐れもございます。いい結果をお待ちください。

（渡辺一郎）

―最後の踏ん張りどころ― 伊能忠敬大河ドラマ化を目指して

昨年暮れ、十二月十二日に佐原に於いて、伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会がフォーラム「伊能忠敬の世界」を開催しました。

フォーラムは、第一部基調講演、第二部縁のパネルトーク、第三部関係行政代表者連携会議の三部構成で行いました。伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会が本年の主要な行事として取り組んだもので、基調講演の白駒妃登美女史を始めとしてゆかりのある方々にお集まりいただけたことは、企画した者としてこの上ない満足感を得ました。また、それと共に大河ドラマ化実現への想いもより深まりました。

今回の企画運営では、多くの役員のご協力を必要とし、各人しつかりと協力を頂けたことがフォーラムの成功へと繋がったと感じております。

その中で、参加者へのアンケートを実施しました。多くの方から寄せられたご意見に伊能忠敬の業績等をもっと知りたい、ドラマが実現したらぜひ観たいなど感激の便りを寄せてきています。また、主催者へのねぎらいの言葉も多く寄せていただきました。2018年は翁の没後二〇〇年を迎えます。期待を寄せていただく多くの支援

者に報いるためにも、ここ一番推進協議会として踏ん張りどころかと思うところでございます。多くの支援者に感謝申し上げます。

最後に、伊能忠敬大河ドラマ化を目指しての宣言文(抜粋)を記します。

伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会は、平成三三年八月二八日に活動の声を正式に挙げました。この年は、日本全体にあつて忘れることのできない東日本大震災が発生した年であります。

大震災の起こるひと月前、二月二二日伊能忠敬研究会創立十五周年式典を香取の地で行い、伊能忠敬に関係の深い行政の長をご招待し、本協議会設立に向けた会合を持ちました。そこで同意を得た私達関係者は、各行政組織を中心に行動に移したのであります。だが、時悪く、大震災の影響から会の組織化も頓挫しました。ただ、このまま手をこまぬいていては、大いなる希望である伊能忠敬の大河ドラマ化も夢砕け散ることとなってしまいます。こうして、大いなる希望に期待を馳せ、香取市の協力の下、民間主導で協議会を立ち上げました。

その後、地元をはじめ全国の支援者によって、署名活動を展開、それらを持参して平成二四年三月二三日NHK放送センターへ第一回目の要望書

提出を果たし、昨年の十二月二日に第二回目の要望書提出を行いました。

平成二四年度には、イメージキャラクターを全国に募集、多数の応募作品から「ちゅうけいSUN」が誕生、その後の各種イベント会場へ大河ドラマ化と伊能忠敬翁の啓発活動を実施、現在に至っております。

一〇〇年前、佐原諏訪公園の銅像は、地元有志の働きで全国から寄付を募り創建し、盛大に没後一〇〇年を祝いました。そして二〇一八年に、翁の没後二〇〇年を迎えるに当たり私たちは、この年の放映を実現するために運動を続けて参りました。その為には、今がNHKに行動する勝負の時であります。二〇一八年に、私たちが願う日本の偉人「伊能忠敬」の生涯をテーマとする大河ドラマの実現を計る為、この運動を更に推進することをここに宣言します。

文責：伊能敏雄（伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会事務局長）



伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会長 木内志郎氏挨拶



二部：縁のパネルトーク、パネラーの皆さん



一部：基調講演の白駒妃登美女史

石川県支部ニュース

加賀藩測量の足跡をたどる

(五の二)

室山 孝

はじめに

伊能忠敬による加賀藩測量の足跡をたどる現地探訪も五回目となった。今回は、前回の続きのルートということ、享和三年(一八〇三)七月、手

分けの平山郡蔵隊(三名)による輪島河井町(輪島市)から能登半島を時計回りに測量、松波村(鳳珠郡能登町)において伊能忠敬本隊(五名)と合流するまでのルートと、忠敬本隊の川嶋村(鳳珠郡穴水町)から内浦海岸を北上して平山隊と合流するまでのルートを踏査することになった。

長距離にわたるため、平成二十七年(二〇一五)六月十三・十四日の一泊



「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 金沢工業大学」にて

二日の日程を組んだ。参加会員は河崎・寺口・室山の三名であるが、七尾市在住の大星氏(二日目)と能登町宇出津在住の徳田さん(二日目)の二名が加わった。二日間ともほぼ天気は良かったが、やや風があつて雲の流れも早く、奥能登の海岸線を走ったもののあまり眺望には恵まれなかった。

一、輪島市名舟町・能登町松波

① 名舟村・銭子九郎兵衛(7/15)

六月十三日(土)朝、かほく市高松町から寺口会員の車に乗り合わせ「のと里山海道」を北上。輪島市の道の駅「輪島ふらっと訪夢」(旧「輪島駅跡」)へ向かう。ここで大星氏が加わり、車二台で出発した。

この日はまず、鳳至郡の十村(大庄屋)であつた笠原藤太がかつて屋敷を構えていた稲舟町(輪島市)へ向かった。

笠原藤太は、測量隊到着前の享和三年七月九日から十四日にかけて配下の村々肝煎や組合頭に対し、村方での準備内容を八度にわたって指示し、幕府御用に支障のないように心配りを尽

くした人物であつた。

稲舟町在住の知人西野豊昭氏に案内をお願いした。集落は高台にあり、かつての笠原家屋敷跡は藪となつていて門前にもたどり着けず、下の農道からの観察となつた。明治二十八年(一八九五)に笠原家は稲舟から転出し、その後本家は絶えたということである。



笠原家墓地：能登半島地震(2007年3月)で墓碑が倒壊し埋もれたままになっている。ひと際立派な墓碑があるが、碑文などは不明。

享和三年七月十五日、平山郡蔵隊は輪島河井町を出発し、惣領村七左衛門宅で昼食をとった。七左衛門は惣領村肝煎であつたと思われるが、屋敷地の具体的情報がなく、ここは通過して名舟町を目指した。

平山隊はこの日、名舟村の銭子九郎兵衛方に宿泊した。『測量日記』に「河井町より此村迄海なし」とあるように、現在の国道二四九号線も海岸線より高台を走っている。途中の白米町では棚田で有名な「千枚田」の中を通り、

名舟町付近でようやく海岸に出た。

輪島市の知人に紹介された濱高悦郎氏宅は集落のほぼ真ん中、名舟バス停の前にあつた。濱高氏は輪島塗の職人(塗師)で、家に入ると正面に輪島塗を施された板戸が置かれていた。前もって電話でお聞きしたところ、濱高家の現在地が、かつての名舟村肝煎九郎兵衛の屋敷地の一画であつたとのことであつた。ここからは、天気が良ければ沖合の七ツ島が見えるという。七ツ島は名舟村の所属であると『測量日記』に書かれている。

かつての名舟は天然の良港であり、その村を仕切つていた肝煎の銭子家は、近代になって初代名舟村村長を勤めたものの、明治三十年頃、輪島の観音町へ転出したという。濱高家と銭子家は親戚関係であつたことから、広大な屋敷地の一面を譲られたらしい。国道に面した濱高家と隣家を写真に収め、辞去した。



右の家並みが銭子家の屋敷跡地。
左が日本海。

② 真浦村・権兵衛（7/16）

七月十六日朝、平山隊は名舟村を発ち、途中大川村甚左衛門方で昼休している。甚左衛門は同村で最も持高が多く、おそらく肝煎であったと思われるが、およそ二〇年前に転出したという集落の西端に屋敷跡があるとのことだった。

『測量日記』には、「能州一ノ川」である町野川を渡った所の時国村の庄屋時国家について、能登へ流された平大納言時忠の子孫で今も京都の平松大納言と交流があることや、かつて時国家に贈られた和歌を書き留めるなど、測量とは関係ない地元情報が詳しく記載されている。忠敬好みの史話を記録したのだろうか。

この辺りの海岸は「窓岩」に代表される豪快な岩礁地帯で「曾々木海岸」として知られるが、東側の岩倉山から続く断崖が鳳至郡と珠洲郡の境界をなし、「能登の親不知」と恐れられていた。『測量日記』にも「此所より大難所、ヒロギと云（手をヒロギで通るを名とす）」と書かれている。そのヒロギ越えを通れるようにと、珠洲郡片岩村（珠洲市）海蔵寺の八世住持麒麟山瑞麟（きざんずいりん）が人々の浄財と支援を受けて、十三年もかけて断崖に細いながらも通れる道を開削したのは寛政四年（一七九二）のことであった。平山

隊はその開削間もない断崖沿いの細路を通り測量をおこなった。



岩肌に開削された細路が麒麟山和尚の「ヒロギ越え」の道だった（トンネルは明治期のもの）

昭和三十八年（一九六三）にトンネルが開通し、能登半島を車で一周できるようになると、奥能登ブームが到来した。トンネル入口付近の「曾々木ボケツトパーク」には、江戸末期に地元の人々が造立した素朴な表情の麒麟和尚の石像が置かれている。

トンネルを抜けると真浦海岸（ここから珠洲市）である。断崖には約三十五メートルの高さから直接日本海に注ぐ「垂水の滝」があり、特に冬場は季節風に滝の水が噴き上げられ、または凍りつき、海岸は「波の花」が舞うことで知られる。真浦町は入り江になった天然の良港で、平山隊の宿泊した真浦村権兵衛は『能登名跡志』にも「権兵衛などとして、よき百姓あり」とある。代々屋号「権兵衛」を名乗り、いま真浦区長を勤める南逸郎家がその子孫であるが、この日は留守だった。

③ 大谷村・兵左衛門（7/17）



真浦から国道沿いに進むと、海側に角花家の塩田と釜屋があり、「国指定重要無形民俗文化財 能登の揚浜式製塩の技術」の標柱が立っている。朝の連続テレビ小説「まれ」に登場した「元治さん」の塩田のロケ地だ。今は他にも数カ所、塩田が作られており、道の駅「すず塩田村」では塩作り体験ができる。

七月十七日、平山隊は片岩村甚左衛門方で昼休をとっている。海辺の国道から少し入った所に白山神社があり、その東側道路を挟んで、かつての肝煎・甚左衛門の子孫である南家がある。平山隊はそこから岩山が海へ突き

出した「クラ坂」（今は「鞍崎」といい鞍崎灯台が立つ）を越え、その峠から「佐渡国・粟嶋・船倉嶋并七嶋」を見ている。我々も観察したかったが、霧がかかっていたので諦め新鞍崎トンネルを通

って大谷町へ急いだ。

この日の平山隊の宿泊先は、大谷村兵左衛門方であった。肝煎を勤めた家で、現在も屋号「兵四郎」を名乗っている石田尚史家である。ここは敷地も広く、茅葺きの大屋根（今はトタンで覆われている）の見事な古民家である。以前は酒造業も営み、杜氏が住み込んでいたらしい。建物は築後およそ三五〇年といい、入り口からの土間や台所にかけてはほぼ当時のままの姿という。台所には自在鉤が下がっていたが、囲炉裏は塞がれていた。平山隊も一服したであろうその台所部屋の内部も写真に収め、辞去した。



大谷村・兵左衛門家の大屋根と350年を経た土間と台所



④ 折戸村・治左衛門(7/18・19)

七月十八日、平山隊は「船掛り能き綱なり」という天然の良港高屋村の甚左衛門方で昼休のあと、同村東にある徳保山に上り島々(島々の名はわからない)を測っている。今の県道も徳保山を上がつており、途中展望台がある。山の下あたりから「木ノ浦海岸」と呼ばれる景勝地である。『測量日記』に「是より海辺穴ノ口と云有て、不通行の所也。江嶋の宮の如し。夫より大嶋と云大石あり、大難所」とあるように海岸線を測ることが出来なかったようで、伊能大図でも測線は内陸を通っている。

折戸村での宿は治左衛門方であった。『珠洲市史』によれば、ここはもと十村であった刀祢次(治左衛門家で、昭和初期には宿を営んでいたらしいが、昭和三十九年(一九六四)絶家したという。その跡地は折戸川下流の高台にある真宗寺院永誓寺の下にあった。今は灌木が生

い茂り、グミの木がたくさんの実を付けていた。平山隊は雨天のため次の日もここ治左衛門方に逗留した。



奥の永誓寺と横長のブロック塀との間が刀祢家跡地

⑤ 寺家村・三郎兵衛(7/20)

七月二十日、平山隊は折戸を出発し、狼煙(のろし)岬を通って、狼煙村九郎右衛門方で休憩している。狼煙岬は平安時代より烽火が焚かれたところで、付近の海域は海難事故が多かった。今この岬を祿剛崎というが、能登半島最先端にあたり、外浦と内浦の分岐点でもある。高台に立つ祿剛崎灯台は、石川県最初の洋式灯台として、明治十六年(一八八三)に点灯した。フランス製の二等フレネルレンズは、約三五km先まで光が届くという。「日本の灯台五〇選」にも選ばれている。

次に、道の駅「狼煙」に隣接する「能登さいはて資料館」(狼煙町出身の河崎支部長が不定期に開館している)を見学した。地元の民具や農具、能登の祭りを彩るキリコ(奉灯)などとともに、伊能忠敬の加賀藩測量関係パネルが展示されていた。(「ガラクタ小屋」です：河崎) 平山隊の休憩した九郎右衛門家は、狼煙町集落の南端に位置する角田家である。旧家らしく広い敷地にいくつかの建物があった。

ここから平山隊は珠洲岬(実名は金剛崎)に至り、山・島を測った。『測量日記』に「佐渡国金北山、越後珍彦山、旗持山・米山・女神山・男神山、越中

立山・御岳等なり」とある。今の金剛崎は、観光施設「ランブの宿」の私有地となり、展望台や散策路が整備されて有料入場となっていた。岬の先端辺りで眺望を確認したが、薄霧に覆われ見通しは効かなかった。後日、河崎支部長が台風一過の朝に訪れて、佐渡、米山、立山等が水平線上に浮かぶ写真を撮ることができた。



2015年8月26日金剛崎から撮影した佐渡島 右が金北山(1172m)



越後の米山(993m)と思われる

※右の写真は、平山郡蔵隊も見た佐渡島と米山である。米山(新潟県柏崎市)の山頂からも能登半島が見えるに違いない。柏崎市の大泉寺からは「年に数回、能登半島まで一望できる」という。また、弥彦山(山の中腹に「能登見平」という地名がある。おそらく能登が見えるのだろう。

(河崎記)

平山隊はここから山越えて海辺に出て、寺家村の肝煎三郎兵衛方に宿泊した。子孫は三崎家を名乗り、現在も寺家地区にお住まいであるが、この日は訪問できなかった。

⑥ 飯田村・万屋又右衛門(7/21)

七月二十一日、平山隊は寺家村から海岸沿いに南下しながら測量し、蛸島村安兵衛方で休憩した。子孫は米谷姓と判明したが、数軒あつて特定には至っていない。

この日の平山隊は飯田村万屋又右衛門方に宿泊した。飯田村は『測量日記』にも「此所、家二百五六十軒。町並二家あり」とあるように、奥能登でも輪島と並んで当時から大きな集落であった。今も珠洲市の中心地である。地元の「飯田町を知る会」が編纂した『能登の飯田郷土史』の中に、安政四年(一八五七)の「飯田村家建并往来絵図」が翻刻掲載されていて、万屋又右衛門の屋敷が二カ所、又右衛門持の家が十六軒も確認できた。諸々商売を営み、家持ち地主であつたらしい。又右衛門の子孫は八木姓を名乗り、飯田町のメインストリートに面した広大な敷地に大きな蔵が四棟以上もあり、高い塀に囲まれた屋敷を構えていたが、二年前からは無住となつていらしい。



表通り東側から見た、間口・奥行ともに広大な
万屋又右衛門家



□ 部分が万屋の宅地、写真は←方向から撮影

平山隊と同様に、我々もこの日は飯田町に宿泊することになっており、「灯りの宿 まつだ荘」で夕食と歓談のひと時を過ごした。大星さんが能登島出身で船舶免許を持っているということから、次回の能登島探訪では測量隊の海上測量コースを、我々も船でたどれないかという話が浮上した。

⑦松波村・与五兵衛（7/22）

朝、我々は宿を出てまもなく、飯田の市街地から続く上戸町の国道二四九号線沿道に立つ明治期の「能登塩田再興碑」（高さ三・五m）を見学した。ここは藩政時代に加賀藩の御塩蔵が建っていた跡地と言われており、廃藩置県後、塩田に従事していた住民の困窮を見た区長の藻寄行蔵が県に窮状を訴え、行政の支援と義倉金によって製塩業を復興した。行蔵の亡くなった翌明治二十年（一八八七）、製塩業者が中心となり、その功績を称えてこの石碑を建てたものであった。

七月二十二日、飯田村を出発した平山隊は、おそらく塩田を右手に見ながら海岸線沿いに南下し、鶴飼村の忠右衛門方で昼休憩した。忠右衛門についてもその後裔が米村家と判ったが、現在三軒の米村家があり、後日確認することにして先を急いだ。鶴飼村から黒丸村へ向かう途中の海岸に、周囲が断

崖絶壁で高さ二十八mの見附島がある。「軍艦島」とも呼ばれる景勝地として知られるが、伊能大図を見ると実測はしなかったようで、二つの小さな島の姿で描かれている。

この日の正午過ぎ、松波村（ここから鳳珠郡能登町）地内の海岸で、平山隊は内浦を北上してきた伊能忠敬本隊と落ち合っ、ここに能登半島一周測量は完了した。合流した一同八名は同村の宿所与五兵衛『測量日記』には「後五兵衛」とあるが誤り）方に入った。夜は曇り空であったが、雲間から天体観測が行われている。

松波村は現在、鳳珠郡能登町松波となっているが、平成の大合併以前は珠洲郡内浦町の中心で町役場が置かれていた。かつての町役場隣にある福祉センターの駐車場で徳田さん及び、松波公民館の斎藤館長の紹介で案内をお願いした金七修氏と待ち合わせた。金七氏は若い頃新聞記者をしていた松波の郷土史家で、『能登松波郷土事典』や『松波の歴史散歩』等を執筆され、伊能忠敬についても記述がある。九〇歳を越えるご高齢ながら、自ら軽四を運転して現れた。

金七氏の説明では、肝煎与五兵衛は中谷姓で、測量隊が訪れた頃の与五兵衛は「中谷道栄」に該当する。仏教信仰に厚く詩文に長じ、能書家でもあった文化人で、宿泊した忠敬とも語り合

ったであろうと金七氏は想像する。その屋敷はかつての松波の中心通りの一つ「中谷小路」にあったという。



かつての中谷家のあった場所

手前の道路から電柱左側の屋敷地辺りまでが、かつての中谷家。ここで天文測量をおこなった。

次の日、伊能測量隊は海岸線ではなく「国道三里」を宇出津町に向かっており、地元で「木郎（もくろう）越え」と呼ばれるルート（現在の国道二四九号線）を通っている。（続く）

※輪島から飯田まで参加された大星氏は、「伊能ウォーク」と「完全復元伊能図全国巡回フロア展」でお世話になった、日本土地家屋調査士会連合会の元副会長 大星正嗣氏です。（河崎記）



伊能忠敬研究会香取支部間宮林蔵記念館視察 2015/11/5

香取支部だより

伊能楯雄

間宮林蔵記念館視察研修会について
香取支部主催により、平成二十七年十一月五日、支部会員、NHK大河ドラマ化推進協議会会員その他一般市民有志総勢三四名の参加をえて視察研修会を行った。

香取市の市民バスを利用しての和やかなミニ旅行、一時間程で茨城県つくばみらい市伊奈地区にある間宮林蔵記念館に到着、入口で間宮正孝氏（林蔵から五代目）及び市担当職員の方の迎えを受け、早速館内の案内説明をしていただく。

比較的小規模な記念館ではあるが、林蔵に関する各種資料が収集されている。達筆な直筆の書簡、精緻に描かれた蝦夷図、海岸線以外何も標すもののないカラフトの大図などに参加者は見入っていた。

記念館敷地内には茅葺の生家が保存されている。林蔵は十三才の時筑波山に登り立身出世を祈願したとのことであるが、一大探検家のこの地での少年期の心の内が想われる。

このあと、徒歩三分ほどの専称寺にある林蔵の墓地を詣でる。（六九才江戸の自宅で亡くなった林蔵の墓は江東区の本立寺にもあるとのこと。）

忠敬の弟子であり協力者であった林蔵ゆかりの地を訪れ、彼の生い立ち、業績をより深く知ることができ、有意義な視察研修会であった。

記念館をあとにし、笠間稲荷神社に参拝、開催中の菊人形展を楽しみ、帰路についた。

（あとがき）

今回の視察研修には、多くの地元市民の方々に一般参加していただいた。往復の車中では、木内信次支部長の挨拶とともに、香取禧良前支部長から伊能忠敬研究会発足の経緯と活動状況の説明、伊能敏雄会計からは大河ドラマ化推進についての理解と協力をお願いした。「伊能研」、「ドラマ化」を知っていただく良い機会と

もなった。

なお、上記三名のほか香取支部からは、成家淑子、本郷靖枝、伊能楯雄が参加した。

つまようじで「忠敬」

昨年六月に行われた地元佐原高校の文化祭「星輝祭」に、「伊能忠敬爪楊枝点描画」が展示され、地元紙にも大きく取り上げられ話題となった。

この度、この制作指導にあたられた担任の菱木京子先生に制作過程での御苦労話などについて、本誌への寄稿をお願いしたところ快くお受けいただきました。以下ご紹介します。

伊能忠敬爪楊枝点描画を作成

千葉県立佐原高等学校平成二十七年
度「星輝祭」出展制作 一年H組（四二名）
寸法 縦二四〇cm 横一六〇cm
使用した爪楊枝 八万二千五百六十本

文化祭のクラス企画で作成した拙い作品が立派な枠に収められ、ご甲欄に供するところとなり恐縮しております。本校の文化祭「星輝祭」は六月末に行われるため、企画は四月から考えます。高校で初めての文化祭をよく見学できるように、当日に自由時間のとれる展示がよいということ、爪楊枝による点描画に思い至りました。小さな発泡スチロール

の板に、染色した楊枝を刺して、つなげて大きな絵にする方法なら、部活動で忙しくても全員が参加できます。香取だけでなく各地から縁あって佐原に集まったのだから、佐原ならではの作品にしたいと話合つて、伊能忠敬がテーマにきまりました。

土日や放課後に交代で試作品を作りました。楊枝を染めるために、数種類の塗料を濃度を変えて試しました。また、楊枝を刺す間隔も様々に試しました。最も大変だったのは原画探しでした。本校の記念室にある忠敬先生の掛け軸の模写は、座像だったので地味すぎると不評。諏訪公園の像は姿はよいが、写真に撮ると雨の跡がスジになってきれいに加工出来ません。日本列島を歩く生き生きとした姿絵はないものかと探して一ヶ月以上経ってしまいました。困り果てて、いつも生徒の写真を撮ってくださる市内の写真館のご主人に相談すると、ご自身お持ちの写真を快く、提供して下さいとのこと。富岡八幡宮の忠敬像の写真で、日本地図がバックというイメージどおりのものに、「忠敬」の文字まで入れてくださいました。その画像をパソコンで加工して、A4四枚相当のモザイク原画を作りました。

縦三〇cm横二〇cmの板一枚に、一二九〇本、六四枚全部で八万二千五

六〇本の楊枝を使うことになり、予備も含めて一〇万本の楊枝を赤・青・黒・白・緑・黄の六色に染めました。たらいに塗料と楊枝を入れて一気に染め天日干しました。手も顔も体操服もカラフルに染めての楽しい共同作業です。入学してまだ二ヶ月足らずで、すっかり仲良くなっていました。

楊枝を刺すのは地道な作業です。一本一本確実に、まっすぐ同じ深さに刺すのは緊張を強いられます。指が痛くなります。紙ではモザイク画になったけれど、楊枝で本当に絵になるかも心配でした。そんな時、最初の一枚が完成しました。なんとそれは忠敬先生のお顔の部分でした。

このとき初めて成功を確認し、そこからは勢いずきました。一人一枚はノルマですが、二枚三枚作る子もいれば、細かい作業が苦手で手伝わってもらった子もいました。家族で仲良くつくった子もいたようです。持ち寄った板を集めてつないで、力強く歩く忠敬先生の姿が浮かんだときは、歓声があがりました。全員で一つのものを作ったという達成感・一体感は何とも言えないようがありません。大河ドラマ推進協議会の方が「御用」の旗をお持ちくださって展示に立体感が生まれ、みんなに見てほしいという意欲も出て、会場作りに力が入り

ました。入口から忠敬先生と同じ六九cm歩幅の足跡シールが案内するようにはしました。透明な板に書いた現在の日本地図と、忠敬先生の地図を重ねてその正確さを実感してもらうコーナーも作りました。インタビュをうけて、学級会長が「忠敬さんは、僕たちみんなの尊敬する地元出身の偉大な人です。」と言っていました。だが、子供たちの知識と発想の豊かさは私にとって大きな発見でした。

新聞やテレビの取材を受け、思わぬ大きな反響となりました。当日は多数の方のご来場で、当初の思惑とは違う忙しい日となりました。見知らずの大人の方が沢山声をかけて下さったことは生徒たちにとって得難い経験でした。お世話になっていく佐原の方たちに喜んでいただけるという喜び・幸せを、今回子供たちは知ることが出来ました。地道な努力の先に人の幸せがある。それが己のやり甲斐、生き甲斐につながるという大切なことを教えていただきました。

伊能忠敬は、一七七〇年かけて測量をしたのですが、生まれてからまだ一五、六年の生徒たちが、今後の長い人生で、この日のことを心に刻み、労を惜しまず世に貢献できる人物になることを期待したく存じます。

(担任 菱木京子)



爪楊枝アート「82,560本使用 伊能忠敬像」

伊能測量隊に随身した窪田浅五郎に
拘る路程車が発見された

窪田浅五郎については、測量日記に次のような記述がある。

・文化二年十二月七日 郡蔵、伊兵衛病氣。同所窪田浅五郎逢談を願に付、曆術を談ず。

・同正月二十日 ・廿日より岡山の弥右衛門、浅五郎、丈右衛門、三人隨身なり。

以降、正月二十三日から二月二十

日までひと月近くに渡って随身した。その二月二十日の日記の末尾に「今朝、窪田浅五郎、平松紹右衛門帰国。」(平松紹右衛門は備中国窪谷郡帯郷ノ内二日市村戸川大治郎知行所の大庄屋なり。地利を従学して窪田浅五郎と共に此所まで来れり。戸川の屋敷は飯田町もちの木坂にあり)と忠敬によつてしたためられている。

その後、窪田浅五郎は忠敬が用いた「量程車」と類似する測量器具「路程車」を設計したことが、記録に残っている。本年「路程車」が備前市歴史民俗資料館によって、地元の測量家・田淵弥三郎の子孫の家から発見され、展示されたとの便りがウエブサイト「イノペディア」の管理人をしている筆者に届いた。当事者の学芸員にレポートを纏めていただいたので報告します。(戸村 茂昭)

備前市歴史民俗資料館

井上 靖子

平成二十七年十月十八日から十二月六日(日)まで、備前市歴史民俗資料館において「江戸てくー東備と測量家たち」と題する企画展を開催した。当館では昨年度から、備前市内の村絵図やその製作者について調査してきた。その成果である新規発見資料を軸に、旧備前国内の測量

に焦点をあて、東備地域に残された絵図や江戸時代後期の測量家の資料を中心に展示を行った。

本展では、会場を2室に分け、前半に和算関連資料、備前市周辺地域の村絵図や下絵図を展示し、測量技術や絵図に関する基本を提示した。

後半では、これまで未研究だった測量家・田淵弥三郎の資料、弥三郎製作の村絵図、岡山藩士で測量家であった窪田浅五郎の資料をあわせて展示した。展示した資料の中から「路程車」を中心に旧備前国の測量家を紹介したい。



図1. 展示会の様子

(1) 窪田浅五郎
旧備前国の測量家を語る上で重要な人物が窪田浅五郎である。浅五郎(安永二年(1773)~天保九年(1838))は、江戸時代後期の測量家であり、備前の著名な曆算家・原田元五郎に

算術を学んだ。

元々農民層出身であったのが文化二年(808)岡山藩に召し抱えられ、同年、伊能忠敬の中国地方測量行時に備前庭瀬(現・岡山県岡山市庭瀬)から安芸忠海(現・広島県竹原市忠海)まで同行している。その後の第一次九州測量行・第二次九州測量行など、忠敬が岡山を訪れる度に交流を深めていたことが測量日記に掲載されている。

浅五郎は個人でも岡山各地で測量や観測を行っており、学んだ和算や測量術は現在残されている購入記録や著書からうかがい知ることができ、浅五郎が製作した測量器具こそ、「路程車」である。本展では窪田浅五郎関係資料として、「路程車」の設計図2点、窪田浅五郎著作の測量術本1点を展示した。

(2) 田淵弥三郎

田淵弥三郎(〜天保13年(842))は、江戸時代後期の測量家であり、今まで未研究の人物だった。田淵家の資料群には、製作途中の絵図から測量道具、台帳まで様々なものが含まれ、そのひとつ「御用留」からは、弥三郎が天保年間(830~1841)に備前国・備中国で一〇〇点以上の村絵図を製作したことが明らかとなった。家伝によると、弥三郎は江戸で技

術を学び、息子・幸次郎も絵図製作を引き継いで行っていたようである。

田淵家が最先端の技術を学んでいたことは、「路程車」を所有している点からもうかがえる。本展では、「路程車」を中心に、「御用留」や田淵弥三郎が製作した村絵図等を展示した。

(3) 路程車

伊能忠敬の全国測量によって忠敬が使った高価で貴重な測量道具も注目を浴び、引いて歩くと車の回転によって距離が測れる「量程車」は、各地の測量家が類似品の製作を試みており、岡山藩士の窪田浅五郎も「路程車」を作っていたことが、「路程車之図」や「測量留」等(窪田家文書「岡山県立博物館蔵」といった資料からこれまで判明していた。その「路程車」は「量程車」と同様の原理で成り立っており、距離を測る測量器具の一つである。

「窪田家文書」によると、路程車は文化九(22)年から製作され、備前・備中国の測量家や、肥後国から測量術を学びに来た原甚吉らへも路程車を渡している。今回見つかった「路程車」の特徴として、伊能忠敬が用いた「量程車」と異なり、目盛りが側面部ではなく上部についている点や軽量化に成功している点が挙げられる。

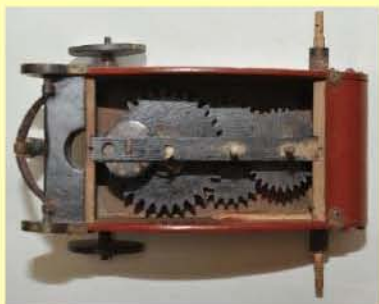


図2. 発見された路程車

右：外観、左：目盛りを外した内部(歯車構成)

本体 16.2cm×9.5cm×高9.37cm

車輪円周約2尺1寸

より詳しく仕組みを説明すると、単位が「間」の目盛りとして、一の位の目盛りは反時計回りに、十の位の目盛りは時計回りに、百の位の目盛りは反時計回りに、そして千の位の目盛りが覗き窓とおして見られるようになっていいる。そして、大きな方の車輪が三回転すると、六尺三寸(岡山藩内は六尺三寸二間)となつて、一の位の目盛りが一つ進む仕組みで距離が測れるようになっていいる。

伊能忠敬測量隊一行宿泊記念標柱除幕式

(二〇一五年二月一日)

―熱海市伊豆山「うみのホテル中田屋」にて―

熱海市北部の伊豆山温泉「うみのホテル中田屋」は、文化二年二月一七日(一八一六年二月一日)に第九次伊豆七島の測量隊が止宿した「温泉屋中田屋喜八」(『伊能忠敬測量日記』第七巻)の後裔で、享和元年(一八〇一)の創業以来、二四

年続いている老舗旅館です。総支配人で当研究会会員の橋本茂さんらスタッフによる地域の歴史勉強会のなかで、測量隊がこの宿に止宿したことを知り、玄関脇に記念の標柱を建立することになったということです。九次測量に不参加だった忠敬は泊ま

っていないませんが、第二次の伊豆沿岸測量時には忠敬もこの地を通っています。

一二月一日午後一時より、齊藤栄



熱海市長など地元の来賓、旅館関係者の出席のもと、伊豆山神社原

口宮司による神事および除幕の式典がおこな

われました。研究会からは渡辺名誉代表と鈴木が出席しました。伊豆山温泉は背後の山腹から湧き出た温泉が海に流れ下るところから「走り湯」とも呼ばれ、役行者小角によつて八世紀初頭に開かれたともいう国内有数の長い歴史を持つ温泉です。なお、本年二〇一六年度の総会は当地での開催を予定しています(別記)。

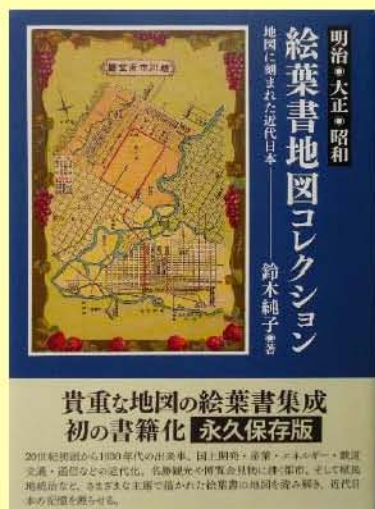
(鈴木純子)

二枚の写真は

「熱海ネットニュース」による



図書紹介



「絵葉書地図コレクション」

―地図に刻まれた近代日本―

鈴木純子著

(株) 明石書店 2700円＋税
A5、176頁 オールカラー

本会代表理事の鈴木純子氏による趣味の地図書です。

ご本人は立派な地図は収集できないので「せめて絵葉書でも」とコレクションしたと話されました。

本書にはそのコレクションから厳選された八二点が収録されています。

もとなつていのは、日本地図センター発行の地図ニュース(現、地図中心(月刊))の連載記事です。

書籍としてこれだけまとまると壮観で、装丁もよく紙質もぴったりで。

明治・大正・昭和三代に亘る出来事、国土開発・産業・エネルギー・鉄道・交通・通信などの近代化、名勝観光や博覧会見物に沸く都市、そして植民地統治など、さまざまな主題で描かれた絵葉書の地図を、地図専門家ならではの読み解きで近代化日本の記憶を甦らせてくれます。

時代を映す鏡ならぬ絵葉書地図本で、一読の価値十分の一冊です。

著者紹介

一九三九年東京生まれ、お茶の水女子大学卒業後、国立国会図書館でもにも地図資料を担当、専門資料部特別資料課長、同館定年退職後、二〇〇六年まで相模女子大学講師、現在伊能忠敬研究会代表理事・(財)地図情報センター幹事・日本地図学会評議員・他。編著書に「地図資料概説」・「最終上呈版伊能大図総覧」・「伊能図大全」・他

伊能忠敬測量日記 解説決定デジタル版

完成のお知らせ

二〇一八年は伊能忠敬歿後二〇〇年という区切りの年に当たります。これを記念して、伊能忠敬の事蹟史料や研究成果などを普及する活動を行っている「イノペディアをつくる会」が「伊能忠敬測量日記 解説デジタル決定版」を完成させ、頒布を開始しました。



パソコンで開いた各巻の表紙



28巻全巻収容のCD-ROM

特徴は次のとおり。

○ファイル形式はHTML形式

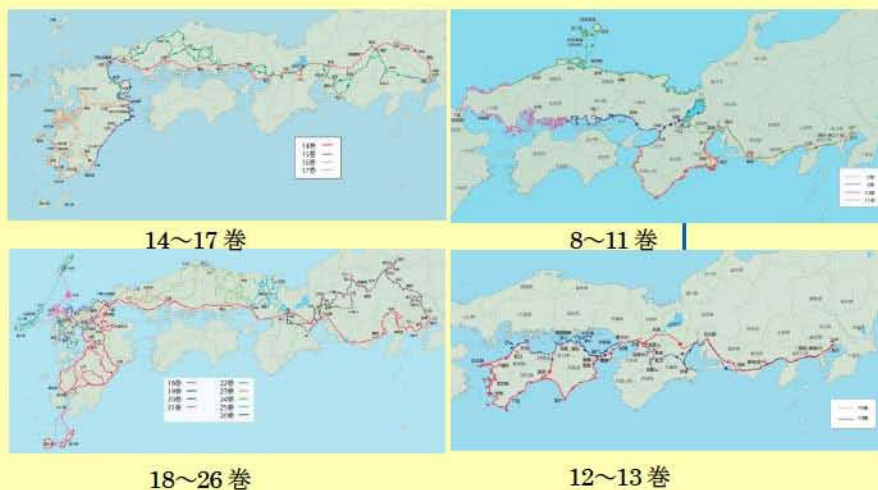
○地名・人名・日付などのキーワードによる検索が可能

○構成は、以下のとおり。

- ・前書き（測量日記の解説、凡例など）
- ・当該巻対応の測量経路図
- ・日記の日付による目次（日付クリックで当該日付けの本文にジャンプ）
- ・本隊／支隊別の目次（クリックで当該の本文にジャンプ）
- ・本文（支隊の本文は朱色で区別）

○伊能忠敬測量日記（原文）の二十八巻に対応した巻毎の個別のダウンロード購入が可能（価格は平均1800円前後）

※八巻以降の対象測量経路は左図のとおり



二十八巻全巻のダウンロード完成記念会員特価二万円。（平成二十七年未迄） 一般特価二・五万円。
ダウンロード或は購入申し込み先
<https://www.inopedia.tokyo/eshop/>

三治郎が日々くぐったであろう

小関家の長屋門

九十九里町の町史を図書館で何気なく開いてみたところ偶然、次のような趣旨の記事と写真が飛び込んできた。

「小関村の名主・小関五郎左衛門家の長屋門は、明治五年に親戚でもあった長柄郡浜宿村の斉藤家に移築された。」



写108 長門屋 白子町浜宿斎藤家
（旧小関村小関家にあった）古川力撮影

伊能忠敬の子供時代の証拠物件は皆無と言われていたのが、これはビッグニュースと思いい、大急ぎで車に飛び乗って現場に駆けつけてみた。残念ながら、昭和四十七年頃に処分されたとのことであった。
（戸村 茂昭）



会員だより

詩集『かんさつ日記』出版記念コンサート
千葉県市川市 柏木隆雄

平成27年9月20日、香取市佐原文化会館で開催されたコンサートに10名の会員が来聴されました。心より御礼を申し上げます。

この日、伊能忠敬賛歌「確かな一歩」が、浜田耕一氏（二期会）の歌唱、芹川紗世氏（武蔵野音楽大）のピアノで特別演奏されました。この歌は、現在もYoutubeで放映されています。
戸村茂昭氏の制作映像です。



詩集『かんさつ日記』刊行記念コンサート 2015.9.20

伊能忠敬研究会設立20周年記念総会

熱海市伊豆山温泉にて

6月4日（土）午後5時5分（日）

研究会設立20周年記念の総会として、今年は伊豆山温泉一泊の総会を予定しています。

内容・スケジュールはおおよそ次のように考えています。詳細は追ってお知らせします。

4日（土）午後1時～

熱海市起雲閣にて

総会・シンポジウム（公開）

シンポジウム終了後、伊豆山温泉

「うみのホテル中田屋」にて懇親会（同所泊）

5日（日） 巡検

測量ゆかりの地、伊豆山神社など

「うみのホテル中田屋」は別記のとおり、第九次測量隊が宿泊した宿です。昨2015年12月に記念の標柱が立てられました。眼前に相模湾が広がり、初島を望む温泉旅館です。総支配人の橋本茂さんが本会会員で、この企画に尽力していただいています。

また、総会会場の「起雲閣」（写真）は大正年間に別荘として建てられ熱海の三大別荘といわれた由緒ある建物で、熱海市の指定文化財になっています。



熱海市 HPより

ます。ふるってご参加下さい。

平成二七年度 年会費納入のお願い

同封の郵便振込用紙での納入にご協力ください。

2016年度の会費は5,000円です。

2015年度未納の方には、振込用紙に10,000円と記入しています。

2016年度まで納入済みの方には、振込用紙を同封しません。

ご自分の納入状況に疑問がある方は事務局までご連絡ください。

（振込先）

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00150-6-0728610

加入者名：伊能忠敬研究会

住所変更その他事務局への連絡は、通信欄をご活用ください。

その他、ホームページも開設しましたので、事務局への連絡、会員への情報提供等にご活用ください。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約 2000 字（704 字×三段または 480 字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的に JPEG 形式または TIFF またはフォトショップの PSD 形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで 350dpi 程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが 100mm×75mm で 350dpi のカラー写真の場合、1MB 前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて 5M モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合は L 判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPEG フォーマット）にしてください。カラー数の少ない図は GIF 形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CD などのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4-9-6 日本地図センター 2 階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第 79 号）は 2016 年 6 月発行 原稿の切は 4 月 30 日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台 4-9-6

日本地図センター 2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール inohken@idoudi.com

郵便振替口座 00150-60728610

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「伊能忠敬研究会」 伊能忠敬研究会のホームページ

<http://www.inoh-ken.org/>

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬 e 資料館

<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」 現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

○「伊能忠敬図書館」 忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記

◆本誌がカラー化されて久しい。◆画像編集で思うのが筆者の意図だ。◆富士山が見えることを示したいなら見えるように加工することに意味がある。だが、どのように見えるかを示したいとしたら話は別だ。◆印刷物の画像が実物イメージと違うのは当然だ。カメラは意図的に周囲から部分を切り出し、画像はカメラや印刷機によって加工される。編集過程で見る上での色合いと印刷物の色合いは同じにならない。だから経験がものをいう。◆投稿の際、原稿に張り付けた画像とは別に未加工の元画像があるとありがたい。元画像から加工する方が良い結果を生むからだ。だが他にも理由がある。元画像と貼り付け画像を比較することで筆者の意図を本文からとは別に推測できるからである。（S M）